
ゼロベース

篠坂鴟玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロベース

【Nコード】

N9241J

【作者名】

篠坂鴟玖

【あらすじ】

世界政府直下の特殊戦闘部隊、通称WGSFに所属する異種族^{フリーク}を意のままに操ることが出来る選りすぐりの精鋭^{ルーラー}《支配者》たち^{ドラゴンライダー}のこ^{ドラゴンライダー}とを人々は《竜騎士》と呼ぶ。父の背中を追う普通の軍人を目指していたはずの女の子（17歳）がひょんなことからそのドラゴンライダーになってしまった……。

現実の厳しさを知らない高校生が大国同士の戦争に巻き込まれながらもドラゴンライダーとして奮闘するおはなしです。

1話：日常風景

「レリア・シュープリー！」

「はいっ？」

バンツ、という盛大に机を叩く音と共に厳しい声で自分の名前を呼ばれ、あらぬところに飛んでいた思考が引き戻される。何事だとはちぱちと瞬きを繰り返しながら辺りを見回すと、またか、と呆れ気味な表情でこちらを見ているたくさんのクラスメートたちと、壇上で眼尻を吊り上げて声同様厳しい顔をしている我等が担任と目が合った。

「レリア・シュープリー。あなたはまたうたた寝ですか？わたしの授業がそんなにつまらないと？」

「……………」

担任のその皮肉たっぷりな言葉に思わずはいそうです、と頷きそうになってしまう。

「どうして授業中にあなたは眠れるのですか？可笑しいでしょう。」

普通の人なら寝ませんよ、普通の人なら」

…そんなに普通普通言わなくなつて聞こえてるよ。

目が合った瞬間にはじまった担任のネチネチ説教攻撃に私は人知れず溜息を吐く。

私が反省した素振りを見せるまでこの説教は終わらない。いつものことだ。しかしこの人も毎回毎回よく飽きないな、と場違いなことを考えつつ、私はいかにも反省してます、というような雰囲気漂わせて頂垂れた。もちろん、反省しているフリである。

言い訳をさせてもらうと、いくら私が日当たりの良い窓際の席という誘惑に負けて少し眠ってしまったからって、毎回毎回毎回毎回、そんなにネチネチネチネチ説教することないと思う。

いくら私が悪かったとしても、担任の授業中にうたた寝するのが今回がはじめてじゃないとしても、だ。

私だって少しも反省してない訳じゃない。ただ、そんなんだからあなたはいつまで経っても落ちこぼれなんですよ、とか少しは周りを見習って努力しなさい、とか、明らかに説教ではない、嫌味、もしくは八つ当たりに似た説教紛いのことをされても反省だなんてできるはずがない。

こんな大きなマンモス校の教師となるとかかるストレスだって半端なものではないと思うが、それを生徒、しかも私に当てないでもらいたい。

私はあんたの八つ当たりのために学校来てるんじゃないっての。説教紛いの八つ当たりを受けるたびにそう叫びたくなるが、そんなことをしたら停学になるかもしれないと思うともちろんできなかった。

……そもそも寝る私がいけないのもあるわけだし。我慢だ、我慢。女は忍耐力が必要なよ。

そんな想いを胸に白い机とホログラム式の教科書だけを視界に入れて精一杯反省してますアピールをする私に説教を浴びせ続けた担任は、しかしそれだけでは飽き足らなかったのか、突然「ドラゴンライダーが使役する竜について説明しなさい」と言い出した。

「…は？」

突然のことに驚いて伏せていた顔を上げると、ニヤニヤと人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべている担任が視界に入る。

落ちこぼれのあなたに説明なんかできないでしょう、と腹の立つ表情で語る担任に、もはや怒りを通り越して呆れの感情しか抱かなか

った。

「……………分かりました」

この陰険教師め生徒を体の良い八つ当たりに使いやがって職権乱用でクビになれ、と呪いの如く思いながら、表だけはいいい返事を返しておいた。しかし返事をした以上答えないわけにもいくまい。渋々ながらホログラム式の教科書を捲っていく。

少しページを捲っていくと、生物学の一番始めの項に2頭の竜の全体図とその竜についての説明が載っているページを見付けた。

政府直下の特殊戦闘部隊、通称WGSFに所属している異種族を思いのままに操ることのできる精鋭《支配者》^{ルター}たちのことを人々は《竜騎士》と呼ぶ。その名の通り竜に乗り国のためにだけに粉骨碎身する者たちのことを指すのだが、先生はそのドラゴンライダーが騎乗する竜の種類や生態諸々について説明しろと言っているらしい。なんだかなあ、と煮え切らない思いのまま、私は陰険な担任と早いとここんな説教終わらせてくれと訴えてくる周りのクラスメートたちの視線に急かされるようにして口を開いた。

「ドラゴンライダーが騎乗する竜の種類は主に2種類。ギドアと呼ばれる飛竜の中でも代表的な竜と、ガイアスと呼ばれる、こちらも飛竜の中で代表的な竜の2種類です。前者のギドアの生物学上の力テゴリは鱗板目中型飛竜科の爬虫類で、飛竜にしては小型な竜として知られています。このギドアはとも知能が高く、人の言葉や気持ち的的確に理解する能力がずば抜けています。それからギドアの特徴のひとつとして主人と認めた人間には生涯付き従う習性を持つために、軍にとっても重宝されています。しかしその反面、酷く好戦的な面もあり、誰彼構わず突っ込んで行くことがあるので主人となるドラゴンライダーは注意が必要です。後者のガイアスの生物学上の力テゴリは鱗板目大型飛竜科の爬虫類です。こちらは大型にし

ては小型な方ですが、それでもギドアより3倍近くの大きさがあります。性格はとにかく狂暴で人に懐くことが滅多にない種類なので、経験豊富なドラゴンライダーでも乗りこなすのは難しいとされています。しかし前者のギドアよりパワーやスピード、知能等の様々な面が上回ることから、こちらも軍に重宝されている竜の一種です」

…と、まあ。

突き詰めればもっと長ったらしい上に小難しくなるのだが、この2種類の竜の説明はこのくらいで充分だろう。担任曰く落ちこぼれである私ですら朗々と説明出来るほど、この竜たちの説明は基礎中の基礎である。大体、この世界に生まれ育った人間なら誰だって知っているようなことを説明しろ、だなんて私を馬鹿にしてるにも程がある。

案の定、陰険教師は私がすらすらとなんの落ち度もなく説明を終えたことが甚くお気に召さなかったらしい。隠しもせずに盛大な舌打ちをすると「まあいいでしょう」と偉そうに言い放った。

「……………」

こんな奴に今更かもしれないが、生徒がちゃんと答えられたのに舌打ちする教師がどこにいるよ、と憤慨しそうになる。

……生徒が、というか私限定か。

「それでは教科書の39ページを開いて——」

機嫌が急降下してゆく私を余所に、担任はやつと授業を再開させる気になったらしく文字が浮き出てくる黒板に指で字を書きだした。今まで担任の説教に付き合いきれないといった顔をしていた周りの生徒は指示通りに教科書を開いたり、メモを取ったりとやつと再開された授業を受ける気にいるみたいだったが、もちろん私は受ける

つもりなどない。

また説教を受けるなんてことにならないために一応メモを取っているフリはするが、担任の講義など右耳から左耳に抜けてゆく。

「この国、キルザイアが大国として栄えるきっかけとなったのは今から――」

授業が終わるまで後35分強。

担任の甲高い声でされる国の生い立ちとやらを聞き流しながら、私は周りを見付からないように欠伸を漏らした。

2話：テスト3日前

リゴーンリゴーン、と腹の底に響く鐘の音を合図に周囲の生徒たちが一斉に椅子から立ち上がる。私もそれに倣ってのろのろと椅子から立ち上がった。

「それではまた明日」

担任がお決まりの挨拶をしたところで今日最後の授業と今日1日の勉強から解放される。

途端にざわざわと騒がしくなる教室を出て行く担任を極力見ないようにして、私はどっすんと深く椅子に座り直した。

「……………」

身体から魂が抜けたように脱力して椅子の背凭れに寄り掛かる。

…まったく今日は散々な目に合った。

あの後やはりと言うかなんと言うか、授業には集中できなかった。メモひとつ取るにもめちゃくちゃ労力を要したし、担任の説明は要領を得なくてだらだらと長いだけで訳が分からないし、やる気なんかいつさら湧いてこなかった。

少々責任転嫁かもしれないが、あの陰険教師がいけないんだ、私に八つ当たりなんかするから。

「それでさあ、今度のテストのことなんだけど」

「ああ、進級テストのこと？なに、なんかあったの？」

「それがね——」

ぶーたれる私の横で、私を尻目に友人たちは今度のテストの話で盛

り上がっている。

ちよつとは気にかけてようよ、と思ったが、さっきの授業のように私と担任が衝突するのはわりと珍しいことではないので、最早放置されているらしかつた。なんて酷い。友達よりあんた等はテストをとるのね。

なんだか無償に悔しくなつて、気付け気付けとテスト云々で真剣に話し合っている友人たちに念を送ってみる。

「ちよつと、まだ不貞腐れるの？いい加減復活しなさいよ」

段々自分のやっていることが馬鹿そのものだと思ひが気付いたところに、ぶーたれながら恨めしいと視線で訴えていたのが伝わったらしい。友人のひとりであるアデラが呆れたように話かけてきてくれた。

緩くカールした綺麗な金髪を掻き上げながらむくれる私に向かつて彼女は溜め息を吐く。

「あんたとあの教師との小競り合いなんてもう日常茶飯事になりつつあるでしょ？一々構ってなんかいらんないわ。大切な進級テストだつてあるんだから尚更よ」

男子顔負けの男らしさですつばあん、と言ひ切るアデラの言葉に周りの友人たちも会話を中断してまでうんうんと頷いている。

みんな私よりアデラか。アデラの正論に着いて行くのか私を置いて！女の友情なんてそんなものなのね！と訳のわからない感傷に浸りながらも、正論故に言い返せないで言葉を紡げずにいる私に、アデラは座っていた椅子から身を乗り出して畳みかけるようにこう言つた。

「大体、あんたは不貞腐れてる暇なんかあるの？テストよ、テスト。テストがあるの。わかつてるの？しかも3日後よ？あと3日しかないんだから！それにただのテストじゃなくて進級テスト！去年の悪

夢を忘れたのっ？」

ああ嘆かわしい、と大袈裟に頭を抱えるアデラ、と友人A、B、C。オーバーリアクションだね、きみたち、と呑気にアデラたちのリアクションに感心していた私の耳に、何故かテストという単語が引っ掛かった。

…あれ？テスト？

テスト。テスト…？

「テスト……」

確かめるように口に出してから、私はやっと事の重大さに気付く。そうだ、テスト。ただのテストではなく、進級テスト。

そうだよテスト、悪夢の進級テスト！後3日しか時間がないだつて？そんなバナナ！

やっとこさ通常モードに戻った私の脳は既にショート寸前だった。八つ当たりされたからっていじけて授業放棄するんじゃないかった！今更、後悔と焦燥の念に駆られる私の脳裏を去年の悪夢が走り抜けてゆく。

去年の今頃、私は1年から2年に上がるための進級テストで苦しんでいた。

このプリゼーラ高等学院は世界屈指のマンモス校で、たくさんの学部及び学科があり、就職率も高いことからこの学院は偏差値も高く、並大抵の頭の良さでは入れないとされている名門校だ。

当然の如く毎年世界各国から受験希望者が集まるのでその数は半端なく多い。

受験する者が多ければ、必然的に脱落する者も多い。

そんな弱肉強食のような戦いに、あるうことが普通で名高いわたくしことレリア・シュープリーが、勝利を収めてしまったのだ。

父の背中を追って軍人になると志してから憧れていたプリゼーラ高

等学院の受験に受かるなんて、思ってもみなかった。

そりゃ受験するからには受かりたいと思つて死に物狂いで勉強はしたさ。

けどまさか本当に受かるとは思わなかった。

受かりたいなあまあ奇跡が起きない限り無理だろうけどH A H A H A H A ! みたいなノリで受験に挑んだのに、受かつてしまった。

幼い頃から憧れ続けていた名門校に受かった。自分でも信じられないような出来事で、これはもう奇跡が起きたとしか言いようがなかった。

2年経つた今でも、頭脳どころか実技も普通まっしぐらな私がこの学院に入れた理由はわからない。

まあ憧れの学校に運良く入れたんだからいいか、と嬉しい気持ちが勝つて、学院に入りたての頃は理由なんて口々に考えもしなかった。それがいけなかったらしい。

再三言うが、私は頭脳明晰でも周りからなにか飛び抜けてすごい能力を持っているわけでもない。普通なのだ、至って普通の一般人。その一般人が運の良さだけで世界屈指の名門マンモス校に入ってしまったのだから、さあ大変。

何がって？ ご察しの通り勉強ですよ、勉強。

周りは私みたく運とか奇跡とかじゃない、自分の実力で受かった本当に頭が良い奴ばっかり。授業だつてそういう人たちのレベルで展開されるわけだから、普通街道まっしぐらな私にそうそう理解できるはずもなく。

テストは毎回ボロボロのスタスタ。なんとか合格ラインギリギリを保って留年は免れているが、進級テストとなるとそうもいけなくなる。

進級の時期になると1年間で学んだことが凝縮されて出題されるテストのことを、その名の通り進級テストという。

このテストは普通のテストのようにここからここまでの何所かから出すよー、と親切に範囲が出されるわけではなく、1年間学んだこ

と全ての中から、なんの問題がどのように出題されるのかわからないというなんともデンジヤラスなテストである。

そのため定期テストのように簡単にヤマを張ることもできない。

普通の生徒なら進級テストくらいでここまで留年の危機には立たされないだろうが、今まで定期テストすらギリギリでやってきた私にとって、この進級テストは生死の境目と言っても過言ではなかった。去年の進級テストは実技でなんとか破滅的だった筆記を補ったが、今年は筆記試験より実技試験の方が難しいらしい。

じゃあ筆記はそんなに難しくないのね！と希望を持ちたいところだったが、どうやら去年と同じレベルの問題が出題されるらしく、私の希望は虚しくも木端微塵に崩れ去ったのであった。

それが約10日前の出来事。

こうなりやもう開き直るしかないんじゃないのかと思ったが、しかしキンの私に留年覚悟で開き直るなんて大それたことが出来るはずもなく、涙ぐみながら夜な夜な勉強をする毎日を送っていたわけなのだが、しかしラスト3日という貴重な時期になって担任との衝突で大事なテストのことが頭から飛んでしまったらしかった。

なんてことだ、担任の八つ当たり如きでテストのことを忘れるとは単細胞にもほどがある。

我ながら呆れる自分の脳みそ事情に、冷汗が噴き出してきた。

アデラの言う通り、テストまで残された時間は後3日。今日を入れないで後2日。

しかも今日は担任との（以下略）で授業を無駄に過ごしてしまった。

…これはほんとにヤバイ。このままだと確実に留年だ。

「どどどどど、どうしようアデラ！このままじゃ留年する……！」

ほんとに今更ながら成績優秀で名高い友人に縋ってみたが、「知らないわよ、あんたの自業自得でしょ」と冷たく振り払われた。ひどい鬼！

冷たいアデラにそうそう見切りをつけて、友人A B Cに助けると視線を向けると、悟ったような表情で顔を左右に振っていた。悟ったというか、諦めの眼差しというか…。

「みんな酷い…！」

協力的でない友人たちにやり場のない虚しさを抱えながら、私は最後の悪足掻き、もとい

死ぬ気の猛勉強をするために（みんなの憐みの視線に耐えられなかったとも言っ）教室を飛び出した。

大丈夫、みんなが冷たいのは私がやれば出来る子だって信じてるからこそその愛の鞭なんだって分かってるから……！！
本当は私ことが心配で心配で仕方ないんだよね！

「あの子、今年こそ留年しちゃったりして」

「うーん、可能性大かもね」

「ま、レリアのことも心配だけど、あたしたちだって余裕なわけじゃないんだし」

「うん、帰って勉強しましょ」

駿馬のように家へと走って帰って行く私の耳にそんな声が聞きた気がしたけれど、きっと焦って正常じゃない私の脳が勘違いしたに違いない。

気のせい、気のせい。

目の前がもややあん、と水の膜っぱいもので視界が悪いのも、きつと気のせい。

……のはず。

3話：淡い希望？

「……レリア、大丈夫？」

「うー…ん…、平気……」

なにか奇怪なものを見るような目付きで問いかけてきた友人にうへへと笑いながらそう返すと、友人は「…そ、そう？」と半ば引き気味に自分の席へと帰って行った。

平気とは言ったが明らかに平気には見えない私の状態に、友人だけでなく周りの人たちも気になるのかちらちらと視線を投げかけてくるのが気配でわかるが、今の私はそれに対してなにかしようと思う気力は湧かない。

机に突っ伏したまま、疲れきった目を休めるべく瞼を下ろした。

目の下にできている隈はきつと昨夜より酷くなってるに違いない。連日徹夜で勉強したことより、わからないテストを前に冷や汗を流しながら、それでもわからないなりにテストに取り掛かるという精神的苦痛が隈にキてるはずだ。

ああ、嫁入り前の女の子なのに隈の痕が残ったらどうしよう…。

3日前から徹夜続きだった自らの顔の酷いあり様を頭に浮かべてから、およ、自分の顔具合を案じる余裕が出てきたのかな、と思ったのも束の間、私の性格じゃあり得ない、これはただの現実逃避だなと思い直した。

先ほど終了したばかりの筆記テストの感想を敢えて言うのだとすれば一言、終わったな、であること考えれば逃避の1つや100はしなくなるというものだ。

「……ダメだこれ、私のパラダイス青春学院生活は今、終焉を迎えたのよ……」

「今から実技試験があるってのに燃え尽き症候群になってもらっち

や困るわよ、レリア」

思い出せば思い出すほどつらくなる約3分前のテストに学院生活終了の烙印を押された気分陥る私の頭上から、聞きなれた友人の声が降ってきた。

気力を振り絞って声のした方を見上げると、緩くカールした金髪をいつものように掻き上げて呆れ顔をしているアデラがいる。

「アデラ……」

「アデラ、じゃないわよ。なあに、そんな死人みたいな顔して。そんなに筆記テストできなかったの？」

助けを求めるように、よよよ、と伸ばした手は無視された。ちよつとくらいノツテくれてもいいじゃないか。

しかし真剣に私のテストの出来を案じてくれた彼女の言葉に素直に頷いてみせると、どういう訳か、アデラはなんとにっこりと嬉しそうに笑ったのだ。

「……………」

…彼女は本物の鬼なんじゃないかな。

その笑顔にただならぬ恐怖を感じながら、よく躑まれた犬のようにアデラの次の言葉を大人しく待つ私。

そんな私の無駄に緊張した面持ちが可笑しかったのか、アデラは先ほどは違う雰囲気ですこりと笑うと、こう切り出した。

「喜ばない、レリア。筆記がダメダメのあんたに朗報よ」

「……はい？」

アデラ様の話によると、今年の実技はやはり例年よりも難しいらしい。

なぜ突然、今まで通りの方針で行わなくなったかというところ、教育熱心なこの学校の学院長が、ゆとり教育は問題だ、今年より方針からゆとりを消去する、と仰ったらしく、今年からこの学院はゆとり教育を取り止めたそうだ。

ゆとり教育反対の先生方はこの学院長のお言葉に諸手を挙げて喜んだらしいが、私たち生徒にとっては迷惑以外の何物でもない。

特に私なんかは今の状態でも着いて行くのが精一杯なのになんてことしてくれたんだこんなにやるー、私が卒業してからゆとり前教育に戻してくれ、という気持ちでいっぱいであるが、今さら戻しちゃったものは戻しちゃったのだからどうしようもない、ここは女らしく腹を決めるとしよう。…しかし、腹を決めたところで留年の危機から脱したわけではない。

ところがアデラ様が言うには、このゆとり教育がなくなってしまうことで、私に有利になったところがあるというのだ。

今年の実技テストは、ズバリ《支配者》^{ルーター}になるための力を問うというものらしい。

ルーターとは、異種族であるイキモノと心を通わせ、互いを信頼し合い、彼等と共に生きる者たちのことという。

この世界で最もポピュラーな職業で、最もなるのが難しいともされている《支配者》^{ルーター}。

しかし正式なルーターになれば戦力に貪欲な軍や政府が高値で雇ってくれることや、ルーターというだけで富や栄誉が手に入ると言われていることから、なりたいたいと思う人は後を絶たないらしい。

このプリゼーラ高等学院はそんなスゴイ《支配者》^{ルーター}たちを何人も育て上げてきたことで有名な学院で、実際、ルーターになりたいと希

望している人が入ると言われている生物学科はどの学科にも物凄い差をつけて断トツトップである。

もちろんこの学院以外のどの学校でも生物学科は人気が高いらしい。その人気な生物学科に私も所属している。

私の夢はただの軍人で、本来ならルーターの資格など必要ないはずだが、女性は男性より体力や筋力が劣るので女性が軍に入ることが希望するのなら最低限として《支配者^{ルーター}》の資格を持つていなければいけないと軍内で規約があるらしい。

初めてこの規約を知った時は、なんじゃこりや男女差別か、と思っただが、諦めの早い私は軍がそう言うなら仕方ない、父のような立派な軍人になるべく、ルーターの資格を取るのだとこの学科に入ったのだった。

そんな学科の実技試験なのだからルーターになるための力を問うというテスト内容であることになんら不思議はないはずだ、が、ニンゲンではない生物を相手に若干17の子供たちが1人で手玉に取れとは、余りにも危険が伴い過ぎるのではないか、しかし学院はそんな危ないことを無責任に1人でやれとは言わないだろう、というのがアデラ様の見方だった。

つまり、今年の実技は単独ではなく複数でやる形の、それもテスト自体は難しいがそれ故に判定は甘い試験になるのではないかと、アデラは言うのだ。

「単独ではなく複数……。それも甘い判定……。なるかも知れない……？」

アデラが教えてくれた話は本当に朗報だった。

特に1人で、ではなく複数でのテスト、という辺りが。

「じゃ、がんばんなさいよ」と去って行った彼女の背にありったけの感謝の気持ちをぶつけて、現金にも復活を果たした私は思うのだ。これならいけるかもしれない、と。

淡い希望を胸に実技テストの会場に向かう私はまだ知らない。
これから起こる出来事が、私のこれからを変えてしまうだなんて、
そんなこと。

4話：実技会場にて

「……わお」

初めて入る訓練施設に思わず感嘆の声が漏れた。

透明なドームの天井を目指すように鬱蒼と生い茂った木々だけを見ると植物園を思わせるこの訓練施設は、危ないイキモノを自然に近い形で飼っている建物のことだ。

細かく説明をすると、《支配者^{ルーター}》になるために自然に近い状態で生きていく凶暴な異種族の生態を知ることや触れ合うことなどを目的に造られた施設のこと、本来なら3年にならないと出入り許可が下りない危険な場所で、私たちのような下級生が入れるような場所ではない。

今年の実技試験がルーターになるための力を問うというもので、特別にテスト受験生である私たちは出入りを許可され、今ここにいるという訳なのだが、それってよく考えなくても凄いことなんじゃないんだろうか。

3年になるまで出入り許可が貰えないような場所に、テストだからとは言え出入りができるなんて…。

そんな事実に感動したのはどうやら私だけではないようで、あちこちから「わあ」とか「すごい」とか「嬉しい」などの驚嘆の声が聞こえる。

普通なら入れない場所に今いるのだと考えると、これから実技のテストがあるなんてことは忘れてしまいそうになっているのはどうやら私だけではなかったみたいだった。とゆーか私としてはがっつり忘れてしまいたいところなんだけどな。

「それでは、これから進級テスト実技の部の説明を行います。こちらに集まって下さい」

しかし現実はその甘くない。

毎年、実技テストに立ち会うことになっている学院長の言葉に現実を突き付けられた私は、素直に動き出した生徒たちの波に乗って指定された場所まで移動する。

学院長が立つ教壇近くまで全員が移動し終えると、いつも厳しい顔の学院長がいつもの3割増くらい厳しい表情で口を開いた。

「いいですか、皆さん。まず始めに忠告しておきます。この建物内はあなたが思っているより遥かに危険な場所だということを必ず頭の隅に入れ、軽率な行動は慎んで下さい。ここに生息している異種族^{リック}から我が身を守る術をあなたたちはまだ知らない。自分のためにも、仲間のためにも、落ち着きと冷静さを持って行動して下さい」

物珍しさからきよろきよろと周りを見るのに忙しなかった私を含む生徒たちは、学院長の言葉に皆一斉に緊張した面持ちとなった。

そうだ、初めて入るからといって浮かれてばかりいられない。

3年にならないと出入り許可が下りないという建物の中に、まだ2年にもなっていない私たちが入ることは非常に危ない。

当たり前だ、人の言葉が通じない凶暴な生物を相手に私たちは今から挑もうとしているのだから。

ざわざわと騒がしかった雰囲気は学院長の言葉で嘘のように静かになっていた。

皆が皆、自分たちの軽率な行動を反省しているらしい。

ルーターは戦場などの危ない所に赴くことが少なくない職業なのでいちばんに冷静さと

どんな状況でも揺るがない精神が求められる。

そのルーターを目指しているにも関わらず、冷静さの欠片もなかったと愁傷に反省して大人しくなる生徒たちを見て、学院長は満足そうに頷いていた。

その慈愛に満ちた表情を見て、さすが名門学院のトップ、鶴の一声とはまさにこのことだ。如何なる時も生徒の身を案じ厳しく、それでいて優しさに溢れた言葉と態度で生徒一人一人を正しく安全な道に導く素晴らしいお人で…、などと誰もがそんな感じの感情を抱いたことだろう。

現に学院長を尊敬の眼差しで見詰めている生徒もちらほらいる。

私だってゆとり教育を止めてしまったことをさすがに許すことはできなかったが、まあ許容範囲かな、とまで思ってしまうほどには感銘を受けたのに。

「じゃないとゾウに食べられちゃうゾウ」

…この人はそんな氷点下のようなさつむい親父ギャグで今を時めく若い生徒を爆笑の渦に巻き込めるとでも思ったのだろうか。

強面で有名なあの学院長がにこりともせず発した言葉は、感動しかけていた生徒諸君を固まらせるには十分過ぎる威力だった。

………言葉がないとはまさにこのことだ。

みんな凍り付いたみたいに動かない。

第一なんであんな真剣で生徒思いなことを言った後にそんな下らないことを言うのか。

空気が読めないだなんてもんじゃないぞ学院長…。

緊張する生徒たちを和ませるために言ったのか、素で言ったのかは定かではないが、ズレた学院長の発言により場の雰囲気微妙になったのは確かだった。

「それでは、改めてこれから進級テスト実技の部の説明を行います。きちんと聞いていて下さいね」

固まる生徒もなんのその。

学院長はさくさくと話を進めてしまふ。

「まず今年の実技は先ほど言ったようにとても危険です。護衛係りの先生方がついてるとしても、テストを受けるのは他でもないあなたたちです。絶対に気を抜いてはいけませんよ。なのでそう言った事情を考慮して、今年はひとりではなくチームで受けてもらうことにしました。ルールは至って簡単です。この施設内のフリークには階位でポイントがつけられています。そのフリークたちを4〜5人で組んだチームで、決められた時間内に協力しながら捕獲して下さい。もちろんただ捕獲するのではなく、ルーターらしく、です。心を通わせ自分の意思で操ることができるように。制限時間は25分。捕まえてきたフリークのポイント合計が合格ラインを超していれば実技試験は合格です。合格ラインは120点としましょう。…実技試験の主な説明はこのくらいですね。なにか質問はありますか？」

さらさらー、と流れるように試験の説明を終えてしまった学院長は、未だポカーンとしている生徒たちを見回す。

その様子を少し可笑しいと思ったのか学院長は首を傾げたが、誰も挙手をする生徒がいないので「それでは試験を始めましょうか」と後ろに控えていた先生たちに話かけた。

「え、ちよっ…！」

「はい！質問あります！」

「はいはいはいーい！」

「階位ごとにつけられたポイントはどのフリークが何点なのか教えてもらえないんでしょうかー！」

「チーム編成はどうするんですか！？」

それを見た生徒たちは大慌てで競うように手を挙げる。

きつとみんなあのギャグが気になって口々に話を聞けなかったんだ

ろくな…。

…私もだけど。

突然嵐の如く騒ぎだした生徒たちに学院長はまた首を傾げた。

その後ろの先生たちは逆に納得したような、安心したような顔をしていて、ああ、先生たちもあのままじゃ今年は留年する子が増える
と懸念してたんだろうなあ、と思った。

「制限時間を過ぎてしまったらペナルティーとかあるんですか？」

「特別ポイントの高いフリークはいるんですかー！？」

実技のテストを開始するのには、まだもう少し時間がかかりそうだ。

5 話：実技試験開始と共に

異種族^{フリーク}の階位と言うのは、フリークの強さの段階やレア度を指す。上から順にSS、S、A、B、C、D、E、F、Gと下がっている。で、いちばん上がSS、いちばん下がGとなっている。

この階位はそのフリークの強さや貴重さを元に世界規約で決められているもので、言わば一種のステータスみたいなものだ。

それから一般の人々に危機感と安心感を持ってもらうためにつけられたとも言われている。一般人がペットとして飼ったり仕事のパートナーとしていいとされている階位はG〜Dまで。C、B、A、S、SSは人に過大な被害を齎^{もたら}すことがある危険生物とされ、政府が一般の人間が飼ったり使役するのを法律で禁じている。

そういう風に見えるような危険を示すことで普通の人たちが危機感を持ち、危害が及ばないようにするのかなんとか。

まあ、Bランク以上になると見た目が明らかにアブナイから自分から近づく人もいないと思うけど。

政府はそれを厳しく取り締まっているので学院の訓練施設で飼育されているフリークたちもその法に則っているのかと思いきや、これが違った。

設備の整った軍公認の建物内では、Bランクまでのフリークを飼育することを政府に許可されるらしい。つまるところ、この世界屈指と謳われるフリーゼラ高等学院はその軍のお墨付きとやらを貰っている、訓練施設で危険と言われているようなフリークを飼っているということだった。

それってめちゃくちゃ危ないんじゃない？

「……生死に関わる実技のテストってどうよ」

隣で顔を真っ青にしている友人（きつと私も似た様な顔色）にそう

聞くと、「あたしたちって《支配者^{ルーター}》っていう職業なめてたよね…
たぶん」という返事が返ってきた。

うん、確かに…。

彼女の言うことは最もだと思う。

危ない職業だと認識はしていたがまさかルーターを目指しているだけでこんなに危険っぽい目に合うとは思わなかった。

この世界に生まれたのなら誰でも一度は憧れるだろう職業。

とにかくルーターになることは凄いのだとそんなアバウトな夢だけ見て入学した人もいるだろうに、それでも生徒からは誰ひとりとして「《支配者^{ルーター}》になるのを諦める」という言葉は聞こえない。

多分、普通の学校に通っている同年代の子より精神的には私たちの方が強いんじゃないかな。だからだと思う。

誰ひとりとして投げ出そうとしないのは。

この1年間でみんな強くなったんだろうな、きっと。

そんな人たちの中に私もいるのだと思うと誇らしい反面、なんだか情けなくなった。

私はそんな立派な人じゃないよ。

ルーターになるの諦めたとは言わないけどね。

「レリア！」

落ち込みモードに入ろうとする私の背中に声がかかる。

振り返ってみると、透明なドームの天井から射し込む日差しに輝いている金髪が見えた。

「アデラ！」

モノクル型のスコープを片手に走ってくる彼女はもうやら次にテストを受けるらしい。

私は頼りになるアデラと同じチームになりたかったが、チーム編成

が出席番号順だったので不可能だった。

生徒からは自分たちで好きなように組ませるとブーイングがあったが、好きなもの同士でチーム編成をするとフェアじゃないということとで生徒の希望は先ほど却下された。

その方が変な争いが起こらないと言っるのは頷ける。

もし自由にチーム編成していたとしたら私と組んでくれる人なんていなそうだ…。

「ちょっとあんたまた落ち込んでるの？よくそんなに一々落ち込める材料見付けてこれるわね」

「ぐさっ！」

私の目の前まで走ってきたアデラが開口一番にそう言った。相変わらずひどい！

アデラの言葉が私の心臓に突き刺さる。

ふざけてなにかが胸に刺さった振りをすれば、アデラはバカじゃないのと微笑んでくれた。

よかった、さすがのアデラもテスト直前は緊張してるかなと思ったけれど、そんなもの杞憂だったようだ。

いつものように卑屈になりかけていた私をばっさり切り捨ててから、彼女は不敵に笑う。

「ふっふっふー、見てなさいよレリア。トップで帰ってきちゃうからね！」

制限時間25分以内に帰ってこれたらボーナスポイントが加算されるという話を聞いてから、アデラのテンションは異常だった。

…勝負好きだとは知ってたけどまさかこんなに熱くなるとは思わなかったよ。

ちなみに25分をオーバーしたらペナルティーがあるらしい。

私としては時間ぴったりに帰ってこれたらそれでいいやという気持ちなので、アデラの熱くなる気持ちはイマイチ理解できないが、それでもメラメラと闘志を燃やす彼女を応援しようという気持ちはもちろんあるので、笑って「うん、アデラならできそう」と言っただけだ。

…熱過ぎるアデラに若干頬が引き攣っていたかもしれないけど。

「…それ褒めてるのよね？なんか別の意味も混じってる感じがしてそこはかとなく腹が立ったのだけだ」

「まっさかあ！」

「……まあいいわ。とにかく他のチームに負けてなるものですか」

自信満々でやる気満々なアデラを見ると、こちらまで出来てしまつような気になるから不思議だ。

大丈夫、アデラがいるチームなら余裕でいちばんとれるよ。

「そろそろ次のチームの人たちは集まって下さい」

「お、いよいよですね、アデラさん。頑張ってきて下さいな」

「もっちゃん！」

試験管の集合命令に従って元気にスタート地点へ駆けて行くアデラの背に手を振りながら、私は隣の友人に話しかけた。

「こういう厳しい環境で会った友達って一生もんだよね」

「レリアとアデラはそうかもね」

「うへへへ」

「きつもちわる」

「…ぐすん」

出席番号順に５チームごと訓練施設に入っていく試験方法なので、

生物学科所属の現1年生、総勢168名が全員受け終わるのはいつになるんだろうか。

アデラは出席順に行くとAなので順番が早かったが、私なんてRだぞ…。

どれだけ待てばいいのかな、こんなんじや夜が更けちゃうよね。

早く終わらせてしまいたい気持ちと後回しになって嬉しい気持ちと、それを遥かに上回る緊張に苛まれつつ、友人たちと下らない会話で暇つぶしをしながら自分たちの番を待つ。

…しかし。

「みんな遅いね…」

「…うん。もう25分経つよ」

アデラを含む25人が施設に入って丁度25分が経った。

入って行つた5チームのうち、まだ1チームも帰ってきていない。変だ、他のチームはともかく成績優秀なアデラがいるチームまでこんなに遅いはずがない。

待機所に残った先生たちが生徒に付き添って行つた先生に連絡をとっている。

慌てた様子の先生たちにさすがにこれは可笑いぞ、と生徒の誰もが思い始めた時だった。

「なんだ!？」

「きゃあっ!？」

ずしいん、と腹の底に響く震動と、硝子が割れる耳を劈くような音が訓練施設の方から聞こえてきた。

瞬時にテストの緊張ではない、別の緊張がみんなの顔に走る。

「なに…?」

爆発、した？

誰かがそう呟く。

なにが起きたのか私を含む生徒や先生たちはまったくわからなくて、その正体突き止めようと音のがした方に皆一斉に顔を向けた。

見えたのはきらきらと光を反射しながら地に落ちて行く大小様々な大きさの硝子の破片と、ドームの天井にぽっかりと開いた穴から灰色の煙が立ち上っているところだった。

嘘でしょ。

また誰かがそう呟く。

もしかしたらそれは、私の声だったかもしれない。

6 話：我が身と友の身

「避難して！」

「さあ早く！」

怒鳴りつけるように叫ぶ先生たちの声を聞きながら、私はなににも出
来ずにその場にただ呆然と立ち尽くしていた。

もうもうとドームに開いた穴から立ち上る煙は灰色を通り越して黒
になりつつある。

まさかこんな事態になるとは誰も思っていなかっただろう。

やはり私たちは《支配者^{ルラー}》という職業を甘く見ていたのかもしれない。

「レリア！なにやってんの！？あたしたちも避難するよ！」

「え？……あ……」

立ち上る煙からはなせなかった視線が友人の声で逸らされる。

声がした方を向くと早くと手招きをしている友人と目が合った。

「ここも危ないから早く出ない！」

「あ」

なにやってんのよもう早くしなさい！と怒る友人に言われてやっと
気付いた。

私はなにをぐずぐずしていたんだ。

がらがらと音を立てて除除に崩れていく訓練施設と横隣に面してい
るこの待機所にいたら危険だなんて火を見るより明らかなのに。

ばさっ、としていた私を待っていてくれた彼女に申し訳ない気持ち
になりながら私はやっと出口へと走り出す。

「ごめんっ！」

「ホントに危なっかしいよねレリアって！」

真剣に謝る私に友人は笑ってくれた。

しかしその表情も一瞬で厳しいものに変わる。

「中の人たち、大丈夫かな…」

追いついた私と共に走り出した彼女は心配そうに後ろを振り返る。
私もそれに倣って振り返ると、丁度、施設の窓硝子が地面に落ちる
ところが見えた。

「っ！」

スローモーションで落ちていくように見える窓硝子の動きに思わず
息を呑む。

地面に吸い寄せられるようにして叩きつけられた硝子はがしゃあ
ん、と大きな音を立てて盛大に砕け散った。

その様を見て、友人の問いかけに言おうとしていた大丈夫だよとい
う言葉は喉の奥で消えた。

…大丈夫なわけ、ない。

あんなに煙が出るのだ。中はきつと激しく燃えてるに違いない。
異種族フリークが逃げ出さないように特別頑丈に造られている訓練施設の建
物が、あんなにボロボロと壊れていつてるのに、簡単に大丈夫だ
なんて言えるわけない。

「だい、…じょうぶだよ」

それでも自分自身に言い聞かせるかのように、無意識に私の口から

は便利な言葉が滑り落ちていた。

大丈夫。きつとみんな助かるはずだ。

違う言い方をすると、そう信じていないと、どうにかなくなってしまっ
そうだった。

「…そうだよね」

本格的に全力で走るために前を向いた友人が私の言葉に頷いた。
彼女もそう信じないといられないのかもしれない。

「……………」

「……………」

互いに無言になったまま、とにかく出口を目指す。

がらからと背後から聞こえるドームが壊れて行く音の間隔が、段々
と狭くなっていった。

「……………」

真剣に前だけを見て走らないといけないのはわかっているが、背後
から追いかけてくるように聞こえるその音に、どうしても取り残さ
れただろっ同級生たちのことが気になってしまう。

後ろを振り向きそうになっは慌てて前に向き直ることを走りなが
ら続けていた私を見兼ねてか、無言だった友人が私の顔を窺いなが
ら口を開いた。

「レリア、アデラのこと心配なのはわかるけど、あたしたちが行
ってもなにもできないし、先生たちに任せるしか…」

アデラ。

友人の言葉に私は目を見開く。
そうだ、なんで忘れてたんだろう。
彼女はまだ、あの建物の中にいる。

「レリア!？」

気付いた時には足が勝手に動き出していた。
待機所から我先にと出て行く生徒たちの波に逆らって、今まで走ってきた道を戻って施設を目指す。
驚いて私の名を呼ぶ友人や止まれと叫ぶ先生の声振り切るように全力疾走で施設の中に入った。

「アデラ……！」

入口周辺はまだ煙が蔓延していないようで建物の内部を遠くまで見渡すことができた。

しかしアデラの姿は疎か、他の生徒の姿も見えない。
もつと奥にいるのか。

すぐに奥へと走り出そうとしたが、この広過ぎる施設内を今のこの状況で走り回って探すことは不可能に近いと思い直す。

取り敢えず、どこがどんな所なんだか確認するべきだと思い、確か入口付近には案内板があったはずだと周りを見渡すと、先ほどの大きな爆発の風に巻き込まれたのか見るも無残なボロボロの状態の案内板が地面に横たわっていた。

こんなの読める状態じゃない。

一瞬にして頭の中が白くなった。

危険を伴うルーラーという職業を目指すにあたってこういう状況にぶち当たった場合、どんな行動をとればいいのか授業で散々教えられたはずだが、都合良くその授業の教え通りに身体は動いてくれない。
第一、頭の中が真白になって思考するどころじゃない。

どうすればいい、どうすれば、アデラを見付けられる？

真白になる頭で、それでもとけななしの理性で懸命に打開策を考えようとするが、いい案が浮かぶどころか更に頭の中が白く塗り潰されていくだけで、なにも考えられなくなる。

「シュープリー！」

空になっていく私の脳内を揺らす厳しい先生の声が背後から聞こえた。

避難するどころか自ら危険な場所に入って行った生徒を連れ戻しにきたのだろっ。

ばたばたと遠くで走り回る足音に、身の危険ではない危機感が芽生えた。

こんな入口付近でうろろしていたら捕まってしまう。

とにかくここから離れないと。

しかしどこを目指せばいいのかわからない。

それでも早くここから動かないと、連れ戻される。

そのことがまた、私の気持ちを焦らせる。

どうしようどうしよう、頭の中はこの5文字でいっぱいだ。

取り敢えずどこかに走りだしてこの難を逃れてもいいのだが、見当違いな方向に向かったらアデラを助けるどころか犬死してジ・エンドなのは目に見えていた。

「…あれ……？」

自分で考えた最悪な考えに、今更になって己がどれだけ危ないことをしているのか認識した途端、脚に力が入らなくなった。

脚が震えて膝が笑う。

…このままじゃ、私も死ぬかもしれない。

その事実に関頭が混乱する。

今、私は立っているのか座っているのかも、わからなくなった。だって地面を踏み締めている感覚がない。

煙が段々と奥の方から私が佇む出入り口に忍び寄ってくる。

その灰色の影に赤い炎がちらちらと見え隠れしているのも見えた。

「シュープリー！」

背後からは先生の声。

「返事をしなさいシュープリー！」

さっき聞こえた時より声が近くなっていたが、どうやら蔓延してきた煙で私の姿が確認できないみたいで、正確な居場所までは把握できていないみたいだった。

「あ……………」

ここにいます、と叫びたかったが、喉が震えて声が出ない。

それに居場所を伝えてしまったらアデラを助けに行けなくなってしまっ。

それじゃあ本末転倒だ。

……助けに行けなくなる？

自分が思ったことにはっとした。

助けに行けなくなるだって？

こんな状態で、まだ助けに行こうとしてる？

こんなに、脚どころか身体中が震えて声すらでないのに？

…無理だ、無理。

だって怖い。

身体が動かない。

すぐそこまで炎と煙が迫っていて、奥に進める状況でもない。

それに、この状態で行ったて、私はなんの役にも立たないんじゃないか。

このままじゃ私まで死んでしまう。

——嫌だ。私はまだ、死にたくない。

でも、でもじゃあ私が諦めたらアデラはどうなるの？

先生たちが、助けてくれる？

「シュープリーー!!」

「な……」

突然耳元で名前を呼ばれて我に返った直後、凄い力で二の腕を掴まれた。

「いった…!」

思わずその手を振り払おうとして後ろを振り向くと、そこには厳しい顔をした学院長がいた。

もう、追いつかれた…？

突然の出来事に私は掴まれていた腕を振り払おうとしていた動きを止める。

「……………」

「学院長……？」

厳しい顔でなにも言わない学院長に恐る恐るそう問いかけると、ぎりぎり腕に学院長の指が食い込んだ。

「がく、いんちょ……」

「っあなたは！自分が今やっていることがどれほど危険なことなのか理解して行動しているんですか!? 《支配者^{ルラー}》になるのを夢見て

いるのなら冷静さとなにごとも揺るがない精神を持ちなさいとあれほど……！！」

余りの強さに眉を顰めていたい、と続けようとした言葉は学院長の怒声に巻き込まれて消えた。

声を震わせて最後まで言い切れずに押し黙ってしまった学院長は、自分を落ち着かせるように一度大きく息を吐く。

それから啞然としている私の目を見て、戻りましょう、と言った。

「え……？」

学院長が言った言葉が、頭の中でぐるりと回る。

理解できないわけじゃないのに、耳から入った言葉が消化できないでいて。

「…戻りましょう、シュूपリー。ここも時期に火の手が回る」

「いつ、いやです！だってアデラが…！」

「シュूपリー…！」

この期に及んで、動きもしない身体で、本気で心配してくれている学院長の想いを裏切ってまでアデラの元に行くと言い張る自分に吐き気がした。

だって、わかっていた。

本当は、始めからわかっていた。

きっと今から助けに行っても、間に合わないってことくらい。

先生たちが中の生徒を助けに行かず、外の生徒を避難させることも、きつともう無理だと、助けられる生徒を優先させているのだと、わかっていた。

だってこんなに燃え盛る建物の中に少なくとも25人はいるはずなのに、悲鳴ひとつ聞こえない。

聞こえるのは建物が崩れていく音と、フリークたちのけたたましい鳴き声だけだ。

ヒトの気配がない。

掴まれている腕が酷く痛んだ。

「…シュープリー」

学院長が聞きわけのない子供を諭すように私の顔を覗き込む。

早く行こうと瞳で語られている気がした。

わかつている。

理解は出来るけど、諦めたくない。

助けに行かなきゃ。

きつとアデラは私以上に怖い思いをしているはずだ。

私が今、感じている恐怖なんかとは比べものにならないくらい。

怖かろうとなんだらうと、私は。

「…行きましょう」

掴んだ腕を緩く引つ張られて、助けたいと思う自分の意思とは裏腹に、私は学院長の後をのたたと歩き出した。

出口に近付くにつれて、現金な私の身体の震えは段々と治まってく。

助けなきゃ。

そう思っているのに、足は意思を裏切って前へ前へと進んで行く。

「……………」

諦めたわけじゃない。

きつとこれが最善な方法なのだと自分自身に言い訳をして、硝子が落ちる音とものが燃える臭いを背に私は学院長に連れられて訓練施

設を後にした。

7話：おもい

「……レリア」

気遣うように後ろからかけられた友人の声に振り向かないまま「なに」と味気なく返事を返した。

その私の返事の素っ気なさに友人が一瞬、先を続けるのを躊躇うのが気配でわかったが、謝る気力も言い直すつもりもない。

私のことを心配してくれている友人に八つ当たりをするのは筋違いだと頭では理解しているのに、荒む感情を上手くコントロール出来なくて、それがまた余計に心が荒れる原因になる。自分の不甲斐無さにイライラしつつも、声をかけたまま何も言わなくなった友人に意識を向けた。

あまりにも冷たすぎる私の物言いに立ち去るのかと思ったが、動く気配はない。

どうやら優しい彼女は八つ当たりをされてもなお、この場から離れようとしないで、その上私のことを傷付けないように刺激しないようにと言葉を選んでいようだった。

その優しさが今の私には痛い。

「…元気出して、なんて無責任かもしれないけど、でも、レリアがそんなんだとアデラが浮かばれないよ」

「……わかってるよ」

友人のその言葉が耳に刺さった。

クラスメイトたちの突然の訃報に落ち込んでいるのは私だけじゃなくて今後ろにいる友人や他の生徒たちも同様に沈んでいるというのに、私は一体なにをしてるんだろう。

他の生徒たちは悲しんではいるが私みたいにひとりで拗ねて周りに

八つ当たりなんかしていないのに。私だけがただ子供みたいに現実を受け入れようとしないで、あまつさえ周りに当たり散らすだなんて、考えるまでもなく最低だった。

「……レリア」

「だいじょうぶ。ちゃんとひとりで帰れるから」

朝からこの場所を動こうとしないでいる私を家に連れて帰ろうとする友人の好意をにべもなく跳ねのけた。

今の自分が最低だと気付きながらも態度を変えられない自身に吐き気がする。

いつそのことこんな態度しかとれない私のことなんか嫌いにでもなつて見捨ててくれれば気持ちになるのに、現実はずくづく甘くない。

頑なに動かないと全身で語る私の説得は諦めたのか友人は「……家に着いたらメールしてね」と言い残して去って行った。

「……………」

そういう友達思いで甲斐甲斐しいところが彼女に似ているから、優しくされるたびに苦しくなるのだ。だから私は今の友人に八つ当たりばかりしたのかもしれない。

思い出したくないことを、思い出すから。

本当にいつそのこと、誰からも嫌われたと思った。

大切な親友すら助けられなかった私に、優しくされる資格がないとか、そんなことしか考えていない私なんか。

学院長に連れられて施設を後にした私は精神的な疲労からなのかシヨックからなのか、見る見るうちに力が抜けてその場にへたり込み、そのうち目の前が真っ暗になって身体が傾くを感じて、気が付いたら自室にいた。

どうやら施設を後にしてすぐ私は気絶をしまつたらしく、担任が自宅まで送ってくれたのだと母が言っていた。

次の日、学校に行つてみると全校集会なるものが開かれて、昨日の惨劇の詳細が語られた。

異種族^{フリーク}を収容している頑丈な建物が突然爆発した理由は、残念ながらよくわかつていないらしい。なにしろ施設はほぼ全焼。おそらく生徒とフリークが衝突したことが原因だというのが最有力の候補らしいが、とにかく証拠がなにもないのでやはり詳細は定かではない。一番重要な生存者は、内部で飼育されていた異種族^{フリーク}はもちろんのこと、中にいた生徒と引率の先生たちの誰ひとりとして確認されなかったという。

こういふ言い方は不謹慎かもしれないが、それでも被害が最小限で済んでよかったと学院長が話を締め括つて全校集会は終了した。

生徒25人、教員4人という犠牲者を出して、私たちの進級テストは幕を閉じたのだつた。

後味の悪さとこれからの不安と、それから友人や知人を亡くした虚無感を残して。

全校集会が終わつた後はあんなことがあつたばかりだという理由で生徒はみんな帰された。

明日からは通常通りの学園生活に戻るらしいが、私にとってはそんなことどうでもいいことだつた。全校生徒がほぼ帰つた後でもしごとくここに残り続けている私を先生たちが注意しにこないのは、学院長の計らいか、それともただの偶然か。あの立派だつた施設は見る影もなくボロボロで、原型がわからないくらい無残な姿のまま私の前に佇んでいる。今日の夕飯はなんだろう。明日の予習をしなくては、とそこまで考えて、さっきまで自分が思考していたことと違ふと気付いた。先ほどまで明日のことなどどうでもいいと思つていたのに、今はもう明日の、しかも授業の心配をしている。

「……………なんだ、それ」

現実逃避もいいところだ。

自分自身を持てていない。明日に思いを馳せることで、現実から目を逸らそうとしているのが丸わかりだった。

支離滅裂なことしか脳内には浮かんでこなくて、なのに全部に意味なんかわなくて、しかも全て話が繋がらないようなことばかり。でも、ほとんどが必要なことだった。

今を生きる私にとって、明日のことを考えるのは必要なことだ。生きている、私にとっては。

「……………アデラ」

私は生きているのに彼女がいないのがとても不思議だった。

いくら名前を呼んでも彼女は答えてくれない。

わかっていて。誰に言われるまでもなく、理解している。けれど、不思議だった。

私がいるのにアデラがいない。その事実が可笑しいと思った。

なんでいないのだろう。私がいるのに彼女がいない。どうして。

「……………私が、助けられなかったから」

自問するまでもない。答えは私自身である。

私がここに無事でいることが答え。

昨日からこんなことばかり考えている。

あの時本当に学院長に連れられて外に出たのは正解だったのかと、あの時の私のあの行動は間違っていないかったのかと、そんなことばかり。

アデラがいない。

それは、私だけのせいではないにしても、私が苦しむには十分な事

実だった。

助けてあげられなかった、だなんておこがましいことは言えないが、私は私が許せない。

あの状況じゃ仕方ない、助けに行こうとしただけでも私はアデラのことを想っていたのだと、自分に言い訳をしている自分が。

だってそうじゃん。あの状況でもし私がアデラの元に辿り着いたとしても、私の倍以上も力と知識があるアデラが自力で助からなかったんだから、私が行ったってねえ。

頭の片隅でもうひとりの《私》がそう囁く。

でも、果たして本当にそうだったのだろうか。

2人でなら助かったかもしれないのに？

可能性はゼロじゃなかったはずだ。

もし私がアデラの元に辿り着いたとして、私とアデラが力を合わせていたら、助かったかもしれない。

限りなくゼロに近い可能性だったかもしれないけど、ゼロじゃなかったはずだ。

結局、私は我が身可愛さに逃げ出したただけだった。

アデラを助けたかった気持ちに嘘偽りはない。

それは誰になんと言われようと胸を張って言える。

でも、それだけだ。

助けたかった気持ちだけ。

私は彼女を、助けられなかった。

「……………」

お腹の底がぐつぐつと煮え立つような思いが湧き上がる。

それがなんの感情なのか私にはわからなかったが、綺麗な感情じゃないのは確かだった。

目の前で凄惨な火事の痕を残す施設が段々とオレンジ色に染まっていく。

視線を空に移すと、雲ひとつなかった青い夏空は鮮やか過ぎる橙に色を変えていた。

「……………帰ろ」

口に出さなければ私は延々とこの場を離れないような気がした。帰ろっ。

確かめるようにもう一度呟いて重い足を引き摺った。

アデラがいなくとも、私の日常は私を無視して進んで行くのだから。

8話：恐怖する転機

ずるずると重い足を引き摺るようにして帰路をひたすら歩く。

父が軍人で普段まったく家にいない我がシュープリー家は、母と私それからペットの鳥との3人（？）暮らした。たった3人、しかも一匹は鳥ということで大きな一軒家ではなくそこその広さなマンションで暮らしている。

私たち家族が住むマンションはここ、首都・フォスマーギルの都市部から少しばかり離れたところにある。しかし都市部から離れているとは言え、首都は首都。

閑散としたところはこの辺りにはまずないはずだし、なんらかの理由で賑わっていてもなんら不思議ではない。

：なんら不思議ではないはずなのだが、今日は少しばかり違うようだった。

この角を曲がって後は直進すればすぐ家だと角を曲がった私の視界に飛び込んできたのは、決して狭いとは言えないわりと幅のある路上に犇めくざわざわと賑やかな人の群れだった。

一瞬なにかの祭り催しかと考えたが、みな一様に空を見上げて、ある一点を指さしたり携帯を構えていたりと動きが忙しく、見るからに見物人だか野次馬だかの集まりっぽい。

これはどう見たってなにか事件があったに違いなかった。

騒ぐ人々を見て私は無意識に眉間にしわを寄せた。

様々な人種や種族が集まってくるこの首都で大小なりとも事件が起こるのはそれほど珍しいことではない。普段の私ならその思いのままに何事もなく素通りするか、もしくは一緒になって少しだけ見物していったかもしれない。

けれど今はそんな気持ちにはとうていなれなかったし、なんてことない顔をしてこの場を通り過ぎることも出来なかった。

なんてことない、ただの小さなわかだまり。悪いのは自分。それで

も思ってしまう。

呑気でいいよね、と。

私だって昨日の件があるまであそこでああしてワイワイしている人たちとなにも変わらなかったはずなのに、事件の当事者となった今はおこがましくも思ってしまう。

気分が悪い、と。

見物人たちに罪はないが無責任に騒ぎ立てる彼らに腹が立った。

本当は、立ち止まるつもりすらなかったのに。

自分は関係無いと思うことももしかしたら無責任なのかもしれないが、それでもあんなことがあった以上、どんな事件だろうが関わりたくなかった。

それに事件はよく起こるが、比例するように警察や軍の対応がいいので遅くとも後数分もすればこの現場にどちらかが到着するだろう。私がいようがいまいがなにも変わらない、とすごいとかなんでとか、警察はまだかとかという人々の声を聞きながら足早に路上を塞ぐ人ごみの中を抜けようとする。

気にならないと言ったら嘘になる。でも、それでもやっぱりここにいるのは耐え難かった。

とにかく足を動かして密集した人の間をすり抜けて行く。

人ごみは私が思ったよりも大きかったらしく、中々抜けられない。もしかしたら私がこうして悪戦苦闘している間にも人が集まり続けているのかもしれない。

そんなことを考えていたら段々と人の波が薄れてきた。

ああよかった、もう抜けられる。

嫌な思いから逃れるように駆け足で残り少ない人波を進む。

ほとんど人波から抜けられた所で、ほっと息を吐いたのも束の間だった。

「……………っ!!」

轟音。

鼓膜をぶち抜くほどの大きな振動が空気を揺らした。

「なんつ……！」

どう考えてもそれは背後からだった。

本能的に背後を顧みようとした私の背が轟音と共に巻き起こった爆風で押され、身体が揺れる。なんとか転倒こそは防いだものの、急いで後を振り返るとそこは酷い有様だった。

私の周辺にいた人たちは私同様転倒は免れたみたいだったが、轟音の原因付近にいた人たちはほとんどがドミノ倒しのように重なり合って倒れこんでいる。

幸い大怪我を負った人はいないみたいだが、それでも負傷者は見る限りたくさんだ。

あちらこちらに地面を彩る赤が見えた。

「きゃあああああ！！」

「なんだ！？」

「邪魔だ退けっ！」

「いたいよお！おかーさん！」

突然の出来事に錯乱して逃げ惑う人々。

轟音の原因から少しでも遠ざかろうと近くにいた他人や知人を押しつけ、あるいは踏み付け、押し合いながら全力で逃げて行く。

そんな風に我を忘れてまで安全を確保しようとする人たちをただ眺めているだけの私は、きつとんでもない大馬鹿者決定だ。

私も逃げた方がいいだなんて考えるまでもなく当然のことなのに、足が動かなかった。

思い通りにいかない。

こんな経験が前にもあった気がする。

アデラを、助けようとした時だ。

恐怖と混乱で身体が利かない。

燃え上がる施設と立ち上る黒煙が脳裏に蘇る。

フラッシュバックにも似た感覚。

あの事件を彷彿とさせるこの場所から今すぐに逃げ去りたいのに、やはり思いに反して足は本当に頑なに動かなかった。

……私こんなばっかだ。

半ば諦めと虚しさの中、すっきりとした眼前に意識を集中させた。私の前にはもう人ひとりいない。きつとみんな遠くに避難したのだろう。

何かが落下してきたせいで醜く挟れたコンクリートの道路、もうもうと土煙を上げるその向こう側に揺らめく影を見た。

その姿を認識して、思わず息を呑んだ。

爬虫類に酷似した姿形。しかし一般的なあの蜥蜴や鰐などとは到底比べられないようなイキモノ。

太く長い首に尻尾、全身を覆うのは見るからに硬質な鎧状の鱗、胴体から伸びる四肢は強靱そのもので、手足の先で煌めくのは抜き身の刃物同然の爪。

頭からその先々に至るまで全身が凶器と恐怖の塊。

轟音の原因。

それは尾を入れておよそ4メートル弱の全長の、竜だった。

竜。鱗板目竜科爬虫類に分類される異種族^{フリーク}の総称のことだ。

人間や一般の生物とは比べ物にならないとされている力を持つ数あるフリーク共の中でも群を抜いて圧倒的な力を誇る怪物。食物連鎖の頂点に君臨する王にも等しい存在だとされている、竜。

空の王者、世界の一部、真実を知る者。

錚錚たる呼び名で畏怖されている、そんな存在が、どうしてこんな街中に？

わからない。わかるはずもないが、今私の目の前には竜がいる。それだけが事実だった。

どうすればいいと頭の中で考えるが、生憎と竜と遭遇した時の対処方など習ったことがない。ともすれば恐怖で崩れそうになる膝を支えるので精一杯だ。

どうすればいい、と思考していた私の頭は次第に現実を見詰められなくなっていく。

足は動かないが首なら辛うじて動く。助けはまだかと、私は竜に気取られないようにそうつと、空を仰いだ。

「……………」

この世界は人間と異種族^{フリーク}が共存する世界だ。

しかし共存していると思っっているのはあくまでも人間だけであって、フリークたちはそうは認識してはないだろう。フリークの人への認識はきつと餌だとか障害物だとか玩具だとか、よくて小うるさい隣人程度に違いない。

フリークにとって人間はぽつと出の邪魔な存在に過ぎないはずだ。だから排除しようとかどうかしてやようとか、そんなよからぬことを考えるフリークがいても可笑しくない。実際、人と徹底的に敵対しているフリークもいる。

それなりに知性や理性がある種族ならばそういったものに気持の折り合いもつけられるのだろうが、本能のままに生きているフリークとなるとそうもいかないみたいだ。腹が減ったから人里に行こうとか、つまらないからニンゲンで遊ぼうとか、意味合いは違えどとにかく人間は的にされやすい。

大袈裟過ぎないかと思わなくもないし、なにより人間がたくさん住んでいる場所なんかには好き好んでやってくる奴もそうそういないような気もするが、我ら人間はフリークに対してあまりにも脆弱だ。

だからこれは保険だと政府は言う。なにかあつた時のための。

それ自体に大した力はないが、政府が許可していないもの、すなわちフリークなどの生物が触れると世界政府直下の特殊戦闘部隊、通

称WGSFの本部にすぐさま知らせが行くらしい。

侵入者だと。

言うなれば電網だ。はっきりと視認することは出来ないが、ぼんやりとした網目模様の結界のようなものが国全体に張り巡らされている。

あれがなにで出来ていて何処から国中を包みこんでいるのか私たちが国民は残念ながら知らないが、あれが一種の警報装置だということは周知済みだ。

あの電網を通り抜けなければこの国自体に入ることとは不可能だから、当然政府は何者が国に侵入したことなど把握済みだろう。

…軍の人間がこの場に駆けつけるまで時間の問題だなあなんて考えたが、どうやらこちらも時間の問題みたいだった。

小さい、しかし背筋を凍らせるには十分な低い唸り声が入る。

現実逃避のように軍がくることがだけを今まで考えていたけれど、ずっとそんな状態でやり過ごせるかと言ったらそんなことは絶対ないわかっていたけど、大分苦しい現実だ。

上げていた視線を恐る恐る眼前に戻すと、薄れてきた土埃から這い出てくる竜の姿が見えた。

「っ……………」

息が、できなくなった。

竜は空の王者と称されているように空中でこそ本来の暴力的な力を発揮するフリークだが、地上でも他を寄せ付けないほどの十分な強さを誇る。それこそ十分過ぎる力を持つフリークなのに、今私の目の前にいる生物はおおよそ王の名に相応しいとは言えない有様だった。

逞しい肢体は血に濡れ、蝙蝠にも似た竜の象徴たる翼も無残に破れている。見るからに硬質な鱗は所々本体から剥がれてしまっていて、身体を守る役目を果たしていない。

身体中にある傷痕からは大量の血液と共に桃色の肉が見えてしまっていて、下手をしたら瀕死の状態だ。恐ろしいほどの生命力と寿命を持つ竜とて不死なわけではない。

身体を引き摺るようにして落下地点から進み出てきた全知とされる竜の黄金の瞳には、知性の欠片もなかった。痛みで我を失っているのか、それとも自身をこんな状態まで追い詰めたものに対する憤怒でだろうか。

その凶暴さしか映していない二つの金が辺りを探るようにぎよりと動いた。

「あ……」

背筋を氷塊が滑り落ちていく。

竜の視界に捉えられたら終わりだと本能的に感じた。

心臓が痛い。

一生分の心拍数を今使い切るのではないかと思うほど暴れる心臓と、震えだす手足。

恐怖に叫びだしそうになるのをなんとか堪えるだけで精一杯だった。金の眼が獲物を探して動く。

瞳孔が開いた瞳が獲物として捉えたのは、…幸か不幸か私ではなかった。

年の頃は十歳前後か。私とは反対側の路上で腰を抜かしてしまったのか座り込んでいる。

緩慢とも思えるような動作でぐるりとその場を見渡した竜に目標とされてしまったのは私ではなく、私同様逃げ遅れてしまった少年だった。

瞬きもせずに両目を限界まで見開いて少年はなにも出来ずに固まっている。きつと恐怖で動けないのだ。もしかしたら状況判断すら出来ていないかもしれない。竜の背を眺めているだけの私でもこんなに怖いことから、あの少年は…と考えるだけでも恐ろしかった。

標的を見つけた竜は瀕死ながらもゆっくりと尾を振りながら歩きだす。

少年は相変わらず動かない。

あの竜にはきつと理性なんて欠片も残っていないのだ。今ここであの子供に襲いかかってもなにも変わらないのは火を見るより明らかなのにとただ本能のままに目の前にいる餌に喰らい付こうとしている。竜が足を進めるたびに血液が辺りに飛び散る。

少年は、動かない。動けないのだ。

私もまた、動けなかった。

頭の中が真っ白だ。

違う。

真っ白ではない。

色々な思いと場面が脳内を駆け巡っていた。

施設。炎。煙と悲鳴。爆発音。足音。怒鳴り声。

…それからアデラ。彼女の笑顔。

竜の歩みは止まらない。

少年の顔色は青を通り越して白かった。

アデラも、怖かったんだろうか。

今の私よりも、もしくはあの少年のように。

アデラ。

考えるよりも先に、というより気付いたら、だった。

あんなに動かなかった身体が動いて、足元に無数に散らばっていた竜が挟ったことで砕けたコンクリートの破片をしゃがんで掴む。そのコンクリートの破片の重さと冷たさを頭のどこか感じながら、手の中のそれを、竜の背に投げつけた。

9 話：合った視線

我ながら馬鹿なことをしたなあと思う。

でも仕方ないじゃない。

気付いたら身体が動いていた後だったのだから。

でも後悔はしていない。

今のところは、まだ。

「…今のところは、だけどね」

見事竜の背にクリーンヒットしたコンクリートの破片が地面に落ちてかつんと音を立てた。

ゆっくりと首だけを捻って竜がこちらを向く。

ぎらぎらとした輝きを放つ黄金が私を認識した、途端だった。

今までとは比べものにならないくらい恐怖と威圧感が身体を襲う。

肋骨が軋む。額からは汗が噴き出して膝が笑い、思考が一気に全て

吹き飛んだ。

後悔よりも先に死を覚悟した。

殺されるんだらうと確証もなく思った。

竜は私をただ見ているだけでなにもしない。それが余計に恐怖を駆り立てた。

「…っ、いいこだから」

喋る、という動作にここまで労力を費やしたのは初めてかもしれない。今後はそんな経験したくないなと場違いに思いながらカラカラに乾いてしまったくちびるを舐めた。

「…いいこだから、自分の居場所に帰りなさい。あなたのいるべき

所は、ここじゃないでしょう?」

心臓が暴れる。手足は尋常じゃなく震えるし、汗は滝のように身体中を流れるし、やっとの思いで絞り出した声は掠れている。

本当はみつともなくともいいからこの場から叫んで走って逃げ出したい。

けれどこの竜に背を見せれば、瞬く間に殺されるぞと本能が告げる。私をここに留めているのは微かな意地と理性と、本能だった。

「……………」

単語ひとつを口から発するのが苦痛で仕方ない。

思考は相変わらず飛んでいったままで、自分でもなにを言いたいのか今なにを言っているのかわからない状態だ。

それでも、それでも私は口を開かなければ、と思った。

「あなたが探している相手は、きっとここには、いないから。ここにあなたがいても、あなたを含めていい、思いをする人はいないと思わない? だから、お願い。あなたのためにも、私たちのためにも、あなたはあなたの居場所へ帰るべき、…でしょう?」

恐怖で息が続かないため大分途切れ途切れな話し方になってしまいが、私の言葉は目の前にいる竜に伝わっているのだろうか。思考回路が正常に働かない今、文法や常識を気にする余裕などない。きつと色んなところが可笑しいだろう。

伝わっているのかいないのか、竜は首を捻って顔だけをこちらに向けたままだ。

なにも、しない。

燃える金の双眸は、未だに狂気を孕んだまま。

人間の分際でなにを偉そうにとでも思っているのか、それとも考え

てすらないのか。

どちらにせよ私が危険な現状は変わらない。

「……お願い」

訴えるしかなかった。

ひ弱な人間の私なんかいくら重症を負っているとしても、異種族^{フリーク}の頂点に君臨する竜に力で叶うはずがない。

とにかく訴えるしかなかった。

あなたにも私たちもここで争っていいことなどないのだと、それを伝えるしかなかった。

「…帰ろう、よ」

あの少年はどうしたんだろう。

蒼白な顔をして動けなかった少年を思い出す。

確かめたかったが、今、竜から目を離すわけにはいかない。

…どうにか逃げられたといいんだけど。

竜は、まだなんのアクションも起こさない。

ただ黙って、なにをすることもなく、視界に私を収めている。

「っ、お……願いだから…っ」

そろそろ限界かもしれない。

手先と足先に血液が巡っていないのか感覚がなくなってきた。

息がし辛くて、頭の芯がぼんやりとする。

竜の瞳はそれ自体が本物の凶器なのだと授業で習ったことがあった気がした。

なにがどうして凶器なのか、この状況下だからなのかかもしれないけれど、残念ながら忘れてしまった。

でも身を以って体験した。そんな体験御免被りたかったが、成り行き上仕方なく。

間違いない、あれは凶器だ。あの眼に捉えられたが最後、自分が今死ぬことは決定事項なのだと悟って、その通り死んで逝くのだろう。頭が中心がくらくらとする。

視界がじんわりと滲んで、滲んだその世界で竜が動くのが見えた。

「ドラゴンライダー
《竜騎士》だ!!」

ああもう確実に死ぬんだと私が覚悟を決めたのと、誰かが背後で叫ぶのは同時だったと思う。

その巨体を私向きで正面に正していた竜が空中に視線を走らせる。それにつられて私も竜と同じように視線を空へと持って行こうとしたが、それは叶わなかった。

「わっ……」

がくん、と突然膝が折れて私は情けなく地べたにへたり込んでしまった。

《ドラゴンライダー
竜騎士》。

どうやらその言葉を聞いて緊張の糸が切れたらしい。

助かるのかもしれないと一抹の希望が今更心中に湧き上がる。

足腰に力は入らないけれど、身体の震えはそれだけで大分おさまっていた。

…相変わらず現金な私。

やっと大きく息を吐いて空に目をやる。

電網が僅かにちらついて見える空を背景に、小さな点が二つ見えた。

…ドラゴンライダーだ。

本当によかったと胸を撫で下ろして、それからはつとした。

極度の安心感から忘れていたが、そういえば私はまだ竜の眼前にい

るのだった。

なんたる失態。慌てて視線を前に戻そうとすると、なにか大きなものが動く気配と強風。

強い風に目を細めながらも風の発生場所に目を向けると、血飛沫を上げながら翼を動かし、その巨体を空へと持ち上げようとしている竜の姿があつた。ばさばさというより轟々という羽ばたきの音が鼓膜に叩き付けられる。破れて傷付いた翼でもあの程度ならまだ飛べるらしい。…余談過ぎるが、竜本体のあの巨体を蝙蝠のような薄い皮膜で出来ただけの翼でどう持ち上げ、しかも空の王者と称されるほど縦横無尽に天を駆け巡るのは人類にとつての永遠の謎だ。

竜はドラゴンライダーとの衝突を避けるためにこの場を去るつもりらしい。

自分の状況と状態を考えて撤退を判断出来るのならもう大丈夫だろう。

なにがどう大丈夫で私はなんのつもりで竜の心配をしているのか意味不明だったが、とりあえず安心した。

羽ばたきの音の間隔が段々と狭くなって巻き起こる風も強くなる。強風に煽られる私には目もくれず、竜はそのまま空高く飛び立たつ…のかと思いきや、地面から2〜3メートル離れたところで突然の空中停止。

空中停止、というかホバリングだ。器用に翼を一定の速度で上下させてその場に留まっている。

「え、ちよつ…」

空中停止したままの竜は、あろうことか私を見下ろしていた。

今ここに急行しようとしているおおよそ竜にとって脅威になるだろうドラゴンライダーでも、私たちを囲むようにして周囲にいる見物人や野次馬でもなく、竜は私を見下ろしている。

頬が引き攣るのがわかった。偉そうに帰れ帰れと指図した人間の小

娘だけは腹が立つから仕留めて行こう、とか考えているのだろうか。私のばか！なんであんな偉そうなこと言ったんだ！

今更悔いても意味がないが、どうすればいいかわからないこの状況でそれは酷というものと、誰に文句を言うわけでもなく心の奥底で呟いた。

「っ……………」

目が、合ってしまった。

私のことを凝視している竜と竜を見上げている私の視線が合うのは必然だ。

けれどあの瞳を見たらお終いだとさっきの経験で身に沁みていたから合わせないようにしていたのだが、そうそう自分にとって脅威となる存在から意図的に視線を外せるものではない。つまり私の努力は無意味で下らなかつたというわけだ。

防衛本能で恐怖に身を固くした私が竜の瞳に映り込む。

けれど私のことを見詰めるその瞳は先ほどとは打って変わって知性も理性も宿していなかつたあの燃える黄金の凶器ではなく、今は水面に映りこんだ淡い月のように思慮深く凪いでいた。

恐怖はあつた、どうしようという気持ちもあつた。でも不思議と身体は震えなかつた。

私と視線を合わせたまま竜は瞬きを数回繰り返す。目の前のフリークがなにをしたいのかまつたくわからなくて困惑と恐怖に私も瞬きをするしかない。

なにも出来ないままのその時間は永遠にも感じられたが、長くて約4、5秒だっただろう。

安心感から緩みきつていていた思考に喝を入れてどうしようと解決策を考えていた間に竜は唐突にふいと私から視線を外し、さっきまであんなに凝視していたとは思えないほどあっさりと私を無視して今度こそ力強く翼で空気を叩きながら空高くに舞い上がって行った。

……なんだっただ……。

竜の姿が雲間に見えなくなった途端、身体中から力という力が抜けて地面に座っているにも関わらず自分で自分の身体が支えられなくなった。ゆらりと身体が右に傾く。そのまま大した受け身も取れずに私の右半身は地面に突撃した。

……結構いたい。

打ち付けられた衝撃で瞼を閉じると、辺りが急に騒がしくなった。もしかしたら私が緊張で気付かなかったただけでもとから騒がしかったのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

真っ暗で薄れていく意識の中でそんな下らないことを考えた。

今日はとても疲れた。昨日の事件があつてから口々に寝てないし食べでもないし暗い考え事ばかりしていたものだから、身体に疲労が溜まっていたのかもしれない。

だから、少しだけ。少しでいいから休ませてね。

気になることはたくさんあるが、瞼を持ち上げるところか意識を保つのも難しい。

竜の輝く瞳が脳裏を横切る。

後悔はしなかった。どうしようもなく怖かったし、これでよかったのだと胸を張れるかと聞かれれば即座に是とは答えられないけれど、それでも後悔はしていなかった。

さっきも、今も。

人が走り回る足音の振動が地面に接している右頬から伝わってくる。しかしそれも段々と曖昧になって、なにも感じなくなる。

ゆらゆらと揺らいで消えていく意識の最後、「よくやった」と誰かが私の耳元で囁いた。

10話：道は整った

《支配者^{ルーラー}》というのはその名の通り対象である異種族^{フリーク}を支配することが出来る者たちのことをいう。

今さらどうした、って感じだけれど、その支配というのも実は簡単に一口で言えたものではなく、主流なのは魔術だが他にも色々と難しい論理とか科学とか、はたまたあまり正規には認められていないらしいが暴力なるものなどの上に成り立っているらしい。…生憎と私は頭が良くないので詳しいことはあまりわからないのだが、ルーラーたちがフリークを意のままに操ることが出来る状態、つまり支配をするために必要な過程のことを《干涉^{「ネクション」}》と言うことぐらいは知っている。…というか授業で習った。ので、授業の内容を引用しつつ、私の言葉に直して簡単に異種族^{フリーク}と《干涉^{「ネクション」}》の関係を説明するところなる。

階級の低いフリークというのは大体知能が低かったり理性がなかったりする、所謂獣的な生物ばかりで比較的《干涉^{「ネクション」}》が行い易く、支配もわりと容易い。手っ取り早く魔術などで従わせることが可能なのである。

逆に階級が高いフリークになると知能や理性はもちろんのこと、感情なども持つようになり、支配は愚か《干涉^{「ネクション」}》をすることさえ難しくなる。

下級のフリークにはとても有効な魔術などの力技も、高位になると人間よりも遥かに魔術の扱いに長けているフリークがたくさん…と言うよりもほぼそういったフリークばかりなので利かないケースが多いという。主流である魔術が利かないならどうするかと言うと、《竜騎士^{ドラゴンライダー}》だけが使用を許されている…ナント力魔術を使用すれば高位フリークでも力技で屈せられる、らしい。

支配をするために、対象であるフリークに干涉する。《干涉^{「ネクション」}》というのは、異種族^{フリーク}を支配するためになくてはならないものだ。

……だから結局私がなにを言いたいのかというと、そんな大それたことが出来るほど私は有能じゃあないし、第一あれが《支配者》^{ルーパー}たちができるかとされている《干涉》^{コネクション}だとは到底考えられない、と、ただそれだけである。

「違うな。あれは確実にお前の力だ、レリア」

いつくら私がそう力説しようとも、目の前のおじさんは信じてくれなかった。

精悍そうな顔立ちに無精ひげを生やし、筋肉質な長身を包む服は高そうなスーツ。足元は耐久性に優れている軍用の靴を履いている。口には火の付いていない煙草を咥えていて、ああこれが俗に言うハードボイルドなのか？と思わせる、見るからに軍人といった風情のおじさんは、やっぱり軍人さんだった。

今日から数えて4日前に友人を事故で亡くし、その次の日には路上で竜と対峙するというあまりにも非日常的な経験をした私の前に突然現れた彼の名前は、二ロバニア・アルトマイヤーというらしい。

最近こんなのはっかりだと疲弊しきった私を心配して母がここ何日か学校を休ませてくれていた矢先だったので、二ロバニアさんが家に訪れた時はまたかなんかキタ！と絶望の気持ちでいっぱいだった。

…否、今現在も絶望の気持ちで一杯だ。

なんでこう最近の私は非日常ばっか味わっているんだろう。なんか悪いことしたっけ…。

遠く濁った眼差しであらぬ所を見上げて軽い鬱に浸ってみる。

軍の人間が我が家にやってくるというのはつまり、父さんになにかあったのかと最悪のケースが頭を横切った10分前が懐かしい。こんな話を聞く前の方がまだマシだった。

見るからに軍人さんで、見るからに偉い役職に就いているのだろう二ロバニアさんが持つてきたハナシとは私が敬愛する父の訃報でもこの間竜と対峙するはめになった私への労いでもなければ、ただの

世間話でもなかった。

我が家にやってきてすぐに彼はこう言ったのだ。

——あの時、あの竜を退けたのはお前だと。

いやいやいや、あの竜は現場に急行してくれた《竜騎士》ドラゴンライダーから逃げるためにあの場を去ったんであって私の力じゃありませんってうんほんとに。

…なんて饒舌な否定の台詞より先にはあ？とか失礼極まりない驚き方をしてしまったのだが、言われた時の気持ちとしたらそんな感じだった。

普通に有り得ませんって。私があの竜を退けた？なんだその笑えちゃう冗談。ははははナイスジョーク！

「……………なんかの間違いですよね？」

「いや。現場に行ったライダーが証言している」

心の中は雨霰を通り越して嵐とあられた。餅を揚げた方の食べるあられが私の心の中で嵐の強風に煽られて華麗に宙を舞っている。お、なんてことだ。ニロバニアさんの発言はどうやら私の脳内キヤパシテイを悠々とぶち抜いて行ったらしい。

それでも暗くなる気分と戦いながら私はあの竜は以下略を告げられた瞬間からそれを否定し続けている。…だってどう考えても可笑しいでしょ？

「私、勿論ドラゴンライダーじゃないですし、あの時《干渉》「ネクシオン」をした記憶ありませんし、もし無意識にしていたとしても私なんかが《竜》「ネクシオン」を…」

「無意識なのかどうかは知らんが、《干渉》はしていただろう」

「え、ど、どれですか！？」

無精ひげを生やした顎を触りながら私とそうだ違うの堂々巡りの会

話をしていた二ロバニアさんが思い出したように手を叩く。

私はまるつきり竜に《コネクション干渉》だなんて大それたことをしたつもりなんかなかったから、二ロバニアさんのその言葉には驚いた。

え、してたの私？だって一般人にちょっと毛が生えたくらいの知識と力量しか持つていない私が竜相手に干渉って、私の性格から考えてもちよつと有り得ないような…。

無意識ってこわー、とか思いながら二ロバニアさんの次の言葉を待つ。

「語りかけただろう。竜に」

「……………え」

「それだ。お前がした《コネクション干渉》」

「……………え？」

当たり前だろ、といった風な顔をするおじさんのひげを眺めた。

…それも別に何が変わるわけでもないのだけど、衝撃でつい。

二ロバニアさんが教えてくれた事実は、あの竜は以下略と同じくらい私を驚かせるものだった。

…語りかけるって、竜相手に偉そうなことを言った私のアレのこと？
コネクション

《干渉》…なんだろうか、アレが？

か・え・れ！みたいなことしか言った記憶がないのですけど…。

疑惑の眼差しで二ロバニアさんを見ると、彼は《コネクション干渉》というものは何も従わせるためだけのモノじゃないぞと教えてくれた。

「フリーク異種族の頂点と言っても過言じゃない竜が、たかが人間の小娘であるお前の言う事をホイホイ聞くと思うか？」

「だからあれは、ライダーを見て…」

「ライダーが急行するまでに、あの竜は何もしなかった。確か子供が狙われたところにレリア、お前が割り込んだんだっただな？」

「…はい」

「それでお前は死ななかったじゃないか。竜のすることを邪魔して死んでいないどころか、無傷だった。他に理由が必要か？あの竜はお前の言葉に耳を傾けて、それを聞き入れたんだぞ？」

「わ、たしは……」

「ネクシヨン」

「お前は竜の心に《干涉》をした。支配するのではない干涉の仕方だっただけで、したことに変わりはないよ、レリア」

「……………」

二ロバニアさんの言葉に、私は黙り込むしかなかった。

確かに、考えるまでもなく私は危ないことをしたのだ。あの時は怖さより別のなにかが勝って行動をしていたが、今思えばとんでもないことだった。殺されていない方が可笑しいのだ。なのに私はこうして、無傷で元気にここにいる。

たかが人間の小娘である私の言うことを竜が聞くとは思えないと、二ロバニアさんに言われて初めて気付いた。あれは運が良かったのだと、あれを奇跡と呼ぶには少し都合がいいのかもしれない、と今更ながら思ったのだ。

でも、だからと言って私が竜に干涉が出来たとはやはり思えなかった。だって非現実過ぎる。今まで落ちこぼれだった私が突然優秀を通り過ぎてドラゴンライダークラスだなんて言われても実感が湧かない。可笑しい。変だ。

けれど、感じようとする違和感もこれで限界だった。

あれは私自身がやったのだと、誰かが囁く。

「レリア」

「……私は、なにをすればいいんですか。二ロバニアさんは、私があの竜を《干涉》「ネクシヨン」で退けたってわざわざ教えに来たわけじゃないですよね？」

「勘が良い」

ぐるぐる回る頭と胸中にどうすればいいのかわからなくなる。私は違うと巡る言葉が自分の言葉で段々と形を失くしていく。囁きは止まらない。

思いのままに飛び出た私の台詞に頷いた二ロバニアさんの口が、動いた。

「レリア。お前は《竜騎士》ドラゴンライダーなれる」

否定の言葉は今更出てこなかった。

もう粗探しは出来ないのだと手を伸ばしてきた彼の表情から悟る。頭の隅で、何処かの誰かが納得する声を聞いた。

11話：ささやかな覚悟 壱

「やばーい……」

「こつちに来てからお前はそれしか言っていないな、レリア」

「いや、私王都に来るの初めてで」

「初めて？プリゼーラは修学旅行、王都じゃなかったのか」

「私まだ2年です」

「おお、そう言えばそうだったな」

がたんごとん、と白と青のコントラストが美しい王都の列車に揺られながら窓から見る景色は絶景だった。…絶景というよりただ物珍しいだけなのだけど。

私は生まれてから今に至るまでの17年間、この国の首都で暮らしてきたので十二分に都会育ちっ子だ。なので別にこれと言って、建ち並ぶ高層建築とか空を行き交う異種族^{フリンク}たちが珍しいわけではない。正直、王都と首都の違いはと今聞かれても答えられないだろう。

そのくらい王都と首都は同じように賑わっていて、似たような雰囲気がある。

所狭しと地面から生えるたくさんのビルとか、大きな通りを歩く人たちの声だとか、そういったものたちは首都そのままだ。

でも、そういう風に似たようなものばかりなのに私にとってはずべてが物珍しく見えた。

理由はたぶんここが王都だからだと思う。名前の通り王が御座す都。何かよっぽどのことでもない限り、私なんかは王都に訪れる機会なんかない。

それで、すごく興奮している。…のだと思う。

「…すごいなあ」

自分の気持ちを無駄に分析しつつ列車の窓に張り付く私を隣で二口バニアさんが笑った。

その顔が私の目の前にある窓硝子に映って昨日のビジョンと重なる。お前は《竜騎士^{ドラゴンライダー}》になれると、そう言われた後にやっぱり放心した私を尻目に二口バニアさんはなにやら私のおかーさんとお話をして、それから、じゃあ王都行くか、と私の顔を覗き込んでにつこりと笑った。…え！？は！？なんで！？突然！？てゆうか今から！？と驚いて二口バニアさんと母の顔を交互に見ると、一方は早く支度しろと私を急かし、片やもう一方はいつてらっしゃい向こうでお父さんに会ったら宜しくね、と優雅に微笑んですでに私を送り出す気満々だった。

なにこれ着いて行けてない私が可笑しいのと自問自答する暇もなくあれよあれよと支度を済ませ、いつの間にか私は列車の中に。

首都から王都までは半日くらいかかるから寝てもいいぞ、と私の隣でもう寝る体勢に入っている二口バニアさんに言われてはじめて、ああ私ほんとに王都行くんだと頭から納得した。…えええええええそれで納得するんだ自分、という冷静なもうひとりの私の突っ込みは無視をする。

とにかくそんなこんなで周囲に流されながら私は今王都行き^{セントラル・ステーション}の列車に乗っているわけで、その列車はたった今どうやら王都の中央駅に着いたらしい。

首都からおよそ9時間ちよいかけて私は王都に到着した。

窓から見える景色がホームになる。それすらも珍しく私の目には映ってちよつと感動してみる。すげー人いっぱい。

「降りるぞー」

「あ、はい」

いつまでも窓に張り付いている私の肩を二口バニアさんが叩く。列車はホームですでに停止していて、車内から続々と降りて行くお客

さんたちが窓越しに見えた。

「迎えを呼んであるから、南口まで行こう」

「WGSFの本部に行く。取り敢えずお前に会わせたいのがいてな」

「だぶりゅーじーえすえふ…の、本部……」

「政府直下の特殊戦闘部隊のことだが…なんだレリア、知らないのか？」

ドラゴンライダー

に私がWGSFに行くことになるとは……！あまりの驚きに手にしていた荷物を落としそうになった。色々な感情が入り混じって戦慄く私をまあそんなに緊張すんなと励ましながら二口バニアさんが列車から降りて行く。それを半ば魂抜けた状態で追っかけながら、目の前を行く広い背中に話しかけた。

「だだだだだだだだだだっでーするんですか一般人の私がWG
SFにお邪魔するとかだつてそんな、え？まさかビックリとか？そ
ういうオチ的な何か…………あ、いやドンキリか。ビックリは今の私
の気持ちだわ」

「落ち着け、レリア」

セントラル・ステーション

見渡す限り周りは人だらけで、一生懸命足を動かさないと目の前にいるはずの二ロバニアさんさえ見失ってしまいそうになる。おまけ

私は眼前に迫った現実には足を取られそうになっているから、尚更なのかもしれない。…コンパスも関係、しているかもしれないが。ほんとは喋るより懸命に足を動かした方がいいのだろうが、それでも緊張で口を高速回転させつつ慣れたようにすいすいと人混みを縫って歩いて行く二口バニアさんを渾身の力で追いかける。

「大体私ほんとにライダーになれるんですか凄いい今更ですけど!」

「なれるなれる。お前ならなれる頑張れば」

「頑張れば!?!なにをですか!?!」

「行けばわかるから取り敢えず着いて来い」

「そんな殺生な!」

「ほら後少しだ。ガンバレ」

「ほんとに私がWGSFの本部に行くんですかライダーになるんですかほんとに凄いい今更ですけどー!」

少し気の抜ける会話(私は必至)を延々と繰り返しながら辿り着いた南口から駅を出る。

その間二口バニアさんに吠えつつ押し寄せる人波を回避し、更には迫りくる現実には頭パーになりそうになりながら全力で歩くという行動をとっていた私は駅の出口を出たところでもう大分疲れ切っていた。うう、自業自得過ぎるぜ…。覚悟が足りなかったんだ覚悟が流された私死滅しろ、と目前に迫った現実を避けるために逃避を試みるが、生憎とそんなもので現実には逃避出来ない。いつも大事などころでダメな自分…。緊張から根暗モードに移行したそんな私の頭を、二口バニアさんが不意にとんとん、と突いた。

「ほら、迎えが来てるからとにかくあれに乗ろう」

「え……………」

あれってどれだ、と二口バニアさんが示した方向を見た私は思わず

絶句した。

私たちがいる出口付近からおよそ10メートル先の方。タクシーやらなにやら、とにかく乗り物がたくさん駐車してある場所にそれはあった。

確かに二ロバニアさんは軍人さんだし、しかも結構偉い役職の人みたいなので可笑しいわけではないのだが、うん…それにしたって何もこんなので迎えにこなくとも…。

二ロバニアさんが言っていた迎え、指示したところにあつたそれというのは、軍の紋章が車の先端部分にくっ付いた黒くて長くてピカピカと光っている高級そうな車…リムジンだった。

りむじん…。せめてもう少し目立たない迎えはなかったのか…。

恐縮する私を余所に二ロバニアさんは行こうと言って、軍の乗り物がどうしてこんな所にと道行く人々に注目を浴びているその噂の車に普通にずんずんと近付いて行く。必然的に私もくっ付いて行かないといけないのだが、…これが心臓に悪くて仕方ない。

二ロバニアさんは明らかに軍人然とした風貌だからいいものの、その後をひよこひよこ追いかける私は明らかに場違い過ぎるから周囲の人の視線は必然的に私に集中するのだ。なんであんな小娘がー、みたいなことを思われていないだろうかとぐさぐさ身体中に刺さる視線の刃に耐えながらリムジンに接近。

二ロバニアさんが車まで辿り着くと、なんの音も立てずにリムジンの後部座席のドアが自動で開いた。おお。車のドアが自動で開くのは別に珍しいことではないが、それがリムジンだとなんとなく…こう、敵かな感じがする。

高級車って色々すごい。

「レリア、乗らないと置いてくぞ」

感動する私を余所に二ロバニアさんは開いたドアからさっさと車内に入り込んで、車内から私を手招きをした。

うわあ、やっぱり乗るんだ…。

手招きされて改めて確認。高級車、しかも軍の御用達の車に乗れるのは嬉しいしわくわくするが、別の意味でも私の心臓はさっきからわくわくしっ放しだ。…心臓がこれから持つのか不安になるくらい
のわくわく感。わくわく。

「レリア」

「う、……はい…」

戸惑う私の名前を二ロバニアさんが呼ぶ。

さすがにこれ以上迷惑はかけられないと、観念してリムジンに乗り込んだ。

私が乗った瞬間に、また音もなくドアが自動で閉まる。それからすすーと大した揺れもエンジン音もなく車は走り出した。

……地獄に輸送されている気分です。ぐすん。

ささやかな覚悟 貳

車内は快適としか言いようのない完璧な内装だった。

シートは家のソファよりふかふかだし、気温は暑くもなく寒くもなく丁度良いし、微かにステレオから聞こえてくる品の良いジャズは耳を癒してくれるし、おまけに車内には冷蔵庫とか大きなホログラフィーのTVとかが取り付けられている。娯楽もばっちりだね！
…なんだかぶっちゃけ凄過ぎてなにがなんだかよくわかんないのだが、そんなことよりもこれからがタイヘン気になる私にとっては高級車スゲーと思う余裕がなかった。

「うええええ…なんか吐きそう…。主に心臓とか」

「そんなに緊張するな。別に取って食おうってわけじゃない」

「取って食われた方がどんなにいいか…！」

私のあまりのビビリようを見兼ねたのか二ロバニアさんが背中を優しく叩いてくれる。

しかしそれも生憎とあんまり効果はないみたいで、私の心臓は相変わらず激しくタップを踏んだままだ。心配してくれる気持ちは凄くありがたいのですがね…。うう、申し訳ない。

「列車の中じゃそんなに緊張してなかっただろうに。どうした？」

「や、なんかあの時は意識してなかったと言っか…覚悟が足りなかったと言っか…。まあどう考えても自業自得なんですけどねあははは、は、ははー…」

情けないから笑いが車内に木霊する。

笑うしかないと言っかのはこういう状況を言っかに違いないと思っながら緊張で冷え切った手を膝の上で組んだ。あつためられるかなこ

んなんで…。

「レリア…」

「えっ？なんですか？」

冷えた手を温めようとするそんな私の返答を聞いた二ロバニアさんが、何故か困ったように眉を下げて私の顔を覗き込んできた。…どつちかと言うと敵つい感じの顔をしている彼がそんな表情を見ると失礼だけなんだか違和感がある気がする。

どうかしたのかと首を傾げた私を見て、二ロバニアさんは突然こう言った。

悪い、と。

「…え？は？…えっ？」

「いや、俺のせいだと思ってな」

「な、なにがですか？」

なんで二ロバニアさんが謝るのかわからなくて頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

さっきの会話で彼が謝らなければいけないところがあっただろうか？…残念ながら私にはわからない。どつちかと言うと迷惑かけてるの私じゃないの…？

困惑して今度は私が眉を下げる。

「ここまでお前を連れて来たのは俺だろう。きちんと説明して、お前を納得させてやれなかった」

「……………」

眉を下げて情けない顔をしたばかりの私の表情が二ロバニアさんの台詞で驚きの表情に変わった。

つまり二口バニアさんは今、私がドギマギ緊張をしているのは自分のせいだと、そう言いたいのだろっか……？ 頭の中でその憶測を噛み締めて、それから私は悪いと言った言葉通りはなんだか申し訳なさそうな顔をしている二口バニアさんに向かってぶるんぶるんと顔を振って見せた。

「いやいや、でも決めたのは結局私ですし！」

「流されたんじゃないのか」

「お、……………いやでもけっきょくきめたのはわたしですし」

確かに少しばかり流されたかもしれないが、それでも決めたのはきつと私であることに変わりはない。てゆーか自分の言葉で改めて気付いた。うん。……結局決めたのは私じゃんね？

決めたのは私ですよー、という目で二口バニアさんを見詰めると、彼は渋い顔をしてでもと言い募った。

「……棒読みだぞ、レリア」

「……気のせいってことにしといて下さい。でもほんとに、二口バニアさんのせいとかじゃないですから」

私は自分でも吃驚するくらいマイナス思考でいつも肝心な所で失敗ばかりで情けない性格だけど、でも、せめてだからこそ、そう言ったダメな部分とか出来事とかを人のせいにするのは嫌だった。今も然り、これからも然り。偉そうなことを言えるほど自分でそれが出来ているかと問われれば即NOだけど、でも出来るかどうかは別として、努力くらいはしなければ……とか、また偉そうなことを言ってみる。

「私は、実の所まだ自分が《竜騎士》ドラゴンライダーになれるっていう実感が湧い

てなくて、流されてしまってるようにも見え…って言うよりもしかしたら流されたのかもしれないですけど、でもやっぱりここにいるのは私の意志だと思うんです。…そう思いたいです」

ニロバナライダー

この私が天下の《竜騎士》なんて、夢じゃないのか、ってそう考え
てしまう。そう考えるのが当たり前さえとも思える。

でも、うだうだうじうじばかりしていられないのだ。

覚悟を、今更だけれど決めなければ。まだライダーになった訳でないが、なれる覚悟を。

「…レリア」

「だ、だいじょうぶですよ。緊張、するけど。腹も括りますし、…今からだけど」

大丈夫だから平気だからと自分に言い聞かせないとホントは怖くて仕方ないのが残念過ぎる現在の現状だが、やっぱり今のこの状況は彼のせいではないのだ。

これ以上迷惑や心配はかけたくない。

「しかしだな…」

「平気ですって。だって、ニロバナさんも一緒に来てくれるんでしょう？」

いくら大丈夫だと言っても納得してくれないニロバナさんにそう笑いかける。

多分、頬とか口許が引き攣ったみつともない笑顔だったはずだ。

でもきつと、おそらくだけど私は大丈夫なのだ。

だって母が笑顔で送り出してくれた。卑屈な私とは正反対な明るくて前向きなお母さん。

きつと私を信じてくれているに違いない。私以上に、母は私を信じ

ている。

あなたは父さんの子供だから、きっと立派な軍人になるわ。大丈夫、頑張って。

お母さんが別れ際に言ってくれた台詞を思い出す。

大丈夫。

ドラゴンライダーが危ない職業だと知った上で、あんなことがあった手前なのに、お母さんは私を笑顔で送り出してくれた。大丈夫。きっと、大丈夫だから。

「ああ、そうだな。もちろんだとも」

私の引き攣った笑みに二口バニアさんが悪戯っ子みたいな悪そうな笑顔を返してくる。

その無駄に頼もしい笑顔に緊張が少しだけ吹っ飛んだ。

12話：はじまりの鳴き声、壱

「ここが、WGSF本部……」

TVで何度も見たことはある。

けれど自分の目で実際に、それもこんな間近で見るとなると感じる
こととか雰囲気だとか、そう言ったものが全然違うような気がした。
数え切れないほどの人が忙しなく行き来するエントランスホール、
とても言えいいのか、とにかくWGSF本部に入っただけの所
にある受付やら各階に繋がる階段やエスカレーターなどが集結してあ
る広間のような場所で私は唖然と佇んでいた。

だってすごいんだよね……。外からこのWGSF本部を見た時は中の
様子がまったく窺えなかったのに、いざ本部内に入ってみると壁3
60度どころか天井までも透け透けで、中からは外の様子が丸見え
だった。

試しに高い天井を仰いでみると、青い空と白い雲がクリアに見える。
加工硝子みたいなものなんだろう。生憎と私にそこん所の知識は
ないのでわからないが、とにかくなんかすごい技術なんだろう。金
かかってんな……とか考えながら今度は視線を真下に持っていく。

壁も天井も透けてるのなら床はどうだろうと考えての行動だったが、
さすがに地面は透けてない普通の床だった。……ちょっと残念。

「レリアはここに入るのは初めてなんだったか」

「……ですね」

隣にいる二ロバニアさんの問いに心ここに在らずな体で答える。

失礼な気がビシバシするが、残念なことに私は今TVでしか見たこ
とのないWGSF本部を生で観賞するのにとてもなく忙しいのだ。
だめだ興奮でどうにかなりそう。

そんな私の思いを察したのか、それとも余りにも私の態度がわかり易かったのか、二口バニアさんは、俺は手続きをしてくるからその間ならここにいていいから、と言い残して何処かに去って行った。どうもありがとうございます、心の中で二口バニアさんに3回くらい感謝を述べる。

それからこの時間を無駄にしてなるものと私は目を皿のようにして本部のエントランスホールを舐めまわ…あ、いや、見回した。

360度見渡す限り外の様子が見えるので、なんだか室内にいる気がしない。

ストレスを感じさせないような開放感溢れる職場で、しかしざかざかと、そんなに忙しそうにしないでとも心配になるくらいエントランスホールにいるたくさんの人たちの動きは忙しない。みな一様に携帯を片手になにかしたりホログラム式の資料を見ながら誰かと会話したり大量の機材が何かを抱えて走ったりと仕事に勤しんでいる。その中には制服というか軍服というか、とにかく一目で軍の関係者だとわかる人間もいれば、明らかに私服の一般人、みたいな人もいる。なんの違いだろう？なんて頭を捻ってからああそうだと思いついた。

「……確かWGSF本部及び政府のなんちゃら機関なんかは一部だけだけど一般人も入れるんだったよね」

説明が不確か過ぎるのはこの際無視だ。

よくよく気を付けて駆けずり回っている人々の間を見ると、私と同じように辺りをきよろしている人もいっぱいいる。多分見学者とか、そういった類の方たちだろう。

見通しが良過ぎるエントランスホール内を存分に堪能して、それからふうと一息吐いた。

さっきまであのWGSFの本部に在るという感激から緊張も何も忘れてひとりで静かに興奮していたが、少し正気に帰るとなんだかと

んでもない所に来てしまったという思いが蘇る。
興奮に上塗りされていた緊張もひよると顔を覗かせた。

「ああああー…うーん……」

相変わらず現金な自分の感情に苦笑を禁じ得ない。己のことながら呆れるなあ…。

しかしリムジンでの二口バニアさんの会話や覚悟というか多少なりとも腹を括ったので、手足が震えたりとか気持ち悪くなるとか、そこまではいかないのが唯一の救いか。

緊張はともかく、冷静に周囲を見られるようになったので二口バニアさんが何処に行ったのか探してみる。

受付にはいないし、働く人々に紛れてもいない。外に行っただけでもないだろうし、確か手続きがどうとかこうとか言っていた気が…。何処に行ったんだろう。

さつきとは違った意味できよろきよろと豪華なWGSFの本部内に視線を走らせる。

あっちにもいないし、こっちにもいない。…ほんとに何処行っただのあの人。

「二口バニアさん…?」

「おう、なんだ?」

「ひよっ…!？」

聞こえるわけないだろうけど、それでも探し人の名前を呼んでみた私の背後からここ何日かで聞き慣れた声がしたものだから、思わず地面から両足が3〜4cmほど浮くくらい飛び上がってしまった。慌てて声のした方を振り返ると、ちよつと楽しげに笑っている探し人こと二口バニアさんの姿が。

「びっ…吃驚したじゃないですか！」

「俺の名前を呼んだのはお前だろう？」

「いやそうなんですけど！そういうんじゃないかってなんて言うか、あのー…ねえ？あるじゃないですか、もっとこう、背後からとかじやなくて…なんかこう…」

名前を呼んだのは確かに私だからと少し言い淀むと、二ロバニアさんが笑いながら悪かった悪かったと謝ってきた。すぐ子供扱いされてるしあのくらい言い返せよ自分、とか思いながらもその謝罪を大人しく受けておく。

私はこう見えてわりと大人なんだからね！

「…で、二ロバニアさんは何処に行ってたんですか？」

「ああ、とりあえず御上にライダー候補を連れて来たって報告と、お前のWGSF本部内での身分証の発行にな」

そう言って二ロバニアさんが私に手渡してくれたのは学生証にそっくりな薄いプラスチック製のカードだった。小難しく長つたらしい文字の羅列の下にレリア・シュープリーという私のフルネームと、それから半端ににやけた不気味な私の顔写真が…ってなにこれ！？

「ちよっ、二ロバニアさん！なんで私の顔写真がここに載ってるんですか！？てゆーかいつの間に撮ったんですか！？」

渡されたカードに載っている私のぶさいくな写真に見覚えがなくて思わず二ロバニアさんに掴みかかった。だってこれ撮られた心当たりがないんだもん…！

「さっきだな」

「さっき…？」

掴みかかった私を物ともせず二口バニアさんはついさっきだと呟く。

さっき、さっき、ついさっき…？

二口バニアさんの言葉を脳内で反復する。それから5秒後、思い当たる節を見付けて私はぎゃあと叫び声を上げた。

「さっきって私が建物観賞していた時ですか！？」

「おお、そうだな、たぶん」

「だからこんな不気味に、にやけてるんだ…！」

確かめるためにカードに目をやって写真を見みると、写真の中の微妙に微笑んでいる私と目が合った。

………自分のあまりにも気持ち悪いにやけ具合に今にも気を失いそうだ。

「な、なんで言ってくれなかったんですか写真撮るって！しかも私撮られたの気付かなかったんですけど今の今まで！」

「写真のことを伝えなかったのは悪かったって。撮られたのに気付かなかったのは…俺のせいかな？」

「ことの発端はあなたでしょ！？」

「そう言われると……そうだな。すまん」

「うわあああああん！素直に謝られたあああああ」

ぎゃんぎゃん吠えて噛み付く私の腕を引いて二口バニアさんが歩き出す。

エントランスホールで働いている方々や一般の人々から騒ぐ私に激しい視線を感じるが、そんなことは今さら知ったことじゃない。だってモザイクかけなきゃいけないくらいぶさいくで不気味な笑みを写真の私は浮かべているのだ。激写されたところの話ではない。

乙女として生きていく気力と自信を根こそぎ奪われたと言ってもいいくらい、この写真の私は酷いのである。

「撮り直しをつ、撮り直しを要求するっ！」

「また後でいくらでも撮り直させてやるから、今はそれで我慢してくれ」

「うっ、生き恥を晒すとはこのことよ……！」

どうどうなんて宥められつつ、私は二口バニアさんに腕を引かれたままWGSF本部、エントランスホールなどの一般公開されていない、本当の意味での内部に入って行く。

エスカレーターやエレベーターを乗り継いだり薄暗い通路を通ったりしながら二口バニアさんは迷うことなく進んで行く。後でひとりで帰れとか言われても無理だとか写真ほんとにどうしようとか、下らないことを考えているうちに二口バニアさんの歩みが止まった。どうやらここが目的地らしい。

「地下室だ」

「え、ここが？」

引かれていた腕を離してもらって、二口バニアさんが指差した方を見る。

地下だという彼の言葉通り空気がひんやりしている気はするが、エスカレーターやエレベーターで昇ったり降ったりをたくさんしたもののだから“地下”にいるという実感がどうも湧かない。降りるはともかく昇ったりもしたからかな？

二口バニアさんが示した場所にあるドアもいかにも地下室！といった雰囲気ではないから余計なのかもしれないあ、なんて思った。

「ここにお前に会わせたいのがいてな」

「あ、駅で言ってた…？」

「ああ。お前がこいつに会わなきゃなにも始まらない」

私の上司になる人…とかですか？首を傾げて一番妥当だと考えられる答えを問えば、しかし二ロバニアさんは私のその質問に曖昧に笑っただけだった。

あ、なんかやな予感…。

二ロバニアさんの微笑みに背筋が凍る。なんだかんだ言って二ロバニアさんって実は私に不幸を運んでくる宅急便のおっちゃんのような気がしてきたのだ。…笑っちゃないでさくつと教えてくれればいいのに。

二ロバニアさんの微妙過ぎる返答（果たしてあれを返答と呼ぶのだろうか…）に緊張がまたせり上がってきて手足が急速に冷えていくのがわかった。

おおおお、心臓が早鐘を打ち出したぞ…。

そこでふっ、と気が付いた。

写真のショックで緊張など感じる暇がなかった…と言うのはいくらが大袈裟すぎるが、それでも私はさっきここに来るまでは大した緊張を感じていなかったように思える。普通にここに来るよりかは全然マシだったはずだ、緊張度合が。ぎゃあぎゃあ騒いでいたから、いくらか緊張が緩和できたのだろうか。

まさかそこまで計算してあんな写真を撮ったのだろうかと隣にいる二ロバニアさんを見上げると、視線に気が付いたらしい彼は何故かはちこーんと私に向かってウインクをしてくれた。

…なんでウインク…？私は40は確実に過ぎているだろうおっさん、しかもわりと強面気味の人からウインクを貰って喜ぶような特殊な人間ではないぞ…。

でも写真の真相はどうであれ、今の二ロバニアさんのウインクで少しだけ肩の力が抜けた。おじさんのウインクはそれなりに効果があったらしい。

「大丈夫だ。車の中で言っただろう」

「……一緒に来てくれるって？」

「ああ」

ウインクにちよつとだけ噴き出した私に気分を害した様子もなく二口バニアさんがそう言ってくれる。

それがウインク以上に心強くて、同時にとても嬉しかった。

……たとえ今から私が入ろうとしている地下室から信じられないくらいの大音量で轟音かと思っちゃうほどとてつもない雄叫びが聞こえたとしても頑張っただけの中に入ろうとか無謀なことを一瞬でも考えるくらいには、だ。

「……………すみません私やっぱり帰る」

「駄目に決まってるだろう」

「……デスヨネー」

はじまりの鳴き声、弐

びりびりと空気が振動する感覚がダイレクトに身体に伝わってきて思わず肩をすくめた。地下だからだろうか、普通よりも籠っているように聞こえる音は私の鼓膜を激しく叩いて軽い頭痛を起こさせる。

「なんで……」

あまりの衝撃にそんなことしか言えなかった。

考えたって到底答えに辿り着くわけがないのにどうしてだとかなんでもだとかなにが起こってるんだらうとか、そういったことばかりが頭の中を駆け巡る。

その間にも容赦なく耳に入ってくるうおんうおん、と泣いてるようにも聞こえる“彼”の叫びに別の意味で頭が痛くなった。

「…レリア、一度出るか？」

肩をすくめて両手で両耳を押さえ困惑する私に、隣にいた二ロバニアさんが見兼ねたように話かけてくる。出るか、というのはこの部屋から、ということなのだろうか。

たぶんそういう意味だろうと揺さぶられる思考回路で判断してから首を横に振った。

これでも一応駄目なりに覚悟を決めてきたのだから、このくらいのことでは挫折するつもりはない。

私が否定の意を示したのを見た二ロバニアさんが少しだけ嬉しそうな声でそうかと言うのを聞きながら、目の前の“彼”を改めて見つめ直した。

「……………」

示されたドアの向こう、地下室だと言っていた部屋には二口バニアさんが言っていた私に会わせなかった相手とやらがいた。

——けれどその相手は、つまり今現在私の目の前にいる“彼”は何故だか当たり前のように、人間ではなかった。

地面が本当に揺れているのかと錯覚させる雄々しい吼え声と、そこそこ広く造られているこの地下室が“彼”がいるだけで少し窮屈に感じるほどの巨躯。力の限り振り回しているのだろう長い首は太く、それだけですでに凶器だ。金色の瞳は爛々と輝き獲物を探しているのか瞳孔がぎよろりと忙しく動く。

「なんで、ここに……」

改めて見て確信した。

私が“彼”……この竜に会うのは今日がはじめてじゃない。

——この間街中に侵入してきた、あの時の竜だ。

私の目前にいるのは、二口バニアさんが、私が退けたと言っていたあの竜だった。

「二口バニアさん！」

「お前の知り合いだろう？」

「普通に違いますよ！？」

なんでここにこの竜がいるんですか、と聞こうと思った真剣な私に對して二口バニアさんが吐いた言葉はあんまりだった。なんだ知り合いつて……。第一竜は人じゃないだろう、とかそう言っただつたらないツツコミは敢えてしないことにする。

吼え猛る竜を目の前にしてもいつもとなんら変わりのないおじさんの態度には感服するしかないが、今はそんなことでこの人の凄さとかを味わっている場合ではない。

すぐに気を取り直してどうしてここにこの竜がいるんですかと問い直すと、二口バニアさんはこいつはこれからお前の竜になるんだから当たり前だろう…と、本当に言葉通り至極当然みたいな顔でそう答えてくれた。

…………え、ごめんなにが？

「あれ、今日からお前の相棒な」

「……………え」

意味が理解出来ないで瞬きもせずに固まった私に、二口バニアさんが丁寧に目の前にいる竜を指差してくれる。

——「あれ、今日からお前の相棒な」。頭の中でにこやかに二口バニアさんがそう私に告げる。もちろん現実にいる二口バニアさんも今私の隣でにこやかに微笑んでいて、「あれ、今日からお前の相棒な」と告げてくる。しつこいくらいにあればお前の相棒あればお前の相棒あれば今日からお前の相棒と、妄想と現実で宣告してくる湿気たおっさんを取りあえず脳内からだけでも追い払って、私は思考回路をフル活動させた。

うん、まあ、つまり…………あれ、と言うのはそんなに考えるまでもなく、もちろん今二口バニアさんが指差している、竜の、こと、で。

「ええええええええええええええええええええええ……………！？」
「…なんにもそんなに驚くことじゃないような気がするが」

“あれ”というのを認識して、尚且つ二口バニアさんが仰る意味もちゃんと理解して、それから私は顎が外れんばかりに大口を開けた（プラスアルファで色気もなにもない普通のド真ん中に行く叫び付きだ）。

…“あれ”が今日から私の相棒？
ぐらぐらと混乱する脳内で一生懸命考える。

《竜騎士》になるからにはもちろん竜に騎乗することになるだろう

とは思っていた。二ロバニアさん曰く私はまだなれるかもしれない、という段階だそうだが、ドラゴンライダーになれるかなれないかというのは竜に乗れるか乗れないかで決まることなので、必然的に当然私も竜に乗ることになるだろうなあ、とは考えていた。

けれど、まさか、WGSF本部に着いたその当日に、竜に直面するとは想像もしていなかった。だって当日ですよ？それも到着したばかりなのに。

今すぐ乗ってみると言われたわけではないが、それでも私が驚くのは当たり前だと思う。

しかもお前の相棒になると言われたその竜は、きつと一生忘れることがないだろう恐ろしい体験を味わせてくれた当本人（いや、当本竜？かなこの場合）で、驚きは二乗三乗だ。

「なんで…」

混乱したまま呆然と隣にいる二ロバニアさんを見上げる。

とにかく詳しい説明を求めようと視線で訴えろと、彼は無精ひげをじよりじよりと撫でながらわかったと頷いて、あのかなと口を開いてくれた。

「この竜な、お前に帰れって言われて一度は自分の棲家に大人しく戻って行ったらしいんだが、1日もしないうちにまた首都に現れたんだよ」

「え…？」

首都にまた帰って来た…？

知らなかった事実を目を見張った。

竜が首都に侵入したという事件はあの日のうちにニュースで大々的に取り上げられていたが、竜が再び首都に現れたとか、そんな話は

聞いたことがなかった。それに、帰って行つた竜はどうしてまた危険しかない首都なんかには舞い戻つて来たんだろ…。

ますます頭を悩ませる私に二口バニアさんが説明を続ける。

「ニユースにならなかったのは政府がこの竜の存在を黙認したからだ。つまりこの国にとって有益になり得る存在、…まあ《もしかしたら》という仮定だが、少なくとも今はこの竜が有害になるとは御上が判断しなかったから、存在と侵入を黙認された」

「政府が、黙認……」

なんだかスケールの大きな話になってきたぞ…。

未だに吼え続けている竜の迫力ある咆哮をBGMに私は冷や汗を流す。普通に生きていたら聞けないんじゃないかと思わせるような内容ばかりでチキンハートな私には些か負担が大き過ぎる。

色々な意味で高鳴る心臓を抑えつつ、二口バニアさんの話の続きに耳を傾ける。

「しかしいくら黙認されたからと言って、そのまま野放しにしとくわけにもいかない。初めは軍やライダーたちで追い払おうと思つたんだが……ライダーの1人が妙なことに気が付いてな」

「妙な、こと」

「同じ場所ばかりいつまでもぐるぐるぐる飛び回って何か探してるみたいだつて、そのライダーは言うんだ。そいつの言う通り、確かにこの竜はある場所の上をずっと巡回しているだけで、それは首都の人間を襲おうとか、そういった動きには見えなかった」

「おなじ、ばしょ……」

「…お前は聡いな、レリア。案外《竜騎士》に必要とされているものは単純な頭の良さなんかじゃなくて勘の鋭さや状況把握能力の高さだとか言われているから、もしかしたらお前は適役かもしれんぞ」

「……………」

そう言った以上二ロバニアさんが説明を続けようとしなかったから、きっと私が今考えていることが正解なのだと悟った。

予想外過ぎる己で導き出した答えにせっかく褒められたことなんかは既に忘却の彼方で、頭の中は導き出した事実こんにんがらがつている。

——どうして、なんで。

脳裏に浮かんだのはここ何日かで散々使い回した言葉たちだ。

きっとこれからも擦り切れてボロボロになるまで使い続けるに違いない。

そんな言葉たちを心中で何度も繰り返しながら、私は自分で付けた憶測を小さく呟いた。

「竜が飛んでいた同じ場所というのは、この間、“彼”と私が初めて接触したあの路上で、探していた何かと言うのは……きっと、私の、こと、…」

「正解だ」

ああやつぱり…。

二ロバニアさんがくれた100点が肩に重く押し掛かって思わずがくりと頂垂れた。

これが普通のテストだったらどんなに嬉しいか、なんて思考しながら二ロバニアさんの顔を下を向いたまま覗き見る。

「そんな顔するなよ」

「……………」

自覚できるほど情けない顔をしている私と目が合った二ロバニアさんが苦笑しながら頂垂れている私の頭を乱暴に撫でて、心配するなと励ましてくれた。

なにもないから、と。

わしゃわしゃとまるで犬みたいに撫でられるのとその言葉に頷く。渋々に見えるほどゆっくり顎を引いた私を見て仕上げとばかりに今までとは打って変わって軽い調子で頭のとっぺんを2、3度叩いてから二口バニアさんは手を引いた。

不安もある。恐怖もあった。

だって《竜》に探されてただなんて前代未聞過ぎるじゃないか。

見つかったいたら今頃私はどうなっていたのだろう、と想像するだけで背筋に氷が滑ったんじゃないかと思うほどざわわわー、と寒くなる。

でも、だけど、今私の目の前にいる“彼”からは不思議と恐怖を感じなかった。

探されていたことを考えると怖いのに、その探していた本人（本竜？）を目の前にすると怖くないとは可笑しいのだろうか。

どちらかと言えば恐怖よりも疑問を感じる。

どうして探されていたのか、何故私なのだろうか、探し出してなにをするつもりだったのか、疑問は尽きることなく私の脳内を回遊する。

…ひとつだけなんとなくわかってることとすれば、帰れとやいやい指図した小娘に仕返ししてやろうとかそういった類のものだろうな、ということくらいか。

「つまりこの竜がお前を探してるんだと気付いた時点で、こいつはこの国にとって有益になり得る存在だとほぼ確定した。はじめは取り敢えず追っ払うだけの予定だったが、こいつからレリアに会いに来たんだ。なにも追い返すこたあないだろうと御上が捕獲命令を下して、それで今、こいつとレリアが此処で対面してるってわけだな」

たくさんのもしも、を想像して青くなったり暗くなったりする私に、二口バニアさんが、多分先ほどの説明の続きだろう、どうしてこの

竜がここにいるのかの説明をし終わってまあそんなところだと乱雑に締め括った。

その説明にああそうですかこれはご丁寧にも、と納得しかけて、思い止まる。

…今の話でどこをどう納得すればいいんだろう…？

だって引つかかるトコロがたくさんある。

例えば有益になり得る存在だとほぼ確定したのは何故か、はじめは取り敢えず、と言うことは何か他にしなければならぬことがあったのか、とか。

だからもつと細かく細部までの説明を求む！と二ロバニアさんを顧みれば、ばつちりと目が合った彼は…何故かとても面倒臭そうな顔をした。

ええっ、そこでその表情は可笑しいでしょ！？

「なんでですか！」

「いや、レリアってわりと細かいタイプだなあ、と」

「二ロバニアさんが大雑把すぎるんですって…」

「そうか？……まあ、そうだな。強いて言うなら可能性の話だ。でもこちらが先にアクションを起こす前にお前の竜が先に動いた。これで可能性が確定になった、…ってそれだけの話だろう？」

「どれだけの話かそれ聞いたって未だにわかんないんですけど！！」

まるで意味のわからない説明を再度してくれた二ロバニアさんに噛み付くが、ああ、うん。じゃあその話は後でな、と適当にあしらわれてしまう始末。私のハナシなのに私が把握出来てないだなんて…。二ロバニアさんのいい加減さと、それに少しだけ救われている自分に呆れながら私は手持無沙汰に何かを訴えるために泣いているのかと思えない“彼”を再度見上げた。

竜の巨軀に纏わりついている拘束具ががしゃがしゃと大きな音を立てながら狂乱しているとは思えないほど暴れ狂う竜を抑え付けて

いる。

あまりの暴れっぷりに改めて眉間にしわを寄せると、それを見兼ねたのか、それとも元からそのつもりだったのか、ニロバニアさんが外に出ようと私に地下室の出入り口を示した。

「いいんですか？私とこの竜を会わせるために来たんじゃない……」

外に出ること自体には大いに賛成だが、私がここにきたのは竜と会うため……と言うか接触するためではないのだろうか。竜の鳴き声と暴れるたびにけたたましく地下室内に響く拘束具の甲高い音に耳が馬鹿になってきそうなので退出したいのは山々ですけど。

そういった気持ちを込めてニロバニアさんを見上げると、彼は肩をひょいと竦めて見せた。

「危険を冒してでも首都に戻ってきて必死になって探していたお前が目の前にいるってのに気付かないほど錯乱してしてるんだ。ここにしようがないだろう。本音を言えばもう少しなにかあればと思うたんだがな」

こいつ、捕獲してから今までずっとこんな調子なんだよ、と微かに心配そうな表情をニロバニアさんは竜に向けた。

ずっと。ニロバニアさんのその言葉に眉間のしわを深くした。

あれだけの大怪我を負っていたのがつい最近で、捕獲されたのもつい最近。

いくら生命力が強くて自己再生能力が高い竜でもそんな短期間じゃあんな大怪我は治し切れないはずだ。地下室が暗いせいもあって竜の体軀を全部見れるわけではなくとも、その身体はまだ傷だらけなのだろうと容易に想像が出来た。

なのにこんな調子でずっと暴れてるだなんて。

普通だったら死んでも可笑しくないんじゃないのかどうにかして大

人しくさせないと、なんて思いながらも私にどうこう出来る問題じゃないと溜息を吐いた。

「行くぞ、レリア」

「あ、はい」

考え耽る私の肩を叩いてニロバニアさんがドアに向かって歩き出す。やや躊躇しながらも暴れる竜から視線を外して、私もドアに向かって歩き出した。

13話：可能性が確定に決まったハナシ

地下室を出た二ロバニアさんは、今度はお前の上司になる予定の奴に会いに行くからなと言つてまたぐねぐねとWGSF内部を歩き出した。上司つてそんな急に……！と焦る私を引つ張つて迷いない足取りで建物の中をすいすい行く二ロバニアさんに殺意を覚えたのは内緒である。

そんな緊張しまくりな私の様子に、二ロバニアさんがひとつの提案を出してくれた。

さつき知りたいと騒いでいた可能性と確定の話をしてやろう、と彼は言つたのだ。

緊張で身体同様ががちになつている思考回路で理解出来る話かどうか不安だったが、なんにも喋らないと尚更不安と緊張に押しつぶされるのは目に見えていたので話して下さいとお願いした。

長い道すがら話してくれたこれまた長い話を要約すると、こうだ。

未だに信じられないが、私が私の力とやらであの竜を退けたその日から、私は《竜騎士》ドラゴンライダーになる資格をすでに会得していて、“彼”は私の相棒になることが決まっていたらしい。でもそれはあくまでも可能性の話で、確定ではなかったと二ロバニアさんは言う。

私がある時、あの竜に行った《干渉》コネクションは、所謂支配するためではなく、言うならばお願いみたいなものだったらしい。コネクションというのは本来、支配するのに使うものなので私があの時したあれをコネクションとは正式には言わないらしいが、それでも私がああにコネクション（もどき）をしたのは事実で、取り敢えずあの竜を捕まえてきて私と接触させてみればドラゴンライダーになれるかどうか見極められる、というのがその時のお偉いさんの見解だったそう。

私の知らないところで私のことがそんなに着々と決まっていたのかと

思うとなんだか怖いが…、まあそれは置いて。

…その捕獲命令が下ってからWGSFではあの竜を捕獲する準備が
厳かに進められた。あの竜の大体の棲家を割り出して作戦を練り綿
密な計画の元、後は実行の日を待っただけだったらしいのだが、それ
が実行される前に、標的であつたあの竜が再び首都に現れたのだ。

その時竜の存在が黙認されていたのはライダー…つまり私が騎乗出
来るかもしれないという可能性があつたからだそう。

首都の上空で戦闘をするわけにはいかないから捕獲はもちろん論外、
大事になる前にかく外に追い払おうと現場にライダーが急行し
たところ、その竜は何かを搜索中だった。

…で、それが私だったと。

“彼”が私を探していた理由は自分と私には何か繋がり、波長みた
いなものが合うと本能的に感じたからだとニロバニアさんは言つて
いた。そういうば授業で《竜》^{ルラー}などの高位異種族にコネクション、
及び支配をする場合は、その支配者の力量に限らず波長が合わなけ
れば失敗するケースが多いと習ったことがある気がする。

竜の探しものが私だと判明した時点で、私とその竜の相性はバツチ
りだと御上は判断して被害が出ても構わない土地まで“彼”を誘導
し、直ちに捕獲させたという。

その結果、私が今ここにいる。

…以上が私が知リたがつていた可能性が確定に決まつたハナシ、だ
そう。

「…ラッキーだったんですか？あの竜が首都に再び現れたのは」

長い話を聞き終わつてもまだ目的地には辿り着かないらしい。

先を行くニロバニアさんの背中に質問を投げかけてみる。

「そうだろうな。竜自らライダー候補を迎えに来たつてことはそれ
はもう候補ではなくライダーなのだと大声で周りに言い触らしてる

も同然の行為だ。遅かれ早かれお前とあいつはまた対面する予定だったが、その予定が早まっただけで、こちらにはなんの被害も出ていない。御上にとっちゃ嬉しい誤算だったろうよ。…ま、あの竜はお前が自分の背に乗るなんてことまったく考えちゃいないだろうが」「え？なんですか？だつて自分から私に会いに来たんじゃ…」「本能とか勘とか、そういった曖昧な感覚であいつはお前に会いに来たに違いない。いくら人間とタイマン張れるくらいの頭脳を《竜》が持ってたとしても、そういうところは動物的なんだよ……、つてどっかの偉い学者サンが言ってたな」「はあ…」

返ってきた答えに曖昧に頷いたところで二ロバニアさんの歩みが遅くなる。

二ロバニアさんは軍人さんらしく背は高いし身体も厚みがあるので平均的な身長の方はその前を見ることが些か難しいが、ゆるゆるとその歩みが止まり出したのでわかった。

地下室を出てからおよそ10分弱。

よくわからない構造のWGSF施設内を歩きに歩いて、やっと目的地に到着するらしい。

それにつれて私の上司になる人ってどんな人なんだろう、という緊張が段々とピークに達しようとしている。

やっぱり二ロバニアさんの説明聞いといてよかったと心底思った。道すがらはまだそんなに緊張してなかった気がする。…あくまでも気がする、だが。

私、プレッシャーとかに本当に弱いんだからね…！

「あれがWGSF本部の中心、栄えある《竜騎士^{ドラゴンライダー}》の仕事場だ。…正確には指令室兼ライダーの詰め所らしいがな」

もうガクガクブルブルしている私を振り返って確認した二ロバニア

さんがやつぱり、って顔をしながら説明してくれる。

やつぱりじゃないよこちら真剣に毎回緊張と戦ってるんだから！

…とはさすがに言えず、大人しく説明に頷くだけにしておいた。

高身長の二ロバニアさんが私にも見えるようにと身体をずらしてくれたおかげで目的地のドアが見えた。固そうで重そうな鉄製っぽい感じのドアが廊下の突き当たりにある。

ドアの真上に打ち付けてある看板？みたいなのは二ロバニアさんが言うように指令室兼待機所、と書かれてあった。部署名、みたいなものだろうか。

…さっきはスルーしてしまったが、私が今から行くところは仕事場なのか指令室なのか詰め所なのか待機所なのかいまいち釈然としない部屋みたいだ。

「大丈夫か？」

「だいじょぶそうに見えますか…」

「ああ」

「……………」

「…冗談だ。何かあったら大抵のことは助けてやる」

今から入らなければいけないその部屋を恨めしそうに見詰める私の肩を叩いて二ロバニアさんが歩みを再開させる。

わりとお茶目と言うかふざけると言うか、いまいちよくわからない二ロバニアさんの広い背中を再び追いかけながら私は切に願った。ああどうか私の上司になる人が優しい人でありますように！

14話：はじめまして

緊張と私はもう切っても切れない縁なんだと自分に言い聞かせながら入ったWGSF本部の中心、指令室兼待機所（指令室兼詰め所？）……だかは想像以上だった。

私はこのWGSF本部のエントランスホールを見た時にも豪く感動えらしていたが、ここはその比ではない。

エントランスホールの半分くらいの面積の室内に数え切れないほどのテーブルとイス、そこに座してパーソナルコンピュータを操るこれまた数え切れないほどたくさんの人、空中を飛び交うホログラフイーの資料や映像、誰がなにを喋っているのかわからないんじゃないかと思えるほどの人の声、それに被さるように聞こえる電子でつくられた機械的な女性の声、人と物の間を縫うようにして歩く人の波、室内の全面部分を覆い尽くすほどの大小様々なホログラフイー式パーソナルコンピュータの数々。

街中やTV越しなどでも数回しか目にしたことがないような最新の機械が惜し気もなくあちらこちらを縦横無尽に飛び回ったり使われたりしている。

とにかくすごい、としか言いようがない。目まぐるしく動いて止まってるものがないのかと錯覚させるほどここは忙しく慌ただしく、そして技術の結晶で出来てみたいだ。そしてなにより、部屋の中にあるモノが一層、私の感動を2倍にも3倍にも増幅させていた。丁度、この部屋の天井から床の間に浮いているそれは一見するとただの硝子かなにかで出来たダイヤモンドに思える。大きさはおよそ7〜8メートル。色は無色……かと思いきやどうやらそうではなく、青みがかった透明、と言ったところか。くるくると緩やかにその場で浮きながら回転するダイヤモンドもどきは、言った通りに形はひし形だ。

そのダイヤモンドもどきを中心に一定の距離を保って……テーブルと

いうか人が全面に座って操作出来る形にしてある長方形の機械というか、なんだかそういう仰々しいもので囲ってあるのもきつと意味があるからなのだろうが、なんのためにそれがそこにあって、なんの役目があるのかも当然私にはわからない。

ただの飾り、というのは絶対ありえないだろう。うん、それだけは確かはず。

しかしあのダイヤモンド、用途も意味もさっぱりな私から見ても素晴らしいほどの存在感を放っている。

確かにこの部屋は最新の機械で溢れて明らかにデキル人風情の人間がたくさんいて宙を飛び交うホログラフィーも十分のインパクトがあり、それだけでも感嘆に値するのだが、でも例えばそれだけだとしたら感嘆、だけで済ませられる域なのだろうなと思った。

あのダイヤモンドもときがあるからこそ、私の今の感動…圧巻があるのだと推測出来る。

ド素人の私ですらもそう思えるほど、あのダイヤモンドもときにはそれだけの価値がありそうだった。

それこそダイヤモンドもとき、なんて言っていられないほどの。

そういったものがすぐくて、とにかくすぐくて、今から私の上司になる予定の人に会う緊張とやらが一瞬だけ吹き飛んだ。……悲しいかな、一瞬だけというのは部屋を見た感想の圧巻よりも上司になる予定の人に会う緊張の方が遙かに上だったからだろう。

こんな時くらい前向きで行こうよ自分…、と思いつつ、でもとりあえず今だけはここを堪能したいと緊張も暗い思考も追い払ってあっちこっちをきよきよと見渡す。

「すごいだろう？」

止まることを知らない指令室兼待機所内を忙しく観察していた私に右横にいる二ロバニアさんが笑う。それに出来るだけ自然な笑みではいと返しながら二ロバニアさんの方を見ると、彼は私が今まで

見ていたダイヤモンドもどきを指差した。

「あれ、なんだと思う？」

「あのダイヤモンドもどきですか？」

二ロバニアさんと浮かぶダイヤモンドを交互に見比べながらそう問い返すと、彼はダイヤモンドもどき？と驚いたようにまた逆に問い返してきて、それから凄い勢いでぶは、と吹き出して咳き込みだした。

ええええええ…？

「ちょ、…なんですか？」

「いや…うん、ダイヤモンドもどきな…。そう言われると見えると思っただらちよつと」

そこまで言って、二ロバニアさんが再度ぶぶつ、と吹き出す。

苦しそうにお腹を抱えているところを見ると、どうやら笑いが止まらないらしい。

それが異様に馬鹿にされたように感じて、私は目を据わらせてくちびるを尖らせた。

だってダイヤモンド如きに笑い過ぎじゃない？

「…あれのこと、一度もダイヤモンドもどきだっと思ったことないんですか」

「残念ながらないな。たぶん、ここで働いている人間でそう思ったことのある奴なんかそんなにいないんじゃないか」

まだ半笑いでそんなことを教えてくれながら二ロバニアさんが顎でなにかを示す。それに渋々従ってそちらへと視線を移すと、床と天井の中心辺りでぶよぶよと浮かんでいる話題に上っているダイヤモンド

ンドもどきが目に入った。

…二口バニアさんには笑われてしまったが、やはり私にはあの透明っぽくてひし形の物体はダイヤモンドもどきにしか見えない。

そりゃあWGSF本部の中心の指令室兼待機所、のそのまた中心に置かれていて、尚且つどういう仕組みかは知らないが浮いて回っているのだからとんでもないモノなんだろうという想像くらいはつく。それでもやっぱり正式名を知らない私にとってあれはダイヤモンドもどき以外のなにものでもないのだ。

…なんて、そんな下らないことで意地を張っても仕方ないのだけど。

「あれな、《電網》なんだよ」

ダイヤモンドもどきを睨み付けながら考え耽っていた私の耳に、まだ笑いを含んだ感じの二口バニアさんの声が入る。

まだ笑ってんのか、という怒りよりも先に二口バニアさんの発したでんもう、というその言葉が頭の中でぐるぐる廻って、やっと意味を嚙下出来た途端に私は勢いよく隣にいる二口バニアさんを仰いだ。

「電網！？あれが！？」

電網というのは、国全体に張り巡らされている一種の警報装置みたいなものだ。

私がああのかとはじめて路上で接触した時も電網のおかげで助かったと言っても過言ではないだろうというほど、この国の人々の平穏を守っているという重要な役割を持つ国から至宝扱いをされている機械のこと。

あいにくと一般の人間はその重要さから電網がなにで出来ていて何処から国中に張り巡らされているのかを知ることが出来ない…はず、なのだが。

「あれが…電網…？」

あっさりとアレハデンモウダヨー、とかまだライダーにもWGSFの人間にもなっていない一般人の私に教えてくれた…というか教えてしまった？二ロバニアさんの顔を見詰めながらまるで油切れの口ポットみたいなぎこちない動きでダイヤモンドもどき（仮）を指差すと、彼はまたもやあっさり、うん、と頷いてみせた。

「あれ電網」

「——！！」

その時の私の表情はA級ホラー映画に出てくるようなゾンビの顔だったと、後になって二ロバニアさんが教えてくれた。

ダイヤモンドもどき改め《電網》さまをがくがくと揺れて標準が合わない指で差したまま二ロバニアさんの顔を血走った目で凝視する。国家の重要機密らしい電網の存在をまだ一般人の私が知ってしまったかどうか、電網って機械じゃなかったんだとか、明日の朝日はもう浴びれないのだからとか、殺されるとしたらどうやってとか、とにかく半分以上は不吉で不穏なことが頭の中を占めていく。

「…別に存在抹消とかされたりしないぞ、レリア」

「そうそう、ライダー候補だからね、レリアちゃん。そのくらいの情報じゃなんともないよ」

「え？」

今まさにお父さんとお母さんとペットの鳥に心の中で別れを告げるような私のネガティブな性格をすでに把握しているらしい二ロバニアさんが呆れたように否定をしてくれたそれにほっと安心する暇もなく、その渋い声に被さって聞こえたもうひとつの否定の台詞に、私と、それから二ロバニアまでもが驚いて声が聞こえた方向へと顔

を向けた。

「おお、ロヴィーナか」

「こんにちは」

第一印象はとても可愛らしくて人懐こそうなひとだなあ、だった。声がした方を振り向いた私と二ロバニアさんの視線の先にはひとりの女の人がいた。

小さな顔に女性としたら平均的か、それより少しだけ高い身長。スカートから伸びる脚は細くて長く、同性の私でさえも見惚れてしまいそうなくらい綺麗だ。……というかすでに見惚れている。

ホントにいい脚だと思う。自分が今スカート穿いて太い脚を世間に晒しているという事実から逃避したくなるくらいには。

「お久しぶりです、二ロバニアさん。お元気でしたか？」

「ああ、もちろん。お前も元気、…そうだな」

「元気ですよ。僕もディセルネも、隊のひとたちも」

「そりゃなによりだ。…アニタとはちよくちよく会ったがな、お前たちとはそうそう出くわさないからあいつからの情報以外はなにも知らん」

「まあ僕らも僕らで忙しいし、二ロバニアさんだって負けず劣らず忙しいでしょう？そうそう会えませんでした、プライベートじゃ」

「お前たちとしてはプライベートなんかあってないようなものだろうしな」

出会ったばかりの女の人の脚を舐め回すように見る、という私の暴挙に気付いているのかいないのか、どうやら二ロバニアさんと知り合いらしい彼女は二ロバニアさんと和気あいあいと会話を始めてしまった。

「そうそう。この間のあの子の件ですが、どうしてあんなに傷付いていたのかやつとわかりましたよ」

「さすがだな。調査はお前と……、サクラスか？」

「はい、今回は特にサクちゃん頑張ってくれました」

「そうか。だったら後で礼を言わないといけんなあ。その件は俺の我が儘だったわけだし」

「あはは、ほんとですか？二口バニアさんに褒められたら喜ぶと思いますよ、彼」

… なんだか悲しいことにまるつきり蚊帳の外状態なので、モデルみたいな彼女の見た目をもう少しだけ観察してみることにする。

大体がスーツかおおよそこの部署の制服だろうと思わせる格好をしているこの室内の人間の中で、いま目の前にいる彼女だけはまったく違う服装をしていた。

紺、と言うより黒に近い色に袖口などにちよつとだけ赤が使われているシックな制服を着用している部署の人間とは真逆に明るい白をベースとし、鮮やかな赤と黄色と紺が所々にあしらわれているお洒落な感じの制服を着用している。

一見すると少々派手に見える制服なのだが、彼女が着ていると派手すぎではなく、むしろ品位よく見えるから不思議だ。

うーん、これが格の違いという奴なのだろうか…。

「……あれ？」

そうやって服装をストーカーみたいに観察しているうちに、その可愛らしい制服をどこかで見たことがあるような気がしてきた。

どこでだっけ…？ 気がする、ではなく確信を持って見たことがあると思うのだが、いまいちそれが思い出せなくて私は首を捻りながら目の前で楽しそうに二口バニアさんと話をしている彼女のことをますますじいつ、と見詰めてみる。

「…レリア?」

「レリアちゃん?」

うーん、何処でだっけ…、とほぼ無意識に彼女を見詰め続けながら考えて、あつ、と気付いた時には遅かった。

「どうした?」

話を終えたのか今までわいわいしていた二人が黙ったまま彼女の制服を変態みたいにマジマジと眺める私を、なんと逆に見詰め返してきているではないか。

二口バニアさんが心配そうに固まる私の顔を覗き込んでくる。

「なにかあったか?」

「いや、だいじょ…ぶです。ほんとに。あの、すみません、ちょっと考えごとを…」

不躰に彼女を観察していた恥ずかしさと二人の視線が自分に集中している緊張でしどろもどろに謝罪をする私を見て、二人は顔を見合わせ苦笑を洩らした後、彼女だけが私の方に再度視線を投げて寄越してにつこりと笑った。

第一印象の人懐っこいという私の想像を裏切らない、ひとを癒す笑顔で彼女が手を差し出してくる。

「ごめんね、放つといちゃって」

「あ、いえ!本当に大丈夫ですから!」

差し出された手のひらと、眉尻を下げて謝ってくる彼女に困惑しながら顔の前で右手をぶんぶん振って謝罪を跳ね除ける。

それを受けてまたにつこりと笑みを深くした彼女は差し出した手のひらを更に私の方へと押し進めてから差し出しているのとは逆の方の手で自分の胸辺りを示して見せた。

「はじめまして、レリアちゃん。僕の名前はロヴィーナ・ラッセル。こんなんでも一応、《ドラゴンライダー竜騎士》やってます」

よろしくね、と首を傾げた彼女…、ロヴィーナさんの台詞が私の思考回路を突き抜けて行った。

《ドラゴンライダー竜騎士》。

聞いた瞬間にああそうかと納得する。

この間あの事件に巻き込まれた翌日に見たTVや、それだけじゃなくてなにか大きな事件がある度に公の場に姿を現す信号機みたいな色をした彼ら。

どんな暗闇の中でも輝く白をベースに、危険を示す赤と警戒を告げる黄色と調和を表す紺をあしらった、派手にも見えるあの制服。そつだ。…鮮やかな色の彼らは、《ドラゴンライダー竜騎士》だ。

「えっと、…よ、よろしくお願いします…」

「うん、よろしく」

本物のライダーが目の前にいるという事実には軽い眩暈を覚えながら、私は恐る恐る彼女が差し出してくれた手のひらを握った。

おそらく緊張でびちゃびちゃだろう私の手を、彼女はやりわりと握り返してくれる。

それが柔らかくて優しい女の人の手のひらで、でもまめがあったり所々が硬かったりするライダーならではの感じさせる強い手のひらだったのにまた感動を覚えた。

はじめまして 貳

汗でびちゃびちゃな私の手のひらを快く握り返してくれた優しいロヴィーナさんに案内されたのは、ライダーたちの待機所だった。

そっぴやこの部屋に入る前に見た部署名だかが書かれていた看板には指令室兼待機所と記されてあったので、このホログラフィーが飛び交う忙しない部屋が指令室で、今連れて行かれる所が待機所なんだろうな、なんて考えながらせかせかと動き通し動いている人たちの間を通り抜けながら頭上や真横を飛んで行くホログラフィーを避けつつ感動していたその部屋を突っ切ると、突き当たりに控え目なドアがひとつあり、どうぞ、と丁寧に開けてくれたロヴィーナさんに感謝しながらそのドアをくぐるとそこそこな大きさの室内に入った。

中央にあるローテーブルとそれを囲むように配置してある白いソファ、部屋の隅には簡易キッチン…でも豪勢、と、壁に大きく映し出されているのはホログラムのTVだろうか。目で見て確認出来るのはそのくらいで豪華は豪華だしいいもの使ってるなあという雰囲気この部屋で、事実いいものを使っているのだろうが、しかしこれと言って別段驚くほど豪勢ではない、そんな部屋。

…たぶん、この数時間でいつもは見れない豪華豪勢なモノを見てきたせいで目が肥えているのだろう、通常の私なら凄い立派だと煩かったに違いないそんなレベルの部屋が失礼なことに霞んで見える。

「じゃあ、ちょっとここで待っててね。みんな呼んでくるから」

「みんな…?」

数時間で人間は変わる、とか世の摂理について悟りを開いていた私の背中を後からロヴィーナさんが軽い調子で叩いてきた。背後にいるロヴィーナさんを振り向きながら台詞の中の気になる単語を呟

くと、私と顔を見合わせた彼女はうん、と頷いてみせる。

「そ、みんな」

頷いてそれだけを肯定した彼女は詳細は語らずに、まさか、と押し寄せた嫌な予感に表情を歪めた私に笑顔を振り撒きながら私の隣にいた二口バニアさんと一言二言交わした後、待機所から出て行った。詳しく教えてくれなかったのはなにか意図あつてのことなのか、それとただ面倒だっただけなのか、もしくは私の予感が当たっていると見抜いていたからなのか。…激しく前者を希望したいところだな、と思いながら、やはり真意は当然わからないので、とりあえず再度ロヴィーナさんの言葉を嚙下してみることにした。

「待っててね、みんな呼んでくるから」、と彼女は言っていた。それはつまり、会わなきゃいけないかったのはロヴィーナさんだけではない、ということだろう。

つまり、って言うか、絶対。多分、って言うか、確実に。

「……………やっぱりか…」

まさかロヴィーナさんに会うだけで済むとは思っていなかったが、それでもやっぱりショックを受けた。嫌な予感が当たってしまったて思わず情けない呟きが漏れる。

ロヴィーナさんはとても優しくそれで雰囲気も柔らかい、まさにイイ人っぽいひとだったが、だからと言って彼女の同僚だか先輩だか後輩だかが彼女みたいにイイ人だという確証はない。大体、見ず知らずの人に会うこと自体が私には大きなハードルなのだ。人見知りもいいとこだとは自分でも勿論自覚してはいるが、自覚出来ていてもそうそうどうにかなるものではない。

…どこまでもマイナスな私の頭の中を、まだ見ぬ上司になる予定の人たち（複数形）が黒い嗤い声を立てて脳内を侵食していく被害妄

想甚だしいヴィジョンが浮かんでくる。

「あー……………止め止め」

自分で想像した被害妄想だとわかっているどうしようもないヴィジョンを振り払って、いつまでもドアの前に突っ立っているわけにはいけないとノロノロした足取りで敷かれている真っ赤な絨毯を踏みながらソファに近付いて行く。

そこそこな広さの部屋を突っ切る時、天井にぶら下がっている控え目な大きさのシャンデリアが視界にちらつくのを、やっぱり金かかっているんだなあ、と感じながらすでにいちばんいいポジションに座って煙草まで吸かしている二ロバニアさんの隣に腰を落ち着かせた。

「……………」
「……………」

ふー、と美味しそうに煙草を吸う二ロバニアさんの横で自分の膝の上に礼儀正しく置いた手の甲を眺める。別にこれと言って意味のある動作ではないが、なにもしないでいるとこれからロヴィーナさんが連れてくる人たちのことを考えて…否、考え過ぎてしまいそうだったから、言うなればちよつとした応急処置、みたいな。

緊張するから不安だからと二ロバニアさんばかり頼るのもさすがに限界がある。いくらなんでもそこまで自分が節操無しだとは思いたくないし。

ぐるぐると色んな意味で回る脳内で思考するのはもう一年前くらい昔に思えるほど遠い記憶となりかけた、二ロバニアさんと乗ったりムジン内でのことだ。

あの時、私は覚悟を決めるのだと二ロバニアさんに告げて、その言葉通り覚悟を決めた、…つもりでいた。

そつ、つもりだったのだ。言うまでもない。私はWGSF本部に来

てから……いや、来る前から、だけど……とにかく情けなさすぎる。
決めた覚悟はどこまでも情けなく、儚いというよりも脆い。大体、
覚悟を決められていたのかもこうなると甚だしく疑問だ。

普通の高校生ならばまだいいが、仮にも私は名門と名高いプリゼー
ラで軍人、ないし《支配者》^{ルーラー}を目指しているのだからもう少し大人
でなければならぬはずだ。

なにがあっても冷静でなければならぬと耳がタコになるくらい教
えられていたのに、ここまで有言不実行だと悔しさも呆れも悲しさ
も通り越すというものである。

そうそうどうにか出来そうにもない緊張と仲良しこよしだったとし
ても、せめて後ちよつとでもいいからマシにしなければ、と願った
ところでなにも変わりはないと知ってはいても切実に思っ
てしま
う。

「……………覚悟を決めるなんて、軽々しく口にしちゃダメですね」

「しようとする努力は認めているし、腹括ろうとしているのもお前
の言動とか表情でわかるからこの場合は一概に駄目だとは言わな
いんじゃないのか」

「……………ですか」

「ああ」

……ぼろりと口から滑り落ちた言葉に一拍の間もなく答えてくれた二
口バニアさんはこの数時間で私の性格を熟知し過ぎだと思った。も
ちろん、良い意味で、だ。

恥ずかしいことに、私がなにで悩んでるのなんか彼には全てお見通
しだったのだ。だから返答するのが早かったのだらう。

手の甲を見詰めていた視線を上げて、隣でさして短くもなっていない
煙草を灰皿に押し付けている二口バニアさんを見やると、彼は袈裟
袈なくらい私に向けて大きく肩を竦めて見せた。

「こう言っちゃなんだが、まだお前は17なんだろう、レリア。高い志は素晴らしいがそれが無理になるならそんなもん捨てる。心労でいつか倒れるぞ」

「わあい、馬鹿みたいに悩んでた私カワイソウ……」

私の悩みをそんなもん扱いした二ロバニアさんが言葉とは裏腹に優しげに笑う。

出会ったばかりで、しかも二ロバニアさんが私に会いに来たのがこの緊張及び悩み落ち込みの発端……とはさすがに言い切れないけど……、だというのにこの人といると安心する。普通に会話をしているとそうは思えなくともひとを宥めたり落ち着かせるのが凄く上手なんだとこの数時間で心底思い知らされた。

「……みんなって、私の上司になるひとのことですよ？」

煙草を灰皿に処分してぱんぱんと手のゴミを払う動作をしている二ロバニアさんに疑問符付きの台詞を呟いてみる。緊張しているからこそ心の準備が出来るように、これからなるであろう状況を知っておきたかった故の発言である。

私の呟きを受けて二ロバニアさんが微かに首を捻ってなにかを思い出す素振りを見せながらそうだと肯定して話を続けるのを胃がずきずきするのを感じながら認識する。

「ああ。ま、さすがに隊の連中全員には今日だけじゃ会えないとは思うがな」

「……………」

吐き出された回答にロヴィーナさんがライダーだと知った時とはまったく違う種類の眩暈を覚えて思わず額に手を当てた。

予想はしていたが直接聞くと破壊力が違う。やはりたくさんいるら

しい私がお世話になるであろう人たちのことを考えるとキリキリと軟弱な胃が痛む。

「たくさんいるんですか、その隊とやらのひとたち……」

まだ就職活動の仕方を学校で習っていないのに上司になるひと……どこるかひとたちに会って言われたってなにをすればいいのかわからないじゃないか。面接だって高校に入る時にちよろつとしただけで慣れているなんて口が裂けても言えない。

小さな覚悟の上に押し掛かる不安に問う声が情けないほど小さくなる。

声と共に身体もしぼんでいくような気がして背中を丸めると、頭のとっぺんに温かいものが触れる。確認するまでもなくそれがなんなのかもうわかっていたから大人しくしていると、その温かいものに頭の上をさすざすと撫でられた。

「たくさんもいないよ。ライダーってのは基本、国や世界を飛び回っているもんだからな。本部つつたってここは指令塔メインだからライダーやルーラーが数多く集まることも少ない」

「……そっか」

小さくて情けない私の問いかけに答えながら頭を撫でてくれた二口バニアさんに感謝して、弱音を吐くことは止めた。……たぶん、今だけだとは思っけど。

「……………がんばりマス」

「ああ」

あまり頼りにならない頑張る宣言と共にとりあえず出来るだけ頑張ってみよう二口バニアさんもいることだし、と最後にわしゃわしゃ

と犬を撫でるみたいに髪の毛を乱して離れて行った二ロバニアさんの大きな手の温かさに決意した…、その時だった。

恋ではなく心配と不安で高鳴る厄介な鼓動にやきもきしつつ、また膝の上に揃えた手の甲をまた見詰めだした私の耳にがちやりと部屋のドアが開く音が入ってきたのは。

ドアの開閉する音に思わずよくわからない構えを取りそうになるのをなんとか抑えて二ロバニアさんを見ると、彼は分かり切った顔で鷹揚にひとつ頷いてみせた。

それにちよつとだけ勇気をわけてもらって、レリアちゃん、と私を呼ぶロヴィーナさんの声がする方向に顔を向ける。

「失礼しまーす。連れて来たよー、レリアちゃん」

「おお、早かったな」

ほんとに帰って来た…！

ドアが開いた音と足音にぴきーん、と身体を固くした私の代わりに部屋に入ってきたロヴィーナさんに二ロバニアさんが立ち上がりながら返答する。

それをどこか遠いところで聞いている自分にはっ、と気付いた私は固まった身体を無理矢理解凍して偉い人に会うというのに座っているなんて失礼なことは出来ないかと慌ててソファからお尻を上げた。

立ち上がる際に左脚の膝を強かにテーブルにぶつけたが、痛いとか恥ずかしいとか喚いたり感じる余裕すらない。その私の慌てっぷりを間近で目撃した二ロバニアさんの苦笑が頭上で聞こえたが、笑わないでとかそれどころじゃないから仕様がないでしょとか、そういった説明をする余裕も、勿論ない。

馬鹿みたいに緊張してただ立っただけでも精一杯なのにそのくせなんとなく落ち着かなくて歩き出したい衝動に駆られつつでもやっぱり今出来ることなんか限られているから、かつかつとこちらに近付いてくる足音（複数形）に合わせて限界まで背筋を伸ばしたとこ

ろだった。

「なんですか、このちんちくりん」

「.....え？」

ロヴィーナさんの後に続いてやってきた彼に、そんな暴言を吐かれたのは。

はじめまして、参

「なんですか、このちんちくりん」

はじめ、その台詞を言われた時に誰に向かって言っているのか理解不能だった。

だって初対面の人に開口一番に悪態を吐く人間が普通いるとは思わないじゃない？

しかも名高く誇り高いWGSFの人間ならなおさらだ。そんな下らないことをする人がいるとは断じて思わなかった。

だというのに、部屋に入ってきたロヴィーナさんの後に続いてやってきた彼は私の顔を視界に入れるなりとんでもなく失礼な暴言を吐いて、しかもそれに止まらず改めて暴言に固まる私のことを検分するかのようじろじろと全身を上から下へ下から上へと見た後…なにを思ったのか腹立つ顔でハンツ、と私のことを嘲笑ったのだから、どうやら名高く誇り高いWGSFへの評価を改めなければいけないかもしれない。

まさかの事態に緊張も不安も吹っ飛んだが、けれどそれは嬉しいことではなく、それはむしろ緊張や不安よりも重大なことが起こったからの結果であって逆に不愉快である。

てゆうかなにこいつ…！！

頭の中はわりかし冷静でもやはり感情は抑え切れるものではなく、むかむかとした気持ちが湧き上がってくる。勝ち誇ったと過信してゐるあまりにも腹立つ動作と表情に思わず原型がわからなくなるくらいに顔を歪めた。

「……久しぶりだな、サクラス」

なんだこいつなんだこいつ失礼にも程があるぞ何様だ、とわなわな

震える私の頭上から苦笑と小さな謝罪と、それから最低男に話しかける台詞が降ってきて、思わず顔を上げる。声のトーンのまま本当に苦笑いしている二ロバニアさんと視線が合って考えるまでもなく宥められているのがわかったが、しかしいくら温厚で知られている私でも我慢出来るものとそうでないものがある。この非常識は我慢出来ない範囲のド真ん中をぶち抜いて貫いて行ったから、如何に天下に名だたるWGSFの人間、…もしかしたら《竜騎士》ドラゴンライダーかもしれないが、それでも許せないものは許せないので、視線で宥めてくる二ロバニアさんの優しさと余計な衝突は避けようという常識は擦じ伏せて、私はふん、と息巻いた。

絶対謝罪させてやる！人のこと見るなりちんちくりん扱いしやがって…！

いけ、レリア！ビビりでチキンで極度の心配性だつてやるときゃやるとこ見せてやれ！

心の中で激しく自分を叱咤激励しながら鼻息を荒くする私を見て悪の根源みたいな悪魔男に何やら言い返そうとしているのがわかったのか、まいったなと眉尻を下げる二ロバニアさんから外した視線を奴に移しつつ、あんたね、と口を大きく開けて強い口調で捲し立て…ようとしたのだが、敢え無く私の絞り出した文句と勇氣は無残にも打ち砕かれてしまった。

「あんたねっ、」

「はい！お久しぶりです二ロバニアさん！」

「……………はあ？」

なんでそんな初対面の人間に失礼なことを云々、と礼儀正しい一般人ぶった言葉を浴びせてやろうと思っていた私など意に介さず、焦点を合わせた先に居た常識知らず男の視線の先は、もちろん私…ではなかった。

私の台詞に無遠慮に被さるようにして聞こえてきた台詞と私と奴の

温度差に、正論で着飾ったはずの文句とはかけ離れた間抜けな声が口から飛び出る。

しかもなんか…二ロバニアさん、とか聞こえなかった、か…？

「えー……………」と…」

はい！お久しぶりです二ロバニアさん！と、まるでドラマに出てくる好青年よろしく爽やかな声音で言われたその台詞の意味を理解するのに時間がかかってしまう。

え、いやだって、今の誰が発言したの…？とゆーかあんた何処見てんの…？

自問してみたところで答えは疾うに出ているのだが、わかりたくない理解出来ない意味分かんないの三拍子で、私の脳は自分で弾き出したその答えを認めようとはしない。

「あー…えー……………」そう、だな。久しぶりだな。…うん。…多分、三ヶ月ぶりだ。…………あー…………まあ、なんと言うか…、元気、そうだな？」

「はい、元気です！二ロバニアさんもお元気そうだなにより！」

がりがりと困ったように後頭部を掻きながら私と無礼男の間で焦点を定められずにいる二ロバニアさんのやたらと間の多い台詞に虚しさを覚えるし、逆に二ロバニアさんと会話が出来て幸せだと全身で語っている奴——サクラスというらしいが、奴の楽しそうな笑顔にも虚しさを覚える。

いいですよ、そんなに気にしなくても…。更に虚しさ倍增するし…。ちらちらとこちらに気遣いの眼差しを寄越す二ロバニアさんに心からそう思った。

「ああ、俺も元気だ。軍人は身体が資本だからそんなことは当然だ

ろうが……」

「そんなことはありません、いつも体調管理をきっちりとされている二口バニアさんは素晴らしいです!」

「…お前もいつも元気だろうが…」

「二口バニアさんと隊長の次に、ですね!」

「……………」

…女子高生みたきやっきやっつと話を進める奴を見て、さすがに現実逃避は出来ないと悟った。…うん。つまりは、そういうことなのだろう。

初対面の女の子のことをちんちくりん扱いしたあげく鼻で嘲笑うという暴挙を成し遂げたクセに、もう私の方など気にもしない…という奴の脳内に“私”という存在がいるかどうかも疑わしいほど一切目もくれず、だ。

つまり初めから私など眼中になかったと、そういうことなのだろう、きつと。だとしたら、怒り心頭したはずの私のあの激しい気持ちは何処へ向ければいいのだろうか…。

唐突に怒りの矛先を失った、というか怒りの矛先に華麗にスルーされた私は凄くいたたまれない存在である。

「先にあつたあの事件、先輩とオレで調べさせてもらっただけですけど、二口バニアさん聞いて下さいましたか?」

「さっきロヴィーナから聞いた。頑張ったんだってなあ、サクラス。あいつも褒めてたぞ」

「本当ですか!?!」

私を罵った時とは真逆過ぎる声音と表情と、犬が飼い主を見詰めるようなきらきらとした眼差しで二口バニアさんに笑いかける奴の豹変ぶりにぼかんとしつつも、わりと冷静に今の自分のポジションを見極める私にハハハと乾いた笑みが零れる。

ああ、私ってばいつもこんな役回り…。

悲し過ぎる現実になるーるー、と心に秋風が吹き荒んで心身ともに冷えていく。

ガツンと言ってやろうと意気込んで握り締めた行き場のない右手が空回りを強調して更に虚しい。とりあえずどうしようもない右手を惨めな気持ちでそろそろと定位置に戻して、明るいオーラを振り撒いている奴の向こう側、申し訳なさそうな苦笑とも失笑とも取れない複雑な顔をしているロヴィーナさんに意識を向けた。

必死に訴える私の視線に気付いたのか、今度こそ正に申し訳なさそうな表情を浮かべながらロヴィーナさんがこちらにやって来てくれる。

何か言いたげに口を開きかけたロヴィーナさんをちよつと申し訳ない気分になりながらもそれを制して、意を決してあることを聞いてみることにした。……これが肯定されるか否定されるかで私の今後のWGSF生活が左右されると言っても過言ではない心臓に悪い質問だ。

「……………あれが私の上司になる人ですか？」

「え？…ああ。うつん、違うよ。あの子はね、…レリアちゃんにとつたらどの位置にいるのかな…うつん、と、……先輩兼同僚、かな？うつん。そんな感じだと思う。追うべき背中であって、共に励むべき友人、というか」

「ゆ、ゆうじん？」

目玉が出るくらい驚いた、とはこのことだろう。

違う、と否定して貰えてとてつもなく嬉しかった。だってあんな奴が上司になりでもしたら私はきつと間違いなく、ストレスでしんでしまう。

けれどその後に続いた言葉が疑問と言うか…甚だしく理解不能だったからプラスマイナスゼロ…いや、それでももしかしたらマイナス

かもしれない。

だってゆうじん？私とあいつが？ユージン…って、友達、ってこと？驚いて、というよりもショックを受けて私とあいつが？と聞き返すと、ロヴィーナさんは苦笑をしながらうん、と私の問いに頷く。それからえーとかあーとか、断続的な母音を発してから視線を空中に漂わせつつ、人差し指を立てて同僚だか後輩だかの弁解を開始した。

「ごめん。あの子ちょっと無愛想と言うか、ちよつと、ひ、人見知りと言うか…」

「……不躰の間違ひなんじゃないですか」

「う。…いや、……うん…そう、だね…、うん。…ただひたすらごめん」

私が言うのもなんだが相変わらず楽しげに二口バニアさんに纏わりついてゐる不躰男はまだ若く見える。多分、私よりは年上だと思うが、そんなに変わらない年齢のはずだ。

だったらまあ、男は女よりも子供だと通説にもあるわけだし、ロヴィーナさんも必死にフォローしているし、何より奴と会話中の二口バニアさんがさっきから私の方をちらちらと気にしてゐてなんだかむしろこっちが申し訳なくなってきたので、取り敢えず今は納得しておくことにした。

…むかついてはゐるし、友人だとかそんなのは絶対認めないけど。

「大丈夫ですよ、別に。ロヴィーナさんが気にすることじゃないですし」

「うーん、でもサクちゃんは僕の後輩だしさ。…本当にごめんね、レリアちゃん。もう少し注意しとけばよかったんだけど」

「いいえ。平気です。ちんちくりんなのは事実ですので」

「レ、レリアちゃん…」

今出来る精一杯の笑顔と冗談をロヴィーナさんに向けると、彼女は安心したように胸を撫で下ろして柔かい笑いを返してくれた。
いやあ、ロヴィーナさんはやはり良い人だ。荒んだ心にロヴィーナさんの笑顔が沁みる。

それに引き換えあの不躰男、こんなに優しくて聡明なひとが上司だから先輩だかだというのになんて野郎だ、とうきうき幸せそうな奴を横目で睨む。

ホントに女子高生みたいなノリで会話をする奴と、応対にやや困っているらしい二ロバニアさんを見てあいつ二ロバニアさんのこと困らせてやんのー、と嘲笑った後に私もここ数日間あの人をめっちゃ迷惑をかけたのだと思い出してその気持ちは心の中に留めておくことにした。

けれどあそこまで困った風な応対をしている二ロバニアさんを見てもなんとも思わないのかなんなのか、べらべらと捲し立てる奴よりかは私のが幾分かマシなはずなので、三割嘲笑い、六割恨み、一割で気付けとその他の感情を含めた眼差しで念じながら奴を視線で刺す。

私の頭の中の妄想では、奴は既に身体中穴だらけである。ふーんだ、ざまあみろ！

「……………サクラス」

「はい？」

「あっち行くか」

「……………はい？」

その疎ましさ全開のねっちょりとした視線に気付いたらしいのは当事者の奴ではなく二ロバニアさんで、その二ロバニアさんが、なおも話を続けようとする奴を止めて、私を手で示してくる。

げ、なんのつもりだあのおっちゃんと思っただが、まあ当然だとも思った。なんせ当初の目的は私と私の上司になる予定のひとつ

の顔合わせであって、奴が二口バニアさんと天真爛漫に話をするこ
とではない。

まだまだ積もる話があったらうに、その話したい相手に制された
ばかりかちんちくりん扱いした歯牙にもかけていないときつと自分
では思っているであろう私を示された奴がこちらに向けた顔は、大
いに嫌そうで不快そうだった。

私も人のこと言えないくらいには引き攣っているに違いなければい
けど、あそこまで拒絶した表情をしなかったって、と思わせるくらい
に奴の顔は最悪で、それを見た私の表情筋も負けず劣らずと引き攣
る。きつと顔面にげ、って書いてあるに違いない。

出会ってものの数分で互いにこいつとはそりが合わないと認識し合
っている仲の私たちは、困った顔をしている大人ふたりに見守られ
ながら適度の距離を保って近付き、それから気を遣っているのがひ
しひし伝わってくる大人ふたりのもとで適當過ぎる挨拶を交わした。

「……………どうも」

「…ああ」

以上、会話終了。これ以外に話すことなどありません……とはやは
り行かず。

「こら、サクちゃん！君の方が先輩なんだから、ちゃんとしなきゃ
駄目でしょう？挨拶だけじゃなくて自己紹介は？大体、出会い頭に
失礼なこと言ったりして…」

「事実を言って何が悪いんですか。何処の馬の骨とも知らないこん
な奴に自己紹介なんて必要ないと思いますけど」

「だからそれを知るために話し合っただよ。当然だよな？」

「それは…まあ、そうですね」

「さっきのは明らかにサクちゃんが悪いよ。栄えあるWG SFの人
間なら自分の非くらい認められるよね？」

「……………はい」

私としたらこんな奴と自己紹介し合いたくもないし、さっきの挨拶で十分で、出来れば一緒にいるのも嫌なんだけど、そんなことを大人であつて目の前で明らかに不満そうにしているこいつの先輩だからであるロヴィーナさんが許すはずもなく、彼女は滔々と奴に説教をし始めてしまった。

気にしてないと言つたら嘘だけど、別にいいですよ、と言おうと思つたが、どうやら雰囲気があることと言えるような空気ではないのでいつの間にか煙草を吹かしている傍觀を決め込んでいる二口バニアさんと一緒に大人しくしていることにする。

…説教されて少しではあるが反省しているらしい奴を見るのが楽しいから、というのももちろんあるけど。

これこそざまあみろつて感じで、ささくれ立つた気持ち少し和らいだ。さすがロヴィーナさん。いい仕事をしてくれる。

私ももうちょっと大人になろう、とそう決意した時、不満ながらもロヴィーナさんの言葉を聞き入れたらしい奴が私にくるん、と向き直つた。

どうやら嫌だ嫌だと語っているその顔で私に自己紹介をしてくれるらしい。

奴の隣でごめんこれが限界だったと表情で喋りかけてくるロヴィーナさんに首を振って感謝の意を示したところで、機嫌悪そうに下がっている口の端と反対に吊り上がっている眉に寸分違わぬ刺々しい声音が奴の口から飛び出した。

「サクラス・エンブリー、政府直下特殊戦闘部隊WGSF所属・第4突撃隊隊員……………デス」

…さっきの二口バニアさんに対するあの態度との違いはなんなんだと突っ込んだらお終いだと感じさせる豹変ぶりではあるが…まあ、

許容範囲だ。

ロクに目も合わさずにあからさまにかつたるそんなポーシングでちんちくりん発言の謝罪はなかったし片言だしなんか紹介されてる気もしないけど、…仕方あるまい、許してやろう。ただ怒鳴りつける勇氣というものが今の私にはないから、とかでは決してない。さっきはあまりのことに腹が立つというより頭に血が昇ったから強気だったわけじゃないし、私のが大人なんだもんね、と自分自身に言い訳しながら相変わらず目を合わせようとしないう奴の斜め横顔に私も自己紹介をすることにした。

うん、… やつと当初の目的が果たせそうでよかったよかった。ここに至るまで長かった道のりに少々疲弊しながらも安堵で胸を撫で下ろし、口を開く。

「……初めまして、レリア・シュープリーです。…えー、と」

そこで一旦言葉を切って、奴の後ろにいる二ロバニアさんに視線を投げかけた。

言うべきことはわかっていだが、本当にそれでいいのかという確認のためだ。後は気恥かしさと、それには妙なプレッシャーがあるから、言わなくてもいいかと聞きたかったんだけど…。

けれど目を合わせた二ロバニアさんは私の視線の意味に気付くと、全部理解した上でだろう、彼はひとつだけ小さく頷いた。それはつまり私が言おうとしていることは間違いではなく、しかも言わなければいけないことだと伝えてきていると瞬時に理解する。

…うう、結局こうなるってわかってたけど、これは緊張する！

頷いてくれた二ロバニアさんに頷き返して、私は今にも震えそうな手と脚に力を入れながら大丈夫だと自分に言い聞かせた。

うん、そう、大丈夫。だって未だに納得出来ないけれど、私はそうなんだって二ロバニアさんが再三言ってたじゃないか。こんなことでビビるな、私。

気合いは十分、覚悟もそれなりに。

二口バニアさんのGOサインに答えるべく乾いたくちびるを舐めて、私は止めてしまった自己紹介に怪訝な顔をしている奴に向き直って、現実だけれど嘘のような、認めたくないけど嬉しいような、とにかく緊張するその事実を自分ではじめて言葉にした。

「初めまして、レリア・シューパーです。プリゼーラ高等学院生
物学科の2年生で年は17歳。好きなものはリラックスで、嫌いな
ものは緊張すること、で、——それから、《竜騎士》ドラゴンライダー候補です。
どうぞよろしく願います」

はじめまして 肆

世界に恩恵と平和を与える堅固にして崇高なる《ドラゴンライダー竜騎士》の候補だと己の口から明言するということは私にとつて酷く神経と勇気をすり減らさないといいけないことであり、目の前のこいつみたく堂々と胸を張って誇りを掲げて言えるような言葉ではないと、先ほどの自分と今のこいつを見比べながら心底そう思った。

ライダー候補という世間に誇れるその事實は、けれど17年間並々平凡に暮らしてきた私にしては余りにも重過ぎるのではないのかと、そう感じたのだ。

……ま、今更ゴタゴタ言つても仕様が無いのだろうけど。

「オレもライダー候補だ」

「はあ……」

ライダー候補だと明言した私を待っていたのは予想通りの素晴らしく腹の立つ奴——サクラスの発言で、こいつがとかありえないとかなにかの間違いじゃないかと、とにかく失礼なことを言いたいだけ言つてやっと落ち着いたらしいその次には、オレもそうなのだと続けられた。思わずなにが、と問い返した私を馬鹿にする眼差しで《ドラゴンライダー竜騎士》の候補だと教えられて、はあ、と気の抜けた返事を返す。すると私の返答が気に食わなかったのか、奴は眉間にしわを寄せて苛々としたオーラを纏いながらそれだけかと表情で問い掛けてきた。私としたら、だって私もさっき言った通りライダー候補だし、芸人張りのリアクションの取り方なんて知らないし知りたくもないし、もし言えるとすればあれだけ偉そうだったのに候補なんだあんたもくらいであるが、そんな発言をすれば最後、地の底まで恨まれて叩

かれそうなので賢明に控えておいただけに過ぎない。

…だというのに他に何を言えと催促するのだろっ、こいつは。なんの感想も貰えないのってもしかしくともあんた自分のせいなんじゃないのか。

「…なんだそのハア、つてのは」

「……スミマセン」

「……………」

まさかそんなことを考えているとは露知らず、相変わらずなんのリアクションもしない私に焦れたらしい奴が不機嫌丸出しの顔で何かないのかと催促してくるが、今考えていたことはやはり言えるはずがないし、他に言えることがなかったからだと機嫌を害した顔をする奴に言えるだけの勇氣も氣力も既に残ってなかったのでとりあえず頭を下げて穩便にこの場を済ませることにする。

すみません、って結構便利な言葉だね、…とか腹の底で感じているこの数時間でちよっぴり大人への階段を上ったに違いない、そんな新生な（決して良い方向へではない）私の態度に言う事がなくなってしまったらしいサクラス……さんは未だ納得がいかないような顔をしながらも私の思惑通り渋々と引き下がってくれた。

うん、よし。なんか勝った気分。いいぞ、大人な私。あからさまに渋々な奴に、ちんちくりん発言の借りを返せたような大きな氣持ちになつて機嫌が少しだけ向上する。

そんな私を見て、奴の不機嫌だった表情が不貞腐れたものに変わっていくのもとても楽しい。自分の方が大人のはずなのに私に子供よろしく感想を催促したことが今になつて恥ずかしいみたいだ。

ぷぷ、ダッサー、と心の中で嘲笑つて、けれどすぐにこれ以上は私だって大人気ないと止めることにした。せっかくの大人の余裕が台無しになるし、性格も悪く見えるしね…。

「……………」
「……………」

と、そこへ、殺伐としながらも自己紹介とささやかなコミュニケーションを終えた私とサクラス……さんの元へ近付いてくるひとつの足音がした。この部屋にいるのは私を含めた4人だけで、1人は私の目の前にいるのでどう考えたって足音の主ではないのだが、まあ考えるまでもなく答えは限られている。

大体予想はついているけれど、と思いながらそちらへ視線を向けると、やはり予想通り見慣れた顔が目に入った。

「二ロバニアさん」

煙草を片手にいつの間にか私たちと距離を取って傍観を決め込んでいた二ロバニアさんが灰皿を片手にこちらへと近付いて来る。

名前を呼ぶと、彼は煙草を持つ手を振り回して応えてくれた。

……今はどうでもいいことだけど二ロバニアさんは相当なヘビースモーカーらしい。気付けば煙草を指に挟んでいる彼に、今度もう少し控えた方がいいんじゃないかと助言を試みることにした。あるいはもっと軽いのにするとかね。

「サクラス」

「はい！」

お節介を計画する私の横をすり抜けて、二ロバニアさんはサクラス……さ、…もう面倒臭いのでサクラスの前に立った。なんだ私に用じゃなかったんだ、と思う私を余所に、話しかけられたサクラスはしゃきーんとまるで背中パイプでも入れたみたいに背筋を伸ばして良い返事をして、目の前に立った二ロバニアさんをきらきらとした目で見詰めている……ってあいつは二ロバニアさんの犬か。

二ロバニアさんを前にするところと変わる表情や声音に幻想で立てられた耳と勢いよく振られる尻尾が見えてくる気さえする。よくそこまで臆面もなく好き好きオーラを纏えるものだ、少しだけ、本当に少しだけ感心した……りしなかったり。

「他の連中はどうした？」

「隊長とダンさんは任務で第18部隊を引き連れてリダリスに、リチャードさんは訓練室に籠っているらしく連絡が取れませんでした。アニタは……えーっと、……すみません、わからないです……」

犬顔負けの、そんなサクラスの態度は当然のことなのかもしれない。慣れてしまっているのか、少々戸惑ってはいるもののそんなに気にする素振りも見せずに会話を始めてしまったところを鑑みるに、サクラスはやはり犬なのかもしれない。なんて結論に辿り着いた私の耳に、二ロバニアさんの問いと、サクラスの返答が入ってくる。知らない人の名前が出てきて私としたらちんぷんかんぷんだが、どうやら話の中心にいるのは私……というか、私に関わるお話をしているらしい。

みんな連れてくるね、とこの部屋を出る時にロヴィーナさんが言っていたみんなというのはどうやらサクラス1人だけを指すわけではないと感じてはいたが、二ロバニアさんとサクラスの話を聞く限りそれはどうやら確定、みたいだ。……残念なことに。そう、凄く残念なことに。だってサクラスの台詞に4名ほど名前が出て来たではないか。

ということはまだ会わなければいけない人が少なくとも4人はいるだ……？

慄く私とリンクするように、隊員の行方を把握しきれていなかったことを恥じているのか申し訳なく思っているのか、答え終えたサクラスが居心地悪そうにすみません、と呟きながら身動きするその姿に垂れ下がった犬の耳と尻尾の幻影を見た。

…もしかしたらあいつ同様落ち込んでいる私にも、何か動物の耳とかが生えているかもしれない。そんな気分になるくらいにはブロークンハートだ。

「ああ、気にするな。アニタは仕方ない」

「ニロバナアさん……！」

けれどそれを気にする様子もなくニロバナアさんが快活に返答をしたので、サクラスは落ち込む私を置いてすぐにはい！と再び良いお返事を返して元気に復活してしまった。

サクラスの茶色の頭に勝手に見ていた犬耳がぼろりと取れる。

あー……いいね、単純で、あなたは。

人のことは言えないくらい単純思考である私に簡単人間のレッテルを貼られた可哀想なサクラス君と会話を終えたニロバナアさんが、寂しそうな表情をするサクラスを置いて私に向かって来た。

何か決定したんだろうかと首を捻りながら視線で問い掛けると、彼はぼりぼりとひげが生えた顎を掻きながら私と同じように顔を傾けてみせた。その右に傾いた顔が少しばかり申し訳なさそうだったので、ああ今日はこれでお終いなのかと答えを聞く前に直感する。

「…悪いな、レリア。今日はロヴィーナとサクラスにしか会わせてやれないみたいだ」

「あ、はい、大丈夫です。えーと…」

「泊まりだね」

やっぱりか、と思いながら、ライダーに限らず《支配者^{ルラー}》というのは忙しい職業だと分かり切っていることなので、別に文句も不満もなかった。…強いて言うなら緊張しなければならぬ期間が延びたことが新たな不安の種になったことくらいか。

しかし今日のうちに会えるのは2人だけだとわかった時点で、でも

じゃあ私どうすれば、とそこまで言いかけたところで背後からだつたらと私の台詞に被さってくる声がした。確かめるまでもなく、ロヴィーナさんだ。

「とまり？」

いつの間に近付いてきていたのか、ひょこりと私の肩越しに顔を覗かせた彼女は私が復唱した台詞にうん、と頷く。

頷く動作に合わせてさらりと揺れる彼女の髪の毛が頬を滑るのがくすぐったいので、身体を反転させロヴィーナさんの方を向きながら再び不思議そうな表情を試みせると、ロヴィーナさんは人差し指をびし、と立てて見せた。

その指先で放物線を描きながら私と背後にいるニロバニアさんの間に視線を漂わせる。

「あれ？はじめからそのつもりだったんじゃないの？今からお家に帰って、また王都まで来るんじゃない？あ大変でしょ」

「ああ……そっか。ですよね」

どうやら放物線は私の地元である首都・フォスマーギルと今いる王都・ソンドージェの距離の長さを示していたらしい。

ロヴィーナさんの説明と指の動きで、緊張と初の王都訪問の興奮であまり明確には覚えてはいないが、首都からここまで来るのにそこそこの時間を有していたことを思い出した。また列車に揺られながら自宅に帰ったところでどうせすぐにこちらにとんぼ返りするのだろうから、ロヴィーナさんの言う通り帰った方が大変だろうし、なにより帰るだけ無駄である。

そっか、あまり考えてなかったけど、私は今日から数日間王都に滞在か…。

未だに首都と王都の距離をあらわす放物線を何度も描き続けている

ロヴィーナさんの言葉で『泊まり』の意味を理解した私は、背後の臨時保護者の顔を窺うことにした。

くるりと振り向いた私を見て、二ロバニアさんは「ああ、泊まる場所か」と頷く。

うん、そうだ。泊まる場所。まさか野宿しろとは言われなと思うてはいるが、二ロバニアさんが相手だと失礼ながら些か不安になつてしまうから、確認として尋ねておきたかったのだ。

「部屋なあ…何処が最適か…」

「こういう場合は普通、軍の寮がゲストルームですよ。ライダーの宿舎は、…さすがにまだありえませんか…」

視線を部屋に巡らせながら何処がいいかと模索しているであろう彼に、指の動きをやつと止めたロヴィーナさんが助言をする。

それを耳にした二ロバニアさんが一旦動きを止めて、ああそうかと手を叩いた。

どうやら私の宿泊先が決まったらしい。

「そうだなあ、レリアはまだ正式なライダーでも候補生でもないからな。宿舎は無理だろうから…、ここから一番近いのはゲストルームか？どうせ手続きを踏んでWGSFに属すようになれば個人の部屋が与えられるんだ。その前に居心地が良い場所が出来るよりもまだ仮住まいのがいいだろうし、本部から近い方が何かと安心だろう。」

…よし、ロヴィーナ。レリアは取り敢えずゲストルーム行きだ」

「わかりました。じゃ、僕が案内しちゃいますね」

そう言えば、家から抱えて持ってきた私の荷物はリムジンに乗って降りた後、運転手の人が何処かへ運んでいたような気がする。

あの中には母が呆然自失していた私に変わって色々と王都に訪れるために必要なものを詰め込んでいたから、きつと泊まるために不可

欠なものは全部入っているのだろう。

心配することは何もない。

まるで囚人を監獄に入れるみたいな言い方で泊まる場所を言い渡された私は、ロヴィーナさんに着いてくるよう促されて二ロバニアさんに別れを告げ、今までの話についてこれなくて不満顔のサクラスにも優しさで頭を下げてやってから待機所を後にした。

15話：前を向け

WGSF本部を出て徒歩10分程度で着いた、少し値が張るホテルの一室と言った風情のゲストルームに通された私は、その部屋で何をすることもなくふかふかのダブルサイズのベッドに寝転んでいた。今日は疲れただろうから早く休んだ方がいいよ、とロヴィーナさんに言われたそれを正しく実践しているつもりではないが、ただ、今はなんのやる気も起きなかった。

ロヴィーナさんの言う通りただ疲れているだけかもしれないが、多分それだけではない。

「……………」

ふう、と息を吐きながら天井から床まである大きな窓に目をやれば、建ち並ぶ数々のビルに邪魔されて見づらいけれど橙色に染まっている空を認識することが出来る。

眠りに就くにはまだ早過ぎるし、夕食はあいにくと食べたい気分ではなかったのでも今日ばかりは無理だとロヴィーナさんに断っておいたから、つまりこの時間帯に一般の人がやっていることをしなくていい私にはやることがない。

…まあ後半はどう考えても自業自得なので文句のつけようもないのだけ。

誰かが運んでくれたらしいリモジンに乗るまでは持っていた私のボストンバックがちょこんと部屋の隅に置いてあるのが視界に入っても、TVや部屋の壁に埋め込まれている本棚を見ても、やる気や暇を潰す気力は湧いてこなかった。

暇を潰すにはもってこいのそれらも、今の私には無用の長物だ。

TVの電源を付けても、興味を引く本を手にとっても、きつと全然身が入らないで逆に苛々するはめになるのが目に見えている。

それから何よりやる気だ。根こそぎ誰かに持ってかれたかのように指一本、瞼を開けているのもかつたるい。皆無と言うよりこれはもうマイナス状態だ。

さっきまではそれなりに元気だったというのに、一人になった途端に襲ってきた無気力感と疲労感に内心自分でも驚いている。

ホームシック…は、まださすがにありえないと思うし、今日はほぼ一日中緊張していたから疲れて当然だとも思うが、こんなにも燃え尽きるとはさすがに予想していなかった。

何がそんなに私の気力を削いでいったのかと人知れずに考えようと、はたと止まる。

きらきらと地面から生えているたくさんのビルを照らしながら沈んで行こうとしている太陽を視界から追い出すために目を閉じた。

そうすれば、まるでさっきまで一緒にいたかのように鮮明にひとりの人間の姿が脳裏に浮かぶ。

ホームシックじゃない。疲労困憊でもない。

考えるのもふざけてるほど、原因なんかとくに分かっている。

「アデラ…」

繰り返し繰り返し、ふとした拍子に瞼の裏に現れては消えるのは彼女だ。

…原因、なんて呼ぶのは些か不謹慎と言うか、押しつけがましい気もするが。

ここ数日間で、私は夢にも視たことないような毎日を過ごすハメになった。

もちろん、良い意味でも悪い意味でも、だ。

《^{ルラー}支配者》の資格を取るのがとても大変で危険なことだというのは世界的にも周知の事実で、当然私だってそれをちゃんと理解しているつもりだった。

ニュースで軍人やルラーたちの訃報を耳にすることも多いが、取

得した後のことではなく得る過程でだって死人が出ることもある、そのくらい危険極まりない場所に私はいるのだと、理解しているつもりでいた。

何処何処の何々学校で演習中に何人死亡、とアナウンサーが原稿を読み上げるのを、ああ私も気を付けなければとか同じ年くらいの子が同じ職業を目指している途中で死してしまった現実に関心を痛めながら聞いたことだって何回がある。

試験中や演習中に思いもよらない事故がある事例を、そうやって何度も聞いていたのに、まさか自分たちがその事例の仲間入りをするととは露ほども考えていなかった。

油断していたわけでも舐めてかかったわけでもない。

でも、理解しているつもりだったわりには何処か遠い自分たちとは関係のない出来事なのではないかと、そう思っている部分も無きにしても非ずだったかもしれない。

驕りだったのだろうか。覚悟が足りなかったような気もする。

死ぬのは自分じゃなくて、例えば今回みたいに大切な友人たちかもしれないで、残して行く側になるのではなく残される側になるという覚悟を、多分していなかった。

死に直面しているのは当然、私だけではなく同じ場所に立つ周りの人間も巻き込んだ話だというのに。

結局、私が怪我ひとつ負うこともなく無事に生還したことで、考えの足りなかったそれが浮き彫りになる結果となった。気を付けようと心掛けていたのは己の身のみで、死ぬかもしれない現実自分だけに降りかかるものだ、色々なものが足りな過ぎた中途半端な思考がどれだけ甘い妄想にすぎなかったのかを身を持って思い知ることになった。

更に言うならば私は、死ぬのは自分だけ、という形の覚悟もほぼ皆無だったのだからこれはもう笑うしかない。

だって私は、崩れ落ちる試験会場に踊る炎を見て、想像でも夢でもなく現実で迫りくる死が怖くなって踏み出そうとした足を易々と引

っ込めたのだから。

——そんなことがあつて当然のことながら自己嫌悪に陥った私の目の前に現れたのは、実は無事生還していた彼女ではもちろんなく、手負いの竜だったのだから自分の運の悪さを呪うしかないとの時は心底思つたのをよく覚えていてる。

なんの因果なのかは知らないが、大切な親友を助けられなかった翌日に街中で竜と対峙することになるなんて、それこそ夢にも思わなかった出来事だったのだ。……まあ街中でいつ何時、竜に遭遇してもいいように構えている人もそれはそれで問題がありそうなものだけだ。

その数日後には、突然現れた軍人のおじさんに《竜騎士^{ドラゴンライダー}》になれると告げられてよく理解もしないまま、あれよあれよと言う間に王都にまで到着。

電網の正体を知つて暗殺に脅えたり、覚悟について考えたり、相変^{テラ}わらず元気に落ち込んだりして、それから私はそこで、本物の《竜騎士^{ドラゴンライダー}》に会つた。

とても人を安心させる優しい雰囲気を持ったそのライダーさんと会うどころか握手して話までして、彼女の後輩であるやたら腹の立つ奴にも会つたけれど遠くから見ている分には中々面白い人で、それから王都のこんな良い部屋に泊まることにもなった。

私の父は軍人だけど、あまりいい階級ではないので給料も一般のビジネスマンと然程変わらないからこんな良いホテルには多分易々と泊まれないだろう。……流血でも覚悟しない限りは。

とにかく、私は今日一日で普段では絶対に経験出来ないであろうことを体感してきたに違いない。

そりゃあ緊張したり落ち込んだり、疲れることだってたくさんあったけど、でもこんなに素晴らしくて素敵な体験はそうそう出来ないはずだ。

——私は幸せ者だ。

それでも、……もしかしたらそうだから、かもしれないが、それでも

ふとした瞬間に脳裏を過るのはアデラとあの日私がその場を後にした時に崩れていった試験会場だった。

燃え盛る炎と何もかもが崩れ去る音に目を瞑って耳を塞いで、私は精一杯やったのだと自分自身に言い訳をする私と、それを冷めた目で見詰める私。

ぐるぐると堂々巡りをするビジョンと想いに、情けないことに疲弊する。

自分で勝手に己を責めているくせにそれに疲れてしまう、だなんて最悪最低にもほどがあるが、考えるだけでどうしようもない気持ちになってしまう。

「だめだなあ、私……」

けれど、時間が経った今ならわかる。

多分、こうやっていつまでもうじうじと失くした友のことを考え続けて囚われている私のことをアデラはよく思っていないはずだ。

いい迷惑なのよ、と、私の都合の良い妄想かもしれないが、きっとアデラはそう言うに違いない。

いつまでもそんなことばかり考えて、やたらと想われる側の気持ちにもなりなさいよ。大体想い方、つてのがあるでしょーが。ほんとに鬱陶しいからいい加減止めてくれる？あんたに心配されるほど落ちぶれたつもりなんてないから。…なんて、叱られそうだ。

厳しいことを言うわりにはいつも笑っていて、課題が終わらないと泣きつく私をなんやかんや言いながら助けてくれて、誰よりも努力家で負けず嫌いだっただ優しい彼女。

場違いな所に入学してしまったと初日から半泣き状態だった一年生だった頃の私に、一番に声を掛けてくれたのもアデラだった。

私を数え切れないほど助けてくれたアデラは、…だけでもういない。

「……情けな……」

そうやって理解しているつもりでいるのに、どうしたって振り切れない想いがあってそれが更に暗い気持ちに繋がってしまう。

いつまでも過去に拘ってはられない。わかっているのに、自分に何度も言い聞かせているのに、考え辿り着く思考の果てはいつも一緒で、自分の短慮さに苛々する。

——でも、もうこんなことばかりはしてられない。

確定ではないが私はライダーになれるかもしれないのだから、相棒まで決まってしまったのだから、うじうじと膝を抱えてばかりではいけないはずだ。

無理矢理でも誤魔化しでも、今はとにかく前を向かなくては。

アデラはいなくとも、私の時間は正常に進むのだ。

ここのところ緊張したり興奮している内は少なくともアデラのことを考えなくても済んだと考えてしまう私も、私だ。見詰めて受け入れて、それから……。

「……………うん、よし。反省会終了」

きつとすぐにはこの気持ちに整理はつけられない。

今までみたいにぐだぐだ悩む時だってあるに違いない。

それでもこうやって、このままではいけないと自分に喝を入れられるくらいには進歩したじゃないかと自身を褒めて、私は閉じた瞼の上に片腕を乗せた。

自分で出来るだけ、……出来ないことのほうが多いしまたすぐに落ち込むと思うけど、でもやれるだけのことはやろうと思う。

……助けられなかった、あなたのために。それが例え、アデラを救えなかった罪悪感から逃れるためだったとしても今の私にはそれすら必要だから、だから、今はその想いを胸に頑張ろうと決めた。どんな形であれ、前を向いて、ゆっくりでもいいから歩くのだとこの数日の間に考えたのだ。

「……………あでら」

…と、そこまで考えて、ゆらりと襲ってきた睡魔に予想より遙かに
疲れていた私の意識は瞬く間に飲み込まれた。

16話：始動

「……確かに頑張るとは言ったけどさすがにこれは頑張らせ過ぎでしょおおおお！」

「口動かす余裕があるならもう少し速度上げてもいいかな、レリア」
「リチャードさんの鬼っ！」

口を動かしながらも、足は休ませることはない。というより休ませられない。足を止めたが最後、私は半端ない痛みを体験することになってしまうから、なにがなんでも走り続けなければいけないのだ。だから凄い速度で移動する面積の狭い地面から落ちないようにするのに今の私は精一杯で、背後で機械のコントローラー片手に私のトレーニングに付き合ってくれている先輩の表情を窺うことは出来ない。が、多分きつと、彼は楽しそうに私があたふた爆走しているのを見て笑っているんだろうなと簡単に予想が出来た。

悪い人ではないしどちらかと言えば優しい人ではあるが、優しさの示し方が分かり難いと言うか…特殊と言うか。飴と鞭を使い分けるプロみたいなのだが、だというのに飴の部分が鞭と紙一重と言うか…。

つまり彼は、人はそれをサドと呼ぶんじゃないか、というような性格の持ち主なのである。

まあなんだかんだでいつもは結局優しいけど…今はまったくもって優しさの欠片もなかった。今日は意地悪一直線だ。

勢いよくロールし続ける地面の上で足を回転させること早10分。既に私は身体中汗まみれで顔は真っ赤なはずだ。

一目見ればああこれがこの子の精一杯なんだなと理解出来そうな状態なのに、この人は更に容赦なく速度を上げるようにするのだから私のこの必死な状態が見えてないとは思えないし、サドだとも思う。…だってそう思うしかないでしょ、どう考えても。本当に今に

も崩れそうなくらいぎりぎりだというのに、更に、とか言うんだから。

「どこをどう見たら余裕そうに見えるんですか!？」

「三週間前より確実に体力も脚力も付いたからこそその余裕なんじゃないわけ？」

「だからどの余裕!？」

気持ちのままに無理です無理です、と何度も連呼すると背後から予想通りすぎる楽しそうな声が返ってきて、うわこの人やっぱり愉快犯だと足の力が抜けそうになった。

もう無理だって何度も言ってるじゃないですか…!

後を振り返ってなに考えてんだ、と怒鳴りたい気分だが、もちろんそんな度胸は私にはない。

そもそも振り返ること自体が出来ない。

少しでも走る以外の動作をすれば、盛大にこけるのが目に見えているからだ。

結局言葉だけで全力で否定するしか対抗する術がない私は、懸命にあーだこーだとりチャードさんに訴えてみるが、ものの見事に全てのらりくらりとかわされてしまう。

…なんか段々遊ばれているだけのようないきなりききたんだけど…。

無理だと訴えるのに走りながら喋り続けているから、元よりゼロ近くだった残りの体力が限りなくゼロになりつつある。

ぜえはあと犬よろしく息切れが激しい私を見て、しかしリチャードさんは表面上は爽やかに聞こえる笑い声で私を褒め称えた。

「凄いな、レリア。超元気じゃん。やるーう」

「喋ってないとやってられないだけで元気があるわけではないんです! 後の八割ほどはリチャードさんのせいだと思います!」

「始めの頃は一言も喋れなかっただろーに」

「それとこれとはまた別問題で…、つあああー！いま上げましたねスピード！！」

私の台詞に被さるようにながしゅん、と機械が作動する音が耳に届く。それと同時に滑る地面…トレッドミル、一般的にルームランナーと呼ばれる機械のベルトコンベア状の踏み台が今までより早く回転しだしたものだから、思わずうぎゃ、とか潰された動物みたいな小さな叫びが口から飛び出した。

うわああもう信じられない…！ついにやつちゃったよこの人…！なにしてくれてんの！？

苦情も申し立てようと口を開くが、突然スピードを上げたそれについていけなくて躓きそうになったので敢え無く断念。なんとか態勢を立て直して足を負けじと回転させる。

なんの合図もなしにスピードレベルを上げるという良い子はやつちやいけないような偉業…悪業を成し遂げた彼は、呑気に背後でがんばれー、なんて宣っている。

このやる…人事だと思いやがって…！

走るために握っていた拳にそれ以外の力が加わるが、それもすぐに走るための力に変わってしまう。なにせさっきの倍くらいの速さで足を動かさないとトレッドミルから落ちる…いや、落ちるなんて生易しいものじゃない。これはもう振り落とされそう、という表現の方が合っていると思う。

さっきの倍くらいの速さで足を動かさないとトレッドミルから振り落とされそうなので、怒る気力や体力も走るパワーに変換させないといけないのだ。

トレーニングの範囲を超えているんじゃないかと錯覚するほど回るコンベアから振り落とされそうになるのを防ぐために、私は死ぬ気でコンベアの上を爆走する。

今なら世界記録でも出せそうな勢いである。……いや、それはさすがに言い過ぎだけど。

てゆーか大体なんでこんなにスピードが上げられる仕様になってるわけ！？そのうち誰も使わなくなるよ、こんなトレッドミル！

「ちよつ、これ本格的に無理…っ！」

「いーから走れ。さもなくばまた落ちてたんこぶ作るハメになるぞー」

「……リチャードさんの鬼！悪魔！」

「お、大したもんだ。これだけスピード上げてもまだ話すだけの余裕が…」

「ないです！ヨユーなんてほんとにまったく全然塵ほどもありませんっ！」

またスピードアップでもされれば、それこそトレーニング初日に晒すことになった醜態を彼の言葉通り繰り返すはめになる。

もうとつくに治ったはずなのに最近まで腫れていた後頭部がズキンと疼いて冷や汗が出た。

あんな痛い思いは二度と御免被りたい。

…滝のように湧き出し流れる汗が目に入ったせいで滲む視界は、果たして本当に汗のせいだけなのだろうか。

「お疲れ様、レリアちゃん」

悪魔のようなトレーニングから解放されたのは、あれから30分後だった。

トレーニングルームに備え付けてあるソファにうつ伏せで力なく横たわりながらよく耐え抜いたな自分…、と自画自賛していると、頭の方から声がかかる。

死屍累々の体で顔だけ上げると、私の癒しであるロヴィーナさんがスポーツドリンク片手に微笑んでいるのが見えた。

「……ロヴィーナさん……」

「大丈夫？ 大分、大変だったみたいだね」

きらきらと輝く笑顔で心配そうに顔を覗き込んでくる彼女の優しさは心身ともに疲れ果てている私にマイナスイオンを与えてくれる。

わあい、癒されるー…。

スポーツドリンクを進めてくれるロヴィーナさんに甘えてそれを手に、むくりと身体を起こしてソファに座る。隣に腰掛けてよく頑張ったね、と笑ってくれる彼女にそれほどでもー、と照れ笑いを返してから、ああそうだと手を打った。

これさっきからずっと思ってたことなんだよね…。

「あの、ロヴィーナさん、ひとつ質問いいですか？」

「うん、なあに？」

ばちん、と打ち鳴らした手に問い掛けを予想していたらしい彼女は私の言葉に驚くことなく軽い調子で頷いてくれた。

それに続けて、トレーニング中にぶわっと湧き出して来た疑問を口にする。

「…私、リチャードさんに実は嫌われてる、とかじゃないですよね？」

もちろん本気で嫌われていると思うわけではない、が、あそ

ここまで嬉々とした顔でしごかれまくると一瞬だが実は…、なんて疑ってしまふ。その質問に、私の意図を察してくれたロヴィーナさんが小さく苦笑を漏らしながらうーんと首を捻った。

それから返って来た答えは、やはり考えていた通りで私も苦笑をす
るしかない。

「自主的にレリアちゃんのトレーニングに付き合うくらいだから、嫌いなわけじゃないと思うよ？第一、嫌う理由もないだろうし。…

だから性格だよ、あは。リチャードの」

「…それもそれで問題な気がします」

「うん…僕も常々そう思ってるよ…」

「いつも愉しそうですからね…あの人、私が汗だくでランニングしてるの見て…」

「……サクちゃんが必死になってる時もなんか幸せそうな顔してるんだよね、彼」

「……………」

「……………」

この話題のせいで、やや青い顔色の私とロヴィーナさんが俯いて膝を見詰めるというなんとも言えない図になってしまった。

恐るべしリチャードさん…。しかも何年来の付き合いらしいロヴィーナさんが言うには、彼の鞭を振るう強さ度合いはこんなもんじゃないらしい。

まだ強く振るえるのね…、鞭。ますます恐るべし、リチャードさん…。

「でも悪い人じゃないから、これからも宜しくしてあげてね」

どんよりとした空気を振り払うように、ロヴィーナさんが先ほどの私がしたように手のひらを合わせて音を鳴らす。

それに慌てて天の助けとばかりに飛び付いて、私も暗い空気を払拭させることに務めた。

「ええ？ いやいや、逆に私がいつも宜しくしてもらってる方ですよ。今日だって紆余曲折ありましたけど、付き合ってもらったことに変わりありませんから」

言葉通り、とても忙しい身であるはずの《支配者》^{ルーラー}であるリチャードさんが私の……というかライダー候補生のトレーニングに付き合ってくれるだなんて本来なら有り得ないことだ。

まだ正式ではないが彼が所属している第3突撃部隊に入ることになっているとは言え、普通ならばWGSFに必ず滞在しているトレーニングトレーナーが《支配者》^{ルーラー}や《竜騎士》^{ドラゴンライダー}の候補生の訓練に付き合うことになっている。

だというのにここ三週間の間、私が王都を訪れた次の日から始まった訓練に専属のトレーナーの姿はなく、変わりにリチャードさんをはじめとするWGSF所属第3突撃隊の方々が先ほどのようにトレーニングの面倒をみてくれていた。

あまりにも忙しい場合は普通にトレーナーの人がみてくれるのだけど、それにしたって可笑しな話だと感じていたから、四日ほど前に同じ第3突撃部隊に所属……する予定らしいサクラスに不本意ではあるが何故なのかその理由を尋ねてみた。

ここでもやたら馬鹿にされたり誰がお前なんかに教えるか等という紆余曲折があつたが、齷齪^{あくせく}しながらどうにか聞き出した話によるとどうやらWGSF内でもそんなことをするのはやはり第3部隊だけらしい。

第3部隊の隊長がルーラーだろうがライダーだろうが、とにかく己の下に就くと確定していなくとも上から任された候補生は自分の隊の連中で育てる、というそういう方針を持っているらしい。だから部下のみなさんもそれに倣っているのだとか。

私からしたら、それはとても有り難い話だった。

人見知りというか極度の緊張しいの私が、これからお世話になる先輩や上司の人たちとトレーニングを通じてそれなりに仲良くなれる機会を与えてくれたからだ。

本当に、これ以上ないほどのチャンスだったし、今でも変わらずそう思っている。

ロヴィーナさんと会う時も…かなり不本意だがサクラスと会う時もとにかくいらぬほど緊張したからこれからまた隊の人と顔合わせをするたびにそんな思いを味わうのかと不安になっていた私にとって、先輩方が直々に面倒を見てくれるトレーニングは絶好のコミュニケーションの場になった。

初めのうちは相変わらず懲りることなく緊張はしたが、ばしばしと容赦なくしごかれたからなのか段々と余裕がなくなつた私は、然程彼等に対して必要以上に緊張することも猫を被ることもなかったから…というよりトレーニングについてくことに必死で出来なかったから、いつもより早く彼等と距離を縮めることが出来た。

これを有り難いと言わずになんと言おう。今ではそれほど気負うことなく、隊の人やそれらに関わりのある人たちと楽しく会話出来るようになったのだ。凄い。

——ただ、そんな有り難い方針を持つてして私を助けてくれた隊長さんに、残念ながら実はまだお会いしたことがない。

リダリス、という世界でも屈指の物資流通国を国際訪問する世界政府の要人の護衛に私が王都を訪れる丁度一日前に出掛けてしまったらしく、三週間経つた今でもまだ帰ってきていないからである。一緒にその任務に借り出されたダンさんという人にも、まだ会ったことがない。

そんなことでここ三週間ほど、どんな人なんだろうとまだ見ぬ上司になる隊長さんを想像するたびに早く会ってみたい気持ちと、やはりその時になると緊張するからまだ遠慮したい気持ちとが交差する日々を私は送っている。

「…そろそろ会えそうな気もするんだけどねー」

二日ほど前に報道で、世界政府の要人が無事リダリスの視察を終えた、と言っていたことを思い出して小声で予想を呟いてみた。

私が言った紆余曲折が可笑しかったのかロヴィーナさんのツボに入ったのかはわからないが、彼女が楽しそうに笑うのを横目に、ぐだぐだと反芻していたここ数日の出来事を脳内で締め括った。…大体いつまでも大切な先輩を放っておくのは失礼だ。

未だに笑いながらレリアちゃんが構ってあげてる気もするけど、なんてからかうように言ったロヴィーナさんにまさかと返してから、ひとつ伸びをする。

そのついでに壁に掛けてある時計に目をやれば、時刻はもう6時を過ぎて7時近かった。

どうりでお腹が鳴ってるわけだ…。

このトレーニングルームは候補生専用の部屋なのでそんなに待遇されてなく、地下に造られてあるので窓がなく外の様子はわからないが、空はもう大分暗いのではないかと思う。

考えながら、今日もたくさん動いたしご飯が恋しいと唸る胃を抱えて隣を見ると、地響きのような空腹を訴える胃の叫びが聞こえたらしい、ロヴィーナさんに笑われてしまった。

…うげえ、女の子にあるまじき品のなさ全開なお腹の鳴り方だったんだけど…。

「もう夕食の時間だね」

恥ずかしくてどうしようもないと表情で語る私に、トレーニングルームに大きく鳴り響いた胃の音については直接なにも言わず、ただお腹が減るのは当然だと暗に言葉にしてくれたロヴィーナさんに感謝しつつ照れ笑いを返す。食堂行かないと食べ損ねるかも、と帰宅

を促してくれる彼女に甘えて、私はソファから腰を上げた。
それと同時にまた私のお腹が鳴って、二人で顔を見合わせて苦笑する。

「え…へへへ、…なんかすみません…」

「いいって、あれだけ頑張れば誰だってお腹減るよね。昼食後から今までずっと動いてたんでしょ？」

「休憩はちゃんと挟んでたんですけど、なにも食べないでやってたんで…」

「水分補給も大切だけど、お腹になにか入れるのも大事だよ。適度に、だけど」

「ですね。身を持って知りました。明日からなにか食べ物持ってきます」

「うん。それがいいね。その方が効率もいいだろうし、やる気もあるだろうし。…あ、そう言えばこの間、サクちゃんもサンドイッチ食べながらトレッドミルの上走ってたかも」

「え、食べながら走ってたんですか？」

「…うん、確か」

「うっわあ…」

「…すごい野性的だよね？」

「…野蛮なんじゃないんですか？」

他愛もないことを喋りながら二人で外に続くドアへと近付いて行く。わざわざ忙しいのに顔を出して話にまで付き合ってくれた先輩のたれに開けたドアを、ありがとうと言いながらロヴィーナさんが潜って行くのを見届けた後、私も一歩足をルームの外に出したところで…なんとなく背後を顧みた。

理由は本当にひとつもなく、ただなんとなく。

先ほど頭の中を駆け巡っていた数日間の反芻が、再び脳内を侵食しだす。

振り払うわけではなく、思うままに思考の波に捕らわれると、走馬灯のようにここで励んだ己のトレーニングの様子が浮かんできた。

「……………」

窓ひとつないやや閉塞感があるこの空間で懸命に体力作りに励んだこの何週間は、とても長いようで、そう感じる以上に早く過ぎ去った。

ライダーやルーラーとしては愚か、まだ普通の軍人でも足りないくらい体力や精神力だが、それでもリチャードさんが言ってくれたようにこの何週間でそれなりに進歩しているような気もする。…なんせ初日はトレーニングについていくどころか開始10分足らずで後頭部に大きなたんこぶを作って医務室に運ばれたくらいなのだから、それと比べればやはり成長しているはずだ。…というよりそう思いたい。

一ヶ月近く家に帰っていないくとも深刻なホームシックには陥っていないし、隊の人間どころかWGSF内で度々会う人とも（一部除く）仲良くなれたのも私からしたらそれだけで十分な成果だと思う。後は、隊長さんともうひとりの隊員さんに会えば、知り合いにならないければいけない人との顔合わせはほぼコンプリートである。

凄く凄く小さな歩幅かもしれないけれど、それでも確実に後退ではなく前進している自分を感じながら、私はくるりと身体の向きを変え、ロヴィーナさんの後を追った。

背後ではたん、と扉が閉まる。

「レリアちゃん？どうかしたー？」

「いえ、大丈夫です！すみません、いま行きまーす！」

17話：第一関門来たり

「……………え、もう？」

久しぶりにWGSF本部に顔を出してくれた二口バニアさんと紅茶やら茶菓子やらを美味しく頂きながら楽しく談笑…している最中にさらりと発せられた台詞に、私は優雅に傾けていたカップごとびたりと固まった。

ただ単純に理解出来なくて数秒、その後、意味は咀嚼出来たはいいが往生際悪く理解したくなくて数秒。その間で、人間に器用にはたんと耳を半分に折って聞きたくない台詞をシャットアウト出来る機能があればいいのに、なんて場違いなことを考える。

けれど残念なことに人間にはそんな機能ついてないし、あつたとしても私はもうそれを聞いてしまったのだから今さら意味はない。

…と、いうか、現実逃避はさて置き、…本気なのだろうか。二口バニアさんのさっきの言葉は。

曰く、そろそろ相棒あいつと交流してもいいんじゃないか？…だ、そうだ。そろそろあいつと…交流？

頭の中できにかくその言葉を繰り返す。

あいつ…あいつ…、あいつって言えばやっぱり…：“彼”…だよな？咀嚼して咀嚼して、ようやっと嚙下したと同時に、私は自分でも吃驚するくらいの速さで顔と手をぶるんぶるんと左右に振っていた。いやいやいやいや！無理でしょどう考えたって！！

「無理ですって！普通に考えて不可能ですって！」

「不可能を可能にする《竜騎士ドラゴンライダー》候補生がそんな弱気なこと言うてどうする」

「…なんかすみませんでした」

最もなことを言われてしまって大人しく引き下がった私を見て、二口バニアさんが笑う。

なんか変わったなレリア、と嬉しそうに頭を乱暴に撫でてくれる彼から頂戴した言葉にそうかなと首を傾げながら、でもやっぱりと先ほどの台詞に食い下がった。

「…まだ私、軍人クラスでもないのに」

「一般人、つてわけでもないだろう。それに、プリゼーラで培われた知識も経験もある」

「それは…まあ…」

落ちこぼれでも一応は世界屈指のマンモス学校、公立プリゼーラ高等学院の生徒だったわけだし…、と二口バニアさんに渋々肯定してはみせたが、それでもやはり納得がいかない。納得がいかないという心の準備が出来ない。

いつかは直面する壁だとは思っていたけれど、まだ一ヶ月余りでもうその壁と向き合わなければいけないのか、という気持ちの強いのだ。

やらなければいけないのは重々わかっているのだけども…。プリゼーラで培われた知識も経験も、もちろんないわけではないけれど、それが凄く役に立つか否かと聞かれたらすぐにはイエスとは頷けない程度のものであるし…。

…ちなみに、ただでさえ成績が崖っぷちの私がライダーになるためとは言え何ヶ月も学院を休むのは冗談抜きでやばいのではまさか留年…と、王都に滞在してからこの一ヶ月余り心底憂いていた問題があったのだが、どうやら二口バニアさんが我が家に訪れたあの日にWG SFが新人育成期間として学院に公休扱いを頼んでいてくれたらしい。

この間、久しぶりに連絡をとった時に母がそう教えてくれた。…聞かなかった私も私だが、出来るならもつと早く教えていただきたか

ったものである。

毎年何十、時には何百もの《支配者^{ルラー}》候補生を輩出しているプリゼーラとWGSFは浅からぬ仲らしいので、学院長は快くその申し出を承認してくれたらしい。

国のために己のために、延いては世界のために頑張るのですよ、と学院長が母伝いに私に下さった伝言に、なんか自分の身の上に起こっているとは思えないほど規模の大きな話だ、とプレッシャーを感じて肩が重たくなったのは言うまでもない。

苦くも思い出された学院長の伝言に今の状況も相まってずううん、と暗くなる私に、二口バニアさんは優しく諭すように話を続ける。

「王都に来たはじめの頃より大分成長したんじゃないかと、ロヴィーナが褒めていたよ、レリア。俺ももちろんそう感じたし、リチャードも…あいつはなんか笑いを堪えながらだったが、それなりだと思っと思ってた。サクラスだって表面上には出さないが、丸つきり認めてないわけじゃあるまい。…お前の言う軍人の基準値が俺には今一わからんが、別にいいじゃないか、一般人に毛が生えた程度でも」

「……軍人の基準値がわからないって、それでいいのか二口バニアさん…。あなた仮にも軍のお偉いさんなのに…」

「軍事学も教わったんだろう？」

「え？ええ、まあ、…触りだけですけど」

「だったらそれで十分だ。第一、なにがそんなに不安なんだ？お前はあいつと正面切って対峙したこともあるくらいだ。なにも心配することはないはずだぞ」

「あれは咄嗟というか、反射というか…、…身体が勝手にと言いますか…。とにかく緊急事態だったからで出来たことであってですね」

「よし。だったら今回もそれで行こう」

「私と彼を緊急事態に陥らせるつもりですか！？」

「冗談だよ」

「……………」

このおじさんは…。

真顔で心臓に悪いことをさらりと言つてのけた二ロバニアさんに微かな不信感を抱いた。平生だったらいいものを、どうするべきかの不安とこれからへの緊張に頭をフル回転させてる人にそういう微妙な冗談は言わないでほしい。

しかし、二ロバニアさんと学院長の励ましと言う名のただのプレッシャーを改めて噛み締めてみて考えるに、いつまでも無理です出来ません、ではやはり済まない話だと思つた。そんなことで通る出来事ではないし、なによりそんなの、私が嫌だ。出来るとこまで頑張ると拙いながらも心に決めたのだから、弱音ばかり吐いてはいられないのだ。

「あいつはこの一ヶ月間、お前のことを待ち続けている」

「……『騎手の方が尻込みしてどうする』?」

「わかつてるじゃないか」

伏せた頭の上に乗った手のひらと共に落ちてきた言葉に先回りをし、疑問符をくっ付けると、二ロバニアさんが頭上で笑う気配がした。包むようにして持っているカップの中身がゆらりと揺れる。

私が心の中で葛藤しているのをわかった上でこういう台詞を訴えてくるんだから、そうは見えなくともこの人は軍人さんなんだなあ、となんとなく感心して、そうしてから、ああいや違った感心なんてそんなことしている場合じゃないと気付いて顔を上げた。

頭の上に乗っていた二ロバニアさんの手のひらが弾みで落ちる。

「レリア?」

勢い良く姿勢を正した私に驚いたのか、二口バニアさんが頭から滑り落ちた己の手と私の顔を交互に見比べてから首を傾げる。

その表情を、もつとの驚きとそれから喜びに変えてやるつもりで、肺一杯に吸い込んだ息を言葉に具現化させて吐き出した。

「…、……いきます」

固く強張ってしまったかもしれないが、それなりに意志を持った声音だったと思う。

何も言わない二口バニアさんにもう一度確かめるように行きます、と先ほどよりはつきり口にすると、彼は大きく瞬きを繰り返した。

「…レリア」

「行けます。…大丈夫です」

私の決断が予想外だったのか、それとも疑っているのか、とにかく瞬きばかりを繰り返す二口バニアさんに思いをぶつける。

そうすると、その驚きの表情が段々と明瞭に嬉しそうになっていくものだから、私はなんだか急に恥ずかしくなった。

自分で嬉しそうな顔にしてやるって、意気込んだくせに…！

「レリア！」

「うわあ、止めてくださいそんな当たり前なこと言っただけで激しく感動するの！」

「なんて言うか、うん…そうだな。親の気分だ。成長したなあ、レリア。偉い偉い」

「このくらいで褒められる私って一体…！」

「いいじゃないかお手軽で」

「それは私がつて意味ですか！」

本当に親のように喜んでくれる二ロバニアさんに顔が熱くなる。かいくりかいくりと撫で回される頭に、更に熱が身体中に集まる。成長だなんだと笑う彼に、ほんとにこの程度で喜ばれるんだから（ポテンシャルが人より低かったのもあるけれど）私はまだまだ頑張らなくちやなと改めて痛感したし、でもやっぱり嬉しい気持ちもあった。こんなに私のことで喜んでくれるなんて…と。
…残念ながら、二ロバニアさんの次の台詞で全部おじゃんになったけど。

「よし、そうと決まれば善は急げだ。明後日辺りにでも会いに行くか」

夕飯はカレー！くらいのノリで掲げられた提案にぎょっと目を剥いた。

え、明後日！？

幸せ花気分は何処へやら、すっかり現実に取り戻される。

「それこそ早っ！え、うそ、明後日ですか？二ロバニアさんのそろって明後日？」

「今日がよかったか？」

「明後日がいいです！凄いそろそろしてる！ナイスそろそろ！そろそろって言ったらやっぱり明後日ですよね！」

「生憎と俺は一緒に行つてやれないが、隊の奴が引率してくれるだろう。頑張れよ」

「…仕事ですか？」

「世界政府に呼ばれてるんだよ。まったく、新人の引き抜きくらいで毎年大袈裟な」

「……お疲れ様です」

世界政府、だなんて言われたら付いて来てほしかった、なんて我儘

は言えまい。

とんとん拍子で決まっていって私と“彼”との交流会の予定に少しの不安を覚えるが、行けると宣言してしまった以上行くしかないだろう。さすがに竜がなんだー！というような強い心持ちではないが、なにより本気で行くつもりでいるのだし。

よし、と気持ちを強く持とうと意気込む私の隣で、二ロバニアさんが楽しそうに指を鳴らす。

音につられてなんだなだと顔をそちらに向ければ、彼はアドバイスだと言って人差し指を立てて、こう続けた。

「合言葉は、騎手の方が尻込みしてどうする、だからな。忘れるなよ」

「え、合言葉？そんな軍事的な…」

「後は…そうだ。あいつはお前の相棒だろう。名前を考えてやれ」

「な…」

「なまえ」

「名前!？」

連続して出てきた予想外の言葉に今度は耳を疑った。特に後半。

合言葉がアドバイスなのにも疑問だったが、特に後半。

なまえって…名前だよな。私の名前はレリア・シュープリーです、のなまえ。

人間なら余程のことがない限りは持っているあれ。

その名前を…私が“彼”につけてやれですと…!？

理解出来るがそれを脳が拒否する言葉をぼろりと零した二ロバニアさんの方を向くと、彼は不思議そうに首を傾げた。

どうやら命名する前で躓いているとはいざ知れず、単純に名前が決まらなくて困っていると思っただけらしい。

「なんだ、名無しの権兵衛か？まあそれはそれで味があつていいと

思うが…」

「いえ違います考えますちゃんと！」

危うく私の相棒が名無しの権兵衛になりそうだったのを阻止したところで、かしどうしたものとまた頭を抱えなくなった。

だって…名前って…。

そりゃあこれから一緒に…たぶんだけれど働いていくことになるわけだから、ずっと“彼”とか竜とか他人行事みたいと呼ぶのは可笑しいとは思っているけれど、しかしまさかここで命名しろと言われるとは…。予想外だ、ほんとに。

「なまえ……」

なんというか、現実味がないのだ。

犬とか猫とか、一般的なペットに命名するわけじゃない。

食物連鎖の上位に食い込む空の王者の名を頂くあの竜に、私自身が名前をつけないといけないくて、しかもその子は私の相棒になる子なのだから更にプレッシャーなのだ。

なんて冗談みたいな話なんだろうか。…悲しいことに冗談なんかではないのだからこそ、こうして悩むハメになっているんだけど。

「ど、どうすればいいのやら皆目見当が付きません…」

「そんなに悩むことか？ポチとかでいいじゃないか」

「…犬じゃありませんよ」

「タロウ、ゴロウ、ジロウ、タマ、ミケ、ブチ…後は、…シロ？」

「それも大方、犬猫につける名前でしょう。大体、あの子白色じゃないじゃないですか」

「ま、俺が決めたって仕方ないからな。ちゃんとお前が考えてやれよ」

「…はあい」

不思議な助言を残して、二ロバニアさんは自分のカップの紅茶を全部飲みほした。

長閑な気持ちと雰囲気楽しんでいた茶会は、なんだか可笑しい方向に曲がってしまつて修復不可能だ。折角の休憩時間が、とは感じなかったけど、心は少し重くなる。

新たに出来たふたつの試練に脳内の大半を占められながら、冷えてしまった手の中にある紅茶が揺れるカップを見詰めて、私はこのところ悩んでばっかだなあと頭の隅で思った。

18話：三度の対面

——騎手の方が尻込みしてどうする。

二ロバニアさんが教えてくれた言葉を心の中で繰り返すと、幾分気持ち前向きになった。うんそうだ、私が動かなきゃなにもはじまらないじゃないか。

「……………」

心の中で繰り返した合言葉は、しかし“彼”とちらりと視線を合わせた瞬間に木端微塵に砕かれてさらさらと消えてしまった。

騎手の方が尻込みしてどうする、…だって？そう割り切れて動けたらどんなに楽か。出来るんだったら最初からやってるんですけど！この場にはいない二ロバニアさんに八つ当たり半分に逆ギレして、あまりの緊迫に可笑しな方向に作動した怒りの気持ち地団太を踏みそうになるのをぐつと堪えた。

…そんなこととして生きていられる自信が私にはない。

「…あの、ですね……………」

二ロバニアさんがそろそろ会って来ーい！とダイナミックに私と“彼”とのデート（仮）を決めてしまってから、結局名前も決まらないうまま時間は無常にも過ぎ去り、いやだいやだと胃を痛める私を無視して、…そして会いに来てしまっているという今の状況に至る。ここでもまた、何も出来ないまま時間は無常にも過ぎ去って行くばかりだ。

「……………そ……………その……………」

…見られている。それも凄く。かなり真剣に。まるで視線の糸でぐるぐるの雁字搦めにしようと企んでいるかの如く、見詰められている。

そこには打算等の邪な感情は一切なく、ただ本当に純粹なる本能のままに私を直視してくるものだから、余計どうしていいのかわからなくなるのだ。

私が胸を動かして呼吸をするだとか、緊張でいつもの倍はしている瞼の動きだとか、そういった小さな一挙一動全てを見逃すまいと、目玉を動かすどころか瞬きさえ極力しないその姿勢には、可笑しな話かもしれないけれど感服する。静かに、なんの音も立てずただ私に神経の全てを集中させているのが肌を通して伝わってくる、それがまた負担となって私を押し潰そうとする。

ひっひふー、となにを生み出そうとしているのかわからないラマーズ法で息を整えながら騎手の方が尻込みしてどうする騎手の方が尻込みしてどうすると、とにかく心の中で繰り返すが、そんなことをしているうちに自分でもなにを唱えているのかわからなくなった。

「きしゅのほうがりごみしてどうするきしゅのほうがりごみしてどうするきしゅのほうがりごみしてどうするきしゅがしりごみどうするしてしり…」

…冗談じゃなく威圧感に殺されそうだ。

未だ確認出来ない異種族^{フリース}が世界中にまだごまんといると言われている中、それでも揺るぎなく頂点に君臨するとされている竜が目の前にいると考えるだけで、もうどうしようもない。

そんな竜の背中目掛けて石を投げてしまったという事実が、今更になって威圧感と共に押し掛かって来る。おまけに、投げ付けて当ててしまった当人とご対面中とくれば、これはもうこうやって生きているだけで丸儲けと考えるべきだろうか。

どうすればいい？どうしたらこの状況を打破出来るのだろうか。

大体そもそも、どうしてそんなに刺すような視線を私に送り続けているのだろうか。

己の内に湧き上がった疑問は、けれどさして悩むまでもなくすぐに答えが見つかった。

…なんとなく、ほんとうになんたなくだけど、たぶん、…“私”だからなのだろう。

可笑しな自意識過剰ではない。と思う。

私の中にもぼんやりとある、見ず知らずの竜を目にするのと今目の前にいる“彼”を見るのでは何か違う感情が働く不思議な感覚が、きつと“彼”の中にもあるのだろう。

なにが、と問われても明確な説明は出来ないけれど、ほんとうに微かで微弱ではあるが、それでも一度だけ、“彼”と私が《コネクション干渉》をしたことがあると胸の内では知らせてくれる、ナニか。それが私同様、“彼”の中で燦っているに違いない。

「き、きしゅのほうがりごみしてどうする…きしゅ、しりごみきしゅ…」

だからきつと“彼”は、生来感じたことのない感情を私のことを見極めることで理解しようとしているのだと思うし、私の出方も窺っているはずだ。

“彼”が何十、何百を生きているかは知らないが、明らかに私なんかより長い人生で、取るに足りない人間の小娘如きに感じたこともない感情を抱くのは彼等竜にとって耐えがたい屈辱ではないことを祈りつつ、詰めていた息をか細く吐き出した。

…仕方ないとは思う。やっぱり襲いかかってこないだけかなりいいとも思う。

でもね、そうは言ってもね…いくらなんでも、見過ぎじゃない…？ 全身隈無く余すところなく視界に入れられているものだから、どこに目線をやっていいのかいまいちわからなくて視線が馬鹿みたいに泳

ぐ。

わかる。気持ちとはとてもよくわかる。見極めたいのも、私だってなんとなくしか原理を理解していないし、理解していてもこの気持ちは不思議で仕方ないのだから、これっぽっちも原理なんか知らない“彼”したら不明瞭過ぎてもう気持ち悪いだろう。

それでもさすがに、限度というものがあるはしませんか…？

竜という種族は、もう少し己が下位の者たちに及ばす影響力を自覚すべきだ。

ぎらぎらと輝く瞳はいくら知能が高いと言われていようが結局は動物の本能で鋭く爬虫類的で感情が読み取れない、時折覗く一本一本が私の腕より太い牙は恐怖しか煽らないし、なにより威風堂々傲岸不遜、纏うオーラが冷たく痛いのは、たったそれだけで、でも一番の凶器になる。まさに王者の風格だ。無条件で平伏したくなる。

…無理だ、考えなくったって私より遙か彼方ランクが上な“彼”と分かり合うだなんて、まして名前を付けて騎乗しろ？

遠回しに自殺しろって言うてるのと同じだ！

突き付けられた条件が高い壁となって行く手を塞ぐ。緊張からか背中なんか冷や汗でびっちょりで、足だってそこだけ局部的寒さに襲われたみたくながたと震えている。

どうしたものかと半ば諦めかけた思考でそれでもなお、一生懸命に考えるが、良い案なんてひとつも思い浮かばなかった。

ぎらりと輝く竜の大きな瞳が私の頬に流れる汗を見詰めるそれに、背筋が凍る。

確か、ここに連れて来てもらう時にリチャードさんがよっぽどのことがなければ襲われることはないんじゃない、とかなんとか言ってお下されたが、そのよっぽどがなんなのかを聞いてくればよかったかもしれない…。

「あの…」

定まらない視線で相手をどうにか見ながら細く声を上げてみるが、無論そんなことでどうにかなる相手ではないのか十も承知だ。

回遊魚のように泳ぐ視線と千鳥足のように覚束ない声音で、あのかそのとかえーとか、意味を成さない単語しか吐き出せない自分を心の中で呪った。

知能が高い竜に話しかけるのは可笑しいことではない。

けれど、大して親しくもない人間に唸るにも近い単語の数々を発せられたくらいでは、いくら竜の知能が高くとも意味を汲むことは不可能に近い…とわかっていながらも、結局は短い母音程度しか口からは出てこない。

むしろなにを話せばいいのか、それ自体が不明だ。

竜と会話って、なにをどうすればいいのだろう？犬猫に話しかけるノリでいいの…？

今日はいい天気ですね？…生憎とここは地下だ。

私、レリア・シュープリーといいます？…だからなんだ。それがどうした。

気分は如何？…どう考えたって麗しくない答えが返って来るとしか思えない。

元気ですか？…そんなもの見ればわかる。…たぶん、元気だ。

初めて会ったあの日と、WG SFに訪れた日以来、私は“彼”と会っていないかった。

かなりインパクト大の出会い方をしちゃったものだから、私が“彼”に対して小さなトラウマを抱えてしまっていたのも理由のひとつだが、それよりも“彼”自身が負っていた傷の方が問題だったのだと思う。

初対面の時、“彼”が人間とフリークの、双方どちらにも何ひとつ利益にもならないような首都への侵入を犯してまで、人の街に逃れなければならなかった原因のひとつが、多分その怪我だった。

空の王者と称される竜である“彼”は、あの時とんでもない大怪我を負っていた。

滅多なことでは傷付かない鱗に覆われた巨体は血に濡れ、折れてしまったらしい各所の骨が皮膚を突き破って顔を覗かせ、口から洩れるのは荒い息と大量の血液、ほんとにどうして今生きているのか不思議になるくらい、“彼”は重症だった。

そんな風に瀕死の状態で、どうにかこうにか正気を取り戻したらしい“彼”はライダーとの衝突を避けるために痛む身体に鞭打ってその場を飛び立ち、そうして再びこのWGSFで再会した時も初対面の時とさして変わらぬ状態だったにも関わらず、…今ここに

“彼”の身体は、あの時の重体の見る影もなく完璧に、本来の誇るべき逞しく強靱な元の四体に戻っていた。

死にかけだったというのに、人間には考えられないほどとてもない回復力である。

まあ、生命力の強さと寿命の長さは他の生物の類を見ないほど飛び抜けて凄いらしいから、私と別れた日から約一ヶ月は経っているし、納得と言えば納得なのだけど。

更にここは政府機関であって、ライダーの本部でもあるのだから竜の怪我の面倒などお茶の子さいさいであるだろう。普通に考えれば滅多なことがない限り、最悪の事態などそうそうないはずだ。

…と、いうわけで、“彼”はたぶん元気だ。

頭の中で作成したいくつかの会話の取っ掛けりに、全部自分で数秒とせずに全部却下マークの判子を押してしまつて落ち込む。

いや、自業自得なんだけど…ここまでなにも出来ないよね…。

「……話題がないです二口バニアさん…」

ヘタレだ、チキンだ。救えないほどのビビリだ、私は。

でも、へたに大きな言動で刺激して襲われたりしたら笑い話にもならないじゃないか。

“彼”の巨体に巻き付く拘束具が目に入らないわけではない。万が一なにかあったら、あの拘束具が締め付けてくれるし、場合によつ

ては微弱な電気が流れて失神させることも可能らしい、まさに私にとって心の拠り所だ。

でも、もしかしたら大丈夫なんじゃないかと思う気持ちが頭の何処かにあるのも事実だった。なにが大丈夫って、そんなに怖がらなくとも、“彼”は私に危害なんか加えないんじゃないかって意味の、ダイジョウブ。

恐怖よりも、どちらかと言えば緊張の方が断然勝って私の身体を固くしているのは自分のことだから自分がいちばんわかっているし、なにより会いに来てからの数十分間、“彼”はほんとうにただ私のことを見詰めるだけだ。

食べてやろうとか、殺してやろうとか、悪意に似たものの欠片も感じない。

…《竜騎士》^{ドラゴンライダー}どころか《支配者》^{ルーラー}としての資格すらない私が言ったところでなんの確証もないが、…きっと、平気なんじゃないかと思う気持ちは確実にある。

「……うんよし」

ぐるぐる内臓辺りを回る負の感情を振り払うようにして、私はなんとか顔を上げた。

大きな鰐のような蜥蜴のような爬虫系統の顔付きの、“彼”と目が合う。

ここに来てからの数十分で、ようやくと正面から視線を交わらせることが出来た。

煌々とした輝きを放つ“彼”の瞳を半ば意地になって見詰め返して…。

「先輩に相談だ」

ここまでが私の限界だ。

…やっぱり私はぐぐりなのである。

19話：作戦

「むむむむむつむ、無理っ…じゃなあーい無理じゃない無理じゃない出来る出来る私なら出来るやれば出来る子私はやれば出来る子やって出来なかったらそれはその時考える！」

「よーし、いいぞレリア。ナイスポジティブ」

目の前に顔がある。

それは凄く大きくて細長くておまけに横幅もあつて、触るとつるりとしていて冷たそうだ。

そんな事実確認を半ば現実逃避気味に考えていれば、唐突にぶわつと生温い風が身体の全面にかかつて、その生温かさに背筋が冷えた。うおおお、ほんとに冗談抜きで近い距離にいるよ私ってば…！

たらりと頬を伝う冷や汗と、やんややんやと背後から愉しげで無責任に私を囁し立てる先輩の声に、自分が置かれている状況がありありと表れているような気がして悲しくなった。

「そのまま手エ伸ばせば届くよ」

「うわああ！もう止めて下さい冷酷無慈悲な現実を突き付けるのは！」

…結果から言えば、私は相談する相手を間違えたのだ。明らかなる人選ミスである。

なんであの時この人にヘルプの声をかけちゃったのかな、私はさ！今さら変えようのない過去の自分を叱り飛ばしてもどうにもならないのはわかってる。

でも、もし自分自身に言い訳をさせてもらうなら、二ロバニアさんは相変わらず政府関係のゴタゴタに巻き込まれていて忙しく、ロヴイーナさんは任務で首都へ、サクラスに相談するのは絶対いやだし、

アニタは論外で、まだ見ぬ隊長と隊員は未だに帰還していない。じやあ後は誰が残っているかと言えば…この人しかいなくて。

頼れる人たちのスケジュールを知って、このままじゃ助けを求める人がいないのでは…と途方に暮れかけた私の前にリチャードさんが姿を現した瞬間は嬉しくて飛び上がって飛び付いたのに、今になつたらあれは大いなる間違いだつたのだと声を大にして言える。

数十分前の自分に、止めなさいその人は天使の皮を被った悪魔だよ、と教えてあげたい。

…でももしたら結局誰にも助けを求められなくて、ひとり物悲しく落ち込む自分の姿がありありと想像出来てしまったので、これでそれなりによかつたんだと今の自分に言い聞かせた。

「今さらですけど、ほんとに本気で言ってるんですよね!？」

こちらは半ば命の危機に瀕しているというのに、まるでバラエティ番組を見ているみたいに笑って茶々を入れてくるリチャードさんが有り難くも御教授して下さったアドバイスによると、取り敢えず触つてみないことにはなにも始まらないよ、らしい。

触るつて、竜に…？なんていう疑問は愚問でしかなく、さすがにそれは無理だと顔面を青白くする私に、騎乗しなきゃいけない相棒相手に触れないなんてそれ以前の問題だからと正論を頂きながら、私はリチャードさんと“彼”のいる地下室まで逆戻りしてきた。

戻つて来るなり機嫌の良さそうなりリチャードさんに拘束具で制限されている“彼”が近付いてこれる範囲の縁ぎりぎりに立たされて、そうすれば元から私に興味を示している“彼”が私に近寄つて来るのは当然で、結果として今の私の目の前には首を精一杯伸ばした荘厳な竜の顔がある。

あまりにもぶつ飛んだ現実には頭がくらくらするが、こんなことで躓いているわけにはいかないのだ。だって私は、行く行くはこの竜に乗らなければいけないのだから。

「つてなれば百点なんだけどなあ…！」

そういう気持ちは有り余るほどあるが、現実はそう甘くない。

いつまでも腰が引けている状態では駄目だと自分に言い聞かせても、頭はくらくらするし内臓は引っくり返りそうだし心臓は口から飛び出そうと暴れ回っているし冷や汗はとどまることを知らない。

この程度で尻込みしている場合ではないと理解はしているが、どうにも身体がそれを拒否してしまう。…まあ単に、その気持ちとやらが身体に拒絶されてしまうほど小さな決意だからいけないのかもしれないのだけど。

とにかく、どうにもこうにもにっちもさっちもいなくなつて、本気なのかそうなのかと後ろをちよつとだけ振り返つて親愛なる先輩に問いただせば、返ってくるのはやはり予想していた答えだった。

「俺は何時でも本気ですよ、お嬢さん」

「嫌な真面目さだ…！」

てゆうかその言葉自体が嘘過ぎて話しにならない。

この人が本気になるのは人を虐げる時とか嘘を吐く時とかアニタと遊ぶ時くらいだろうに、いけしゃあしゃあと何時でも真面目な俺すてきとか人の神経逆撫するようなこと背後で言い募るリチャードさんには、もう善良的なアドバイスは望まないことにした。

なので、目の前にある竜の鼻先から視線は外さないまま、とりあえず一番重要なことだけ尋ねてみることにする。

「私、死にませんよね!？」

出した自分が言うのもなんだが、かなり情けなくて切実な声音だった。

その声の震え具合を聞いて、後ろでリチャードさんが爆笑しているが……いやいや、だってこれ、ほんとに生命の危機に晒されている気がしてならないんですけど！笑い事じゃありませんよね！？

まあ、でもリチャードさんがああして笑っているくらいなのだから実はそんなに危なくないのかもしれない。うん。だってほら、いくらなんでも死ぬか生きるかの瀬戸際に立たされて顔面蒼白で顔の筋肉が引き攣っている後輩を見て、ひいひい言いながら笑っているほどえげつない人では、……ない、はずだし。

しかし、悉く現実……いや、リチャードさんは甘くなかった。

この人は、たぶんきつと誰かが慌てふためいたり困ったり窮地に追い込まれたりする、そういうのを見るためにライダーになったに違いない。じゃないと説明がつかない。

勝手にそれほど危険じゃない、と判断して落ち着く私に、げらげらと所々に遠慮のない笑い声が混じる台詞が叩き付けられた。

「あんまり大声出してっつと、もしかしたら興奮した相棒に食われてお陀仏するかもね」

「っ……！うっうっう、うそそそそそそそそそそそ」

「残念ながらほんとー。事例もあるし、気を付けな」

「ひいー……！？」

なんでそういうことさらつと告白しちゃうの！聞いたのは確かに私だけでも！

しかも事例があるだって……！？

そう言われれば、……いや、言われなくともわかりそうなことだ。

リチャードさんが言う事例は知らないし思い当たる節もまったくないが、動物の目の前で、しかも危険過ぎる竜の前で大声を出しちゃういけないなんて、普通に考えて常識だ。

《竜騎士》^{ドミニクライダー}や《支配者》^{ルラー}を目指していなくとも、異種族と隣り合わせで生きているこの世界の人間ならば誰だって心得ていることなの

に、ルーラーどころじゃなくライダーになるために奮闘している私が初歩の初歩、というよりもほんとにどうしようもない常識を忘れるとは…。

そろりと視線を上げて高い位置にある“彼”の瞳を覗き見すると、瞳孔は開いてないし目付もたぶん温厚（半ば希望によるところがある）で、なにより理性と知性を湛えたまさに竜を代表する水面の瞳だったので安心した。

にしたってちよつと頭足りない過ぎやしないか、私…。

「うっえ…」

「どうした、新米候補生。後ろ向きなポジティブになるんじゃないかなったの？」

生憎とそんなことを言った記憶は欠片もない、…が、それを言い返すほどの勇氣と氣力が今の私には残されていない。

目の前にいる、というより壁の如く聳える竜に神経を尖らせて削るのにもう精一杯だ。

“彼”が息を吸い込むたびに私の髪は吸引されるように大きく揺れて、吐き出されると毛が全部吹き飛ばされそうなほどの風圧が身体中を襲う。

距離があっても凄そうな鼻息が前代未聞の距離にすることでそれに拍車を掛けている現実が重く肩に押し掛かってくる。

と、いうか、さっきから凄い鼻息なんですけども…これって匂いを嗅がれているのかな…。

そうだとすれば、なんとなくその動作が犬っぽくて可愛いなとか思ってしまった、無駄なほど力んでいた身体の力が少しかだけ抜けた。

そんなことで和んでいる場合じゃないんだけど、ね…。

竜にこれだけ接近するのにもぎゃあぎゃあ言いながらいらないほど時間を遣ったが、やっとこの状態になれてからも売るほど時間を費やしている。

馬鹿みたいでありえないことをしているのだと現状を拒否する思考と、さつさと進展しろ、と己を急かす思考とを戦わせているからこそ、この状態のままなんだけど……けれどやっぱり、このまま進展せずだと冗談抜きでまずい気がする。

荒っぽくはあるがリチャードさんが提案してくれたこの方法はやっぱりちゃんと道理である気がするし、むしろそのくらいいいと鶏以下の私は前に進めない予感さえするのだ。

だってほんとに、自分でも吃驚するくらい、成長を歩む歩幅が狭いんだもん……。

過去の自分の数々の失態や醜態が思い出されて思わず場も弁えないでげっそりする。

けれどすぐさま竜の目前にいたんだったと思考を切り替えて、私は“彼”を刺激しない程度に軽く頭を振った。

——うん、よし。

暗い気持ちは出来得る限り追い払った。

それから、合言葉は騎手の方が尻込みしてどうする、だったよね。

私のチキンな性格をがっちり把握している二口バニアさんがそう言うんだから、きっと私にとってプラスになるアドバイスに違いない。いつまでもその場で足踏みばかりしちゃいられないと、お腹に力を込めてからゆっくり“彼”と視線を合わせた。

そこにあるのは緊張してひとりあたふたする私なんかとは天と地とも差のある、変わらず凜々静かな黄金の眼だった。

……この間は目を合わせるだけで重労働だったのに、こうも簡単に視線だけでも噛み合わせられるようになったのだから、これだってそれなりの進歩かもしれない。

そんなことを考えながら星のように輝く瞳を見詰めていると、……なんとなく気付くことがあった。気付くっていうか……感じることもかもしれない。

知性の泉のような“彼”の瞳は、凶暴な感情なんかはひとつも浮かんでない、ほんとうに私がなんなのか、たったそれだけを考えてい

ると一目でわかる純粹そうな澄んだ色を放っている。

…今まで竜の前にいるんだって、その事実ばかりに囚われていたから思いもしなかったけれど、こうして深い色をした双眸を見詰めていると、怖くないと言えば嘘になるが別段そんなに慄かなくともいいのかもしれないと思わされた。

前回だって、恐怖よりも緊張が大半を占めていたわけだし…。

あれ…ひよっとするとちよっとこれ、もしかするとただ触れるかもしれない…？

湧き上がった珍しく前向きな提案を、自分の中の小さなポジティブが一生懸命支援して後押ししている妄想が頭の中を巡り出す。

ほらほら、いけるって絶対！二ロバニアさんだって言ってたでしょ、騎手の方が尻込みしてどうする、って！今こそそれを実行するべきだよ、レリア！大丈夫だって！この子はいずれ、きみの最高のパートナーになるんだから！

天使の羽根をくつつけたちっちゃいポジティブが、暗い私を押し退けて動かそうとする。

いやでも、…確かに言う通りかも、しれない。

騎手の方が尻込みしてどうする。今ここで、それを活かさなくていい活かす。

今日に限ってやたらうるさいポジティブに唆されるようにして、私は汗でびちょびちょの手をゆくり身体の横から持ち上げてみた。いつの間にか、茶化して笑っていたリチャードさんの声も聞こえなくなっている。

明らかにチャンスだ。集中して、“彼”とコミュニケーションを取る最高のチャンス。

そろそろと、“彼”の様子を窺いながらも確実に手のひらを鼻先へと近付けていく。

その一瞬一瞬がめちゃくちや長いようにも短いようにも感じられて、ごくりと喉が鳴った。

センチ単位でどんどん進んで行く手と、なんのアクションも起こさ

ず大人しいままの竜。

緊張がピークに達するその前に、私は覚悟と淡い期待を胸に抱いた。もう触る！なにがなんでも触る……！

ひんやりとした空気が、爬虫類質の竜の肌から漂ってくるのを感じられるほど近くまで手のひらが接近して、それから……。

「……うっ、うりゃっ」

ぺた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9241j/>

ゼロベース

2011年11月16日13時11分発行